史実 山田長政

江崎惇

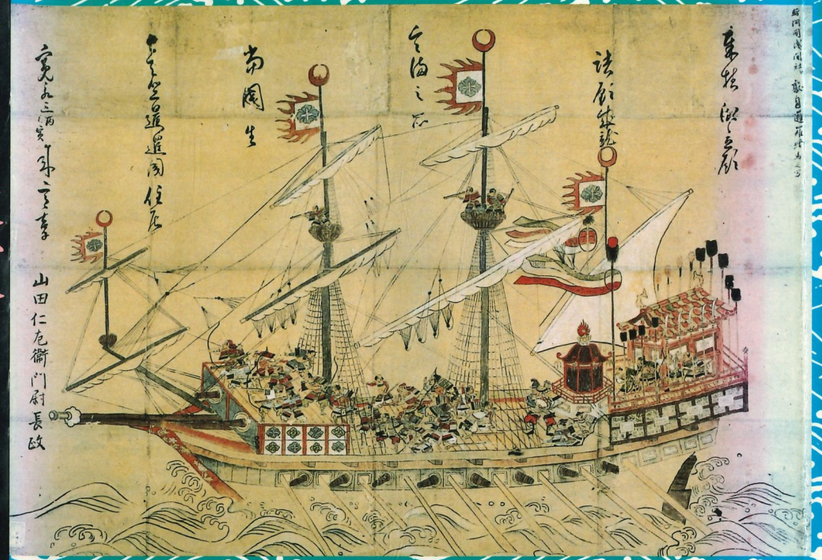
史実 山田長政

江崎 惇

史実 山田長政

江崎 惇

新人物往来社



表紙「戦艦図」
山田長政は寛永三年シャムから郷里駿府の浅間神社へ、自らが乗っている戦艦図絵馬を奉納した。八代将軍吉宗は江戸城でこれを覧る。天明八年火災で焼失。駿府加番旗本榊原が模写したものがこれで、社宝として現存している。

ISBN4-404-01322-1 C0093 ¥1500E 定価1500円

史実 山田長政

江崎惇

新人物往来社

史実 山田長政

江崎惇

新人物往来社

目次

まえがき　五
第一部　山田長政の生涯　一五
第二部　山田長政の史料　一五
第三部　山田長政と現代　一七五
山田長政関係年表　二〇七

史実 山田長政

まえがき

これは小説ではない。

今までに、山田長政の出生から少年時代、青年時代、日本脱出からシャムへ渡るまでの経緯、アユタヤの日本人町での活躍、シャムのソンタム王の義勇兵として、きわめて短期間の下級将校から軍司令官にまで昇進する過程、そして徳川幕府との交流、南タイ六昆王に推されて毒殺された、という信憑性、また日本人町の終焉などを系統立てて書かれたものは見当らない。

本書はそれらのことを年代を追って詳述した。そして随所に〝史的考察〟を加えてみた。敢えて『史実』とした所以(ゆえん)である。

第一部では、できうる限りの長政の〝実伝〟を、第二部は、長政の日本での最初の伝記や、江戸時代、明治、大正、昭和の資料にたいして、その注釈を試み、第三部では、アユタヤでの日本人町の発掘や記念碑建立の状況を、さらには今回のタイ国側の要請による、日本人町復元整備などの現況やその見通しについて展望をしてみた。

山田長政の〝集小成〟を、との著者の意をお酌みとりいただければ幸甚である。

第一部　山田長政の生涯

ほら吹き仁左

駿府宮ヶ崎通りから駿府城にかけて、異様な格好をした青年が肩いからして胸を張って闊歩している。容貌は魁偉であるが、まだ少しあどけなさを残している。額は大きくて、いわゆるおでこが張っている。鼻梁は高く太い。背丈は六尺ゆたか。

この男、駿府城から安倍川の方へ二町ばかり来たところで足を留め、大きな構えのある商家へ入った。その頃の駿府には珍しい舶載屋である。舶載屋とは外国製品を売る店で、ここの主人は太田治郎右衛門と言い、海外渡航の許可証を持った御朱印船の持主で、大宛などへもたびたび渡航していた。

「や、太田の旦那、これはちょうどいい、滝の旦那もおられましたな」

太田、滝と呼ばれた二人は、入ってきた男を見ると顔をしかめた。

「仁左さんか、今日は二人とも忙しいのでお相手はできないよ」

滝と呼ばれた男は、同じ駿府に住む滝佐右衛門で、太田と共同出資で御朱印船を持っている。

仁左さんと呼ばれた男、そんなことには一向に平気の平左衛門である。店先へどっかと腰をおろすと、べらべらとしゃべりはじめた。

「今度の船出は唐、天竺（インド）ですか、大宛ですか」

両人は答えない。この男の弁舌にひきこまれると、はじめは警戒していても、いつの間にかその不思議な魅力に惹かれて、ついつりこまれてしまう。

このへんでこの仁左さんの、戸籍しらべをしなければなるまい。駿府の浅間神社の前の町なみを、馬場町と呼ぶ。そこに染工（紺屋）を職業とする山田九平次という人物がいた。この九平次には実子がない。そこで伊勢の人で九左衛門友昭という者を養子にした。九左衛門は伊勢神宮の御師（下級の神官でお札を諸国へ配ってあるく）であった。ちなみに伊勢神宮以外の神社では御師という。

伊勢からなぜ、駿府へ養子に入ったかというと、九左衛門は駿府へはたびたび来た。浅間神社にも用件があったし、諸国への往復のつどにも立ち寄った。そこで縁あって九平次の養子になったのである。

その九左衛門のもとへ、先夫の子、三歳の仁左衛門を連れ子して再婚してきたのが仁左の母である。仁左衛門の母は、駿河国安倍郡藁科村（現静岡市）の人。姓を寺尾氏といい、尾張へ嫁して仁左衛門をもうけ、夫に死別後、仁左衛門を伴って実家へ帰り、再婚したのである。

浅間神社の近くに住んでいる九平次は、町人ではあるが、学問の素養がある。九左衛門も下級ではあるが神官であった。家康ゆかりの駿府はそれなりに文化の香りをただよわせている。そのなかでは紺屋という商家は、収入のよい方であり、領主にも献金している。したがって苗字帯刀も許されていた。

山田長政屋敷跡（静岡市馬場町）

さらに近くには名刹臨済寺がある。臨済寺は今川家の菩提寺である。代々傑僧がいる。禅の修行道場となっている。

その頃は今川家は滅亡していて、寺も全盛時代ほどでもなかったが、武家の子弟、富商の子供などは、月謝を払って勉学に通ったものである。

まことに興味をひくことは、徳川時代の稀代な反逆者として処刑された（事実は違うが）英傑由比正雪は、仁左衛門が住んでいた隣町の宮ヶ崎町に、幼時から十七歳まで住んでいた。

正雪の家も紺屋を営んでいた。年は二十ばかり仁左の方が上であるが、正雪も臨済寺で勉学している。ここに歴史の偶然性をみるような気がする。

仁左が母とともに九左衛門方に引き取られると、養父も母も臨済寺へ通わせて学問をさせた。ひととおりの読み書きができなければ、富裕な商家の跡取りにもできないし、他家へ養子にもやれない。

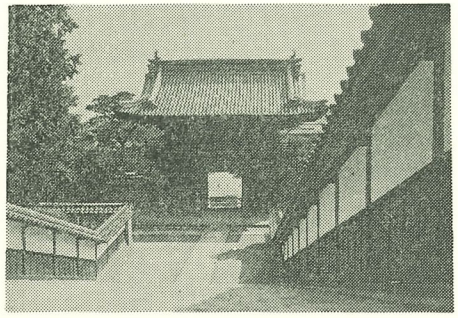
臨済寺から帰ると、父母はもう一軒へ通わせた。そろばん塾へである。そろばんは商人の表芸である。仁左は臨済寺へは実に真面目に通い、しかも熱心に四書五経などを学んだ。時には軍学について鋭い質問をしたりする。

日本で長政（二十歳で自ら長政と改名）のことを最初に書いた本は、『暹羅国山田長政氏興亡記』である。著者は松平周防守の御留守役、松井経長で、享保二十年（一七三五）に写本したものとされている。というのは、智原五六八という人物が、長政と同時代にアユタヤの日本人町にいて、天和元年（一六八一）に帰国し、長崎で長政のことを人に話した。

それを誰かが聞き書きとして書き残した。それを松井が自分の意見や研究を入れて、「写本」したものである。その『興亡記』のなかに、アユタヤの長政のことをこう書いている。

「能く日本の軍法古戦物語りし、中華の記録経書にも悉く通じて才智発明倫を出ず」

この知識は臨済寺で勉学したものであろう。



臨済寺　山田長政も少年時代ここに学んだ

臨済寺を出ると、義父と母の勧めたそろばん塾へは行かず、ひそかに町道場へ通った。『武芸流派大事典』によると、当時浅間神社前の宮ヶ崎で、関口八郎左衛門が町道場を開いていた。

関口家は今川一門の名門で、今川家滅亡後は、宮ヶ崎に居住し道場を開いた。名を氏成といい、のち柔心と改め、神夢想林崎流の居合術に、槍と柔術を加えて真心流を創始した。

関口は家康の正妻築山御前（今川義元の姪）の父の関口刑部の同族である。由比正雪もこの道場で武芸を修行している。

一日の修行が終ると、自分より年長の町の暴れ者を浅間神社の境内へ集めて、大演説をぶつ。それがなんともすさまじい。

「俺の体のなかには、織田信長公の血が流れているのだぞ。俺のおふくろが縁あって信長公の御曹子のところへご奉公にあがり、お手がついて生まれたのがこの俺だ。俺も必ず天下をとるぞ。今のうちに忠勤をつくせ。必ず将来とりたててやるぞ」

暴れ者のなかには、それをまことと信じ、仁左を畏敬する者も

でてくる。あるいは母から何かを聞かされ、それを仁左自身、なかば信じていたと思われる節もある。

ここで少しく、英雄とか大政治家とかいわれる人物の、人間像について考えてみたい。

秀吉にしろ家康にしろ、生まれたあとの努力や刻苦によって成功したとは、どうも思われない。勿論、ある程度はそれも加味されようが、母の胎内にいる時にすでに、天賦の資質を享けてこの世に出生したものが多いように思える。仁左衛門、のちの山田長政も、確かにこの部類に属するであろう。シャム（タイ）へ渡った長政が、天成の恵まれた体軀と弁舌と胆略で、人心の操縦をした萌芽は、すでに少年の頃からきざしていた。

駿府の人々は、青年時代を迎えた仁左のことを、〝ほら吹き仁左〟と呼ぶようになっていた。

話を太田の店先へ戻そう。

時は慶長十二年（一六〇七）。仁左、十七歳になっていた。いつものように仁左は、太田、滝の前で怪気炎をあげた。

「大御所様が駿府へござらっしゃったので、太田の旦那も滝の旦那も、何かと好都合でしょう」

太田と滝は思わず顔を見合わせて、首をすくめた。

「仁左さん、めったなことを言うものではない。お前さん、一国一城の主になるとか、天下をとるとか、私等の前だけならよかろうが、よそでしゃべってお役人の耳へでも入ったらえらいことになりますぞ」

二人はこもごも真剣な顔で言う。

仁左の生まれたのが天正十八年（一五九〇）。この年に家康は、豊臣秀吉とともに小田原の北条氏を

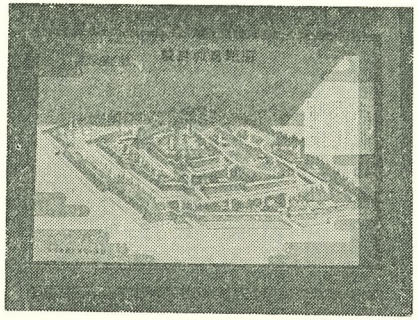
降し、秀吉の政策による国替えで、今までの領地、岡崎、浜松、駿府から、江戸城へ入っている。

慶長三年八月、秀吉が死ぬと家康はただちに天下統一にのり出し、二年後の慶長五年の九月には、石田三成を盟主とする豊臣方を関ヶ原の合戦で破り、さらに豊臣の息の根を止めようと画策する。

慶長八年三月十二日征夷大将軍に任ぜられ、江戸に幕府を開き、その二年後には秀忠に将軍職をゆずり、大御所となる。

大御所とは、親王、摂家、大臣、将軍の隠居所またはその人に対する敬称であるが、一般に大御所と言えば家康のことを指す。

慶長十一年末、家康は駿府へ移住する決意を固めた。駿府という土地に愛着を持っていたが、もう一つ重大な理由がある。この地上から豊臣と大坂城を抹殺しようと決意していた。それには少しでも西に拠点を設けて、西国大名ににらみをきかせ、同時に監視し情報を収集しなければならない。



駿府城復元鳥瞰図

翌十二年の早々から駿府城の大拡張工事に着手した。世にこれを天下普請という。諸大名にとってはこの時が、忠勤の度合の見せどころである。大御所に睨まれたら家の破滅にもなりかねない。あらゆる無理な工面をして、諸材料、人夫等を駿府へ送り込み、自ら先頭にたって工事を督励する。

「どえらいことだ。大御所様が江戸から駿府へござらっしゃっ

て、お城の工事の監督をなさるっていうぞ」

大工、左官、石工、瓦職人、うるし職人、金銀細工師、庭師、画工等まで、どっと駿府へ押し寄せた。設計は建築、造園の大家小堀遠州。遠州は完成後、この功によって遠江守に任官している。

「夜ひる、働かされるので、人夫や職人等は鳥目になっているそうだ」

町の人々の噂は真実であった。突貫工事なので、昼夜を問わずの重労働。金山奉行をしていた大久保長安は、天主閣に用いる黄金三十万枚を献上する。外観は五層に見えるが内部は七層。軒瓦は金メッキをほどこした。棟の両端には金色まばゆい〝しゃちほこ〟が立っていた。駿河湾に天主閣が映じて、魚類が愕き磯へ寄らないので魚がとれず、漁夫が困ったと言われた。

城は慶長十二年十月に完成したが、わずか二か月のちの十二月二十二日、女中の失火によって灰燼に帰してしまった。しかし家康はすぐに再興を命じ、慶長十五年の中頃には完成したのである。話は前にもどる。

「仁左さん、大御所様はお城の工事の監督に毎日お出ましになる。お前さんがもし馬鹿なまねでもして、私達の名前でも出されたら、私達の首が飛ぶ。どうかもう私達のところへは来ないでもらいたい。ぜひ頼みますよ」

滝の方が太田より仁左にはなじみがうすい。表情を堅くして言う。

「ははは、滝の旦那、ご心配には及びませんぜ。なにせ駿府もこの頃では騒々しくてかなわん。他国へ行こうと思っておりますから、そのうちに消えてなくなりますよ」

「他国って何処へ？」

「天網恢々なんとやら。それは仁左衛門の胸のなかにある。それでは旦那方、今日はこれで、はいさようなら」

言うだけ言うと仁左は、ぷいと太田の店を飛び出し、駿府城の方へすたすたと行く。

「どうもあのわっぱには困りますな。お互いに気をつけましょうぞ。あんなものにかかり合ったらえらいことになる」

滝は舌打ちをした。

家康の貿易政策

それから間もなく、仁左の姿がぷっつりと駿府から消えた。

仁左が不在の間に、少しく話は堅くなるが、家康の海外政策、貿易政策について述べることにする。というのは、仁左がのちに何故にシャム（現タイ）への渡航を志したかに、大きな影響があるからである。

家康は征夷大将軍になると同時に、対外貿易をはじめた。まず朝鮮との仲を回復し、つづいて安南、ルソンとの間にも交易を開始し、これを許可制として、渡航の朱印状を授けた。

慶長九年（一六〇四）八月には、シャム居住の与右衛門に、シャム渡海の朱印状を授けた。これより以後、元和四年（一六一八）までに三十四艘の船に朱印状を与えている。ことに地元の駿府では、貨物取家格と称して、海外渡船を許されていた商家がいた。

滝、太田のほかに、松木新左衛門、山内助兵衛、大黒屋孫左衛門、多々良庄太郎、出雲屋清兵衛、桑名屋清左衛門、富田屋五郎左衛門らであった。

また国内の情勢に眼を転じると、関ヶ原の合戦後、その後の妖しい雲行きはただよわせているものの、大体において天下は徳川のものと決定し、ようやく士・農・工・商の別が定まろうとしていた。石田三成、小西行長等、関ヶ原で敗れた者の残党は、とうてい日本では志がのべられないので、海外、とくに南洋方面に渡航した者も多数いた。

慶長十一年（一六〇六）から慶長十九年（一六一四）までの間に、三十隻あまりの朱印船がシャムに到着している。

関ヶ原で勝った家康の次の目標は、なんとしてでも大坂城の攻略である。野戦の戦術家である家康も、攻城戦には頭を悩ましていた。

家康の泣きどころである。

鉄砲をいち早くとり入れて、それを戦術に活用し、今までの戦法をがらりと変えたのは、天才的戦術家の織田信長であった。信長の盟友であった家康も、その戦術を見習った。大坂城を攻略するにはなんといっても大砲がなければならない。その砲弾には火薬が絶対に必要である。

ところが、シャムで産する焔硝（火薬）は大変に良質である。これに目をつけた家康は、長崎の豪商、木屋弥三右衛門に命じて、毎年船を出させてシャムへ派遣し、シャムの宮廷へも出入りさせて、鉄砲、硝石（火薬の原料）鉛等を買い入れさせた。

慶長十一年（一六〇六）には、シャム王に木屋を通じて親書と貢物（鎧三、長太刀十）を送り、大量の

火薬類を送ってくれと依頼している。木屋は時の権力者、天下様の頼みであるから、大いに張り切ってこの任務を果たした。喜んだ家康は、自分でもシャム王に礼状を出しているし、幕府側として本多正純にも礼状を出させている。

駿府の商人以外で朱印状を家康が出した船主は、大名では島津忠恒、有馬晴信、加藤清正、亀井玆知、細川忠興、長谷川藤正等。

商人では田辺屋又左衛門、木屋弥三右衛門、今井宗忠、荒木宗太郎、大賀九郎左衛門、後藤宗印、伊藤新九郎等であり、その他在留支那人には三名に、西洋人では三浦按針（ウィリアム・アダムス）、バテレンのトマス等であった。

長崎、堺の豪商は、一族をアユタヤ（シャムの首都）へ駐在させて、シャムとの貿易を行った者もいた。

木屋弥三右衛門は、なかでもシャムとの交易には大活躍をした。慶長十一年、十三年、十四年、十五年、十九年と自分の持船をシャムへ出航させ、自分自身も数回シャムへ渡航している。ある時期にはシャムに十数年も滞在し、シャムの王宮にも出入りして、宮廷人とも親しくなり、慶長十九年六月には、帰朝のうえ、駿府城で家康に謁見して、つぶさにシャムの事情を言上している。

また元和七年（一六二一）八月には、シャムの使節が来朝のみぎり、通訳として京都二条城で二代将軍秀忠に謁見している。海外貿易に力をそそいだ家康は、琉球（沖縄）にも目をつけ、慶長十四年に、島津氏に琉球征伐を命じている。諸大名は次から次へと、駿府の家康のところへご機嫌伺いに来る。まさに大御所時代の出現である。

仁左、舁夫になる

駿府ではほらを吹きまくっていた仁左衛門が、突然姿を消したのは、実は沼津へ行くためであった。

仁左は一度は武家奉行がしてみたかった。しかし駿府で家康に仕えることは、まず不可能なことであった。万に一つ採用されたとしても、足軽かそれ以下であろう。それに駿府では〝ほら吹き仁左〟はあまりにも知られ過ぎている。まして養父も母も、「武家奉公など、とんでもない」と猛反対するであろう。

それならば沼津だ、と仁左はひそかに決めていた。町道場へ出入りしたり、喧嘩三昧に明け暮れていた仁左は、沼津城主、大久保治右衛門忠佐の噂を聞いていた。「仕えるならあの殿だ」と思っていた。

駿府から沼津までは十五里（約六十キロ）の道のりである。

こう決意した時の仁左は、天正十八年（一五九〇）の生まれであるから、数えで十七歳になっていた。

大久保治右衛門忠佐という人物は、幼名を弥八郎と言い、天文六年（一五三七）、大久保忠員の第二子として、三河上和田郷に生まれた。講談やテレビ等で活躍している大久保彦左衛門の兄である。

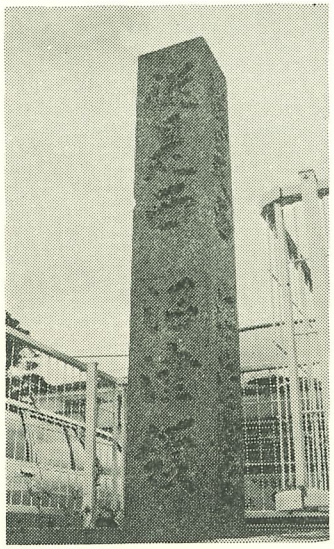
忠佐は家康と苦労をともにしてきた、生粋の三河武士である。十九歳で蟹江の戦いに参戦して、七本槍の一人に数えられるほど奮戦した。その後、家康に従って各地に転戦して功を樹てたが、なかでも天正三年（一五七五）の織田・徳川連合軍による武田勝頼の長篠攻めには、兄の大久保忠世に勧めて鉄砲隊三百人の先鋒となり、発砲させては他の組と交代し、それを繰りかえして武田方の騎馬集団を大いに破った。

忠佐はあごから頬にかけて一面の髯を生やしていたので、武勇振りを望見した信長が、「あの髯の武者は誰か」と家康に尋ねた。よほど信長の印象に残っていたとみえて、その後、家康と会うたびに、「長篠の髯は従っているか」と、聞いたという。

家康の関東入国に従って忠佐も、上総国茂原で、五千石を賜わった。

このあたりが家康の政策の旨味のあるところで、三河以来の子飼いの家来は、旗本にして禄高は少ないが、直参としての誇りと官位を与え、大名にとりたてても石高は少なくし、その代償として譜代大名、すなわち初めから徳川氏に仕えた大名としての特権を与え、幕閣の中枢に参画させ、外様大名と区別した。

忠佐は関ヶ原の役では二代将軍秀忠に従い、翌年の春、駿河国沼津の二万石の城主となった。それ以来、「沼津の殿様は髯の大久保様だ」と、近隣に鳴りひびいていた。仁左もその噂を聞いていた。そこで仕官を求めて沼津へ来たのである。城の表門から行くような愚かなことはしない。そこは機略縦横の仁



沼津領境標示石

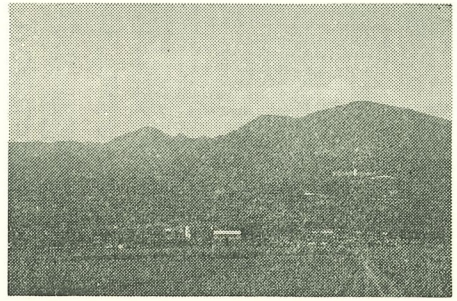
左である。

富士山の麓に愛鷹山がある。この山麓一体は鷹狩りの名所である。忠左は年少の時から家康に従って鷹狩りをしている。城主となるとしばしば愛鷹山麓へ鷹狩りに行く。仁左はそこへ目をつけた。

その頃の忠佐は病気がちであった。すでに剃髪して「道喜」と号していた。鷹狩りに行くにも、よほど気分のよい日に駕籠でゆく。

仁左はその日も見え隠れに忠佐の駕籠をつけていた。なんらかの機を捉えて取り入るつもりであった。

いざ帰城という時に、一人の六尺が額に油汗を流して腹痛を訴えた。食あたりでもしたのであろうか。へなへなとその場へうずくまってしまった。これを望見した仁左、ばたばたと駕籠わきへ走り寄り、土下座して大音声で言上した。



富士山麓の愛鷹山

「駿府に居住いたします山田仁左衛門と申します。織田信長公にゆかりの者にござります。何卒お供のうちにお加え下さい」

闊達で聞こえている忠佐は、戸を開けさせにっこりと笑った。信長公にゆかりの者、ということがおかしかったのである。が、なるほどと頷いた。不敵な面がまえをしていた。

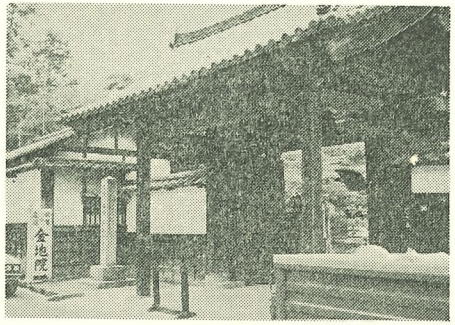
「その方、駕籠はかつげるか」

「はい」

仁左は駕籠をかついだことなど一度もない。それでも必死である。六尺とは舁夫のことであるが、普通のそれではなくて、この場合は殿様が戦場を駆け回る時のかごかきのことを言う。

秀吉が信長に仕える時に、これに似た場面もあったと巷談は伝えているが、彷彿とさせるではないか。とにかく仁左はこの時、大久佐忠佐の六尺になることに成功した。仁左はどんどん出世することを、もとより目論んでいた。

大坂方と家康とは、いずれ天下分け目の決戦をしなければならないことを、耳学問で仁左はおぼろげながら感じていた。



京都・金地院

忠佐は沼津から度々家康のもとへ、ご機嫌伺いに来る。その時、話のおりふしにふと仁左のことも出る。他の家来と違って六尺は殿様と話はできないが、顔を合わす機会が多い。

「この駿府生まれの山田仁左衛門と申す男、今は私の六尺を致しておりまするが、信長公にゆかりがある等と申しましてな」

これはずっと後のことであるが、仁左（のちの長政）の沼津での六尺時代のことが、正式の記録に残されている。

というのは、駿府でも家康は外国の使臣とも謁見している。その時はいつも徳川将軍家の政治顧問で、黒衣の宰相（総理大臣）と称された京都南禅寺の僧、金地院崇伝が同席していた。

この崇伝が、将軍と外国使臣との接見の次第を記録した『異国

日記』を著述した。その原本が金地院に保存されているが、それはあとで詳述する。

大久保忠佐は病気がちであった。それに高齢で、もし戦になっても陣頭で指揮することは不可能であることは誰の目からみても頷ける。

もう一つ、大久保家に不幸がおとずれた。嗣子の忠兼も病弱であったが、十五歳で父に先立って死んでしまった。忠佐は弟の大久保彦左衛門を養嗣子にしようとした。

仁左が町道場で聞いた噂によると、その大久保彦左衛門は、兄忠佐の申し出に対して、

「兄といえども、他人の功による知行を継ぐのは不本意である」

と、拒絶したという。

こうなれば大久保家には嗣子がなくなってしまったことになる。

仁左は考えた。

もし近々、戦があったとしても、御主君の忠佐公の出陣は無理であろう。そうすれば俺は六尺のままで終ってしまう……。ぼつぼつ沼津は年貢のおさめ時だわい。

仁左は沼津に二年ばかりいた。そしてまたぶらりと駿府へ舞い戻ってきた。ちなみに、大久保忠佐は慶長十八年（一六一三）九月二十七日、七十歳で死んだ。後嗣がなく、家は断絶された。

駿府脱出

「太田の旦那、どうもしばらくでございました。おかわりもなく、ますます商売ご繁昌のようでお目

出度うございます」

ぶらっと入ってきた客が仁左だと知ると、太田はにがり切った顔をした。大久保様の六尺をやっていて、時には駿府へも来るらしいと、風の便りに聞こえてきたので、

「やれやれ、あの男もどうやら落ち着くところへ落ち着いたのか。まあ六尺ぐらいが性に合っているのであろう」

と、ひそかに胸をなでおろしていたのである。

「いつ、駿府へ帰りなさった」

「たった今ですよ。まだ家にも帰りませんが、真っ先に旦那のお顔が見たくて……」

「え、津国屋さんへ帰らずに一番先へ私のところへ？」

津国屋というのは、仁左の養父友昭の紺屋の屋号である。友昭が、伊勢の津の出身であるから、そう名づけられていた。

「仁左さん、悪いことは言わない。二年も家を離れていなすったろう。早く家へ帰っておふくろさんに顔を見せることだ。まるで私が仁左さんを引き留めているように思われる」

太田は早くこの厄病神を追い払いたかった。

「それではゆっくり出直してきます」

仁左もにやりと笑ってその場を去る。

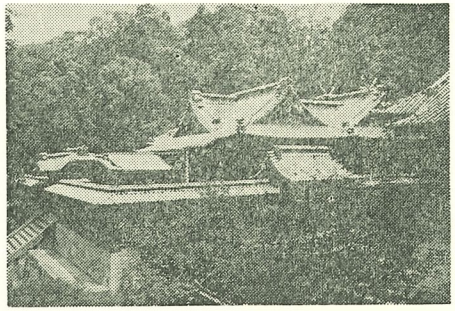
駿府の町へ入ってちらりと聞いた噂では、近く太田、滝の持船が大宛へ行くということであった。その様子を探りに来たのである。なるほど、店から奥へかけての気配があわただしい。

「俺もどうしても連れていってもらいたいものだ」

つぶやいた仁左は、浅間神社前の母のもとへ帰った。養父はじろりと見たまま何も言わない。すでにとうの昔にサジを投げている。さすがに母は、物かげに仁左を連れていってかきくどく。

「仁左衛門、お父さんには私からよくお詫びをするから、お前もあとであやまりなさい。今度こそは性根を入れかえて、紺屋の仕事に精を出しておくれ。そうしてくれなくては、この津国屋も屋根にぺんぺん草が生えてしまう。お武家になるなどとは、金輪ざい思わないでおくれ」

その晩はおとなしく家に寝る。翌朝、朝食もそこそこに家を飛び出し、臨済寺へ行く。



久能山東照宮

そこでは神妙に師に挨拶して、その後の駿府の情勢などを聞く。

「体は一段と逞しくなったのう」

「はい、なにしろ轎かきですから」

「もう少し世の移りかわりを見きわめることじゃ。もうひと波瀾こなければ天下はおさまるまい」

「大御所様の方が勝つでしょうね」

「勝つだろうな。だが仁左衛門、口は禍のもとと申すぞ。めったなことを口ばしって、身を滅ぼすなよ」

次の夜、仁左は久能海岸を歩いていた。城から一里半（六キロ）ばかりの所である。後に家康の死後、ここの山に東照宮が建てられた。

駿府城の天主閣が波間に映るかどうかを、自分の眼で確かめたかったのである。

月が照りかえっていた。松林を抜けようとすると、浜辺に五、六人がむらがっていた。何やら口論をしている。仁左は静かに近づく。

「おや……」

囲まれているのは、隣の町の顔見知りの若い衆である。囲んでいるのは浮浪の暴れ者らしいのが数名。仁左の俠気はそのまま見すごせない。

「おい、その若い衆は俺の知り合いだ。なんだか知らないが、かんべんしてやってくれ」

「知り合いだと、それはちょうど都合がいい。おらっちのかかりあいのある女に、そいつがちょっかいかけやがったので、いたみつけているところだ」

「どうしたらかんべんしてくれるのだ」

「耳を揃えて三両出せ」

どうやら海岸伝いの清水湊の愚連隊らしい。気の荒いことでとおっている連中であろう。

隣の町宮ヶ崎町の若い衆は、仁左とは臨済寺の学問仲間であるが、女に手の早い男である。

「そんな金を持ち合わせているはずがない」

「そんなら体で返せ」

「あんたはうしろへさがっていな」

若い衆を下がらせると、仁左は腰の木刀を抜いた。

さすがに刀はさしていない。こうなったら騎虎の勢いである。腕力には自信がある。大立回りのあげく、数人を殺傷してしまった。

戦国の余燼がくすぶっている時代とはいえ、町人を殺傷すれば、当然警吏の追及を受ける。まして大御所様のお膝もとである。捕えられれば死罪はまぬがれまい。若い衆をうながして、その場を駆け出した。

「このことは口が裂けても誰にも言うな」

と念を押し、家へ戻った翌朝、何食わぬ顔で太田を訪ねた。太田、滝の持船が近く大宛へ渡ることを確信していたからである。

昨晩、仁左はまんじりともせず、来し方を反芻し、その上で結論を出した。

――よし、これで日本に愈々見切りをつける時が来た。これは天が与えてくれた機会だ、いずれは大御所様、徳川の真の天下が来るであろう。大御所様が一番欲しがっている火薬や他の産物が、多量に産出するというシャムへ行こう。

――このまま日本にいても梲はあがらない……。侍や商人の区別が、こうはっきりしてしまった今は、武士にはとうていなれっこはない。海外でなら、その機会があるかもしれない、いや、ある、必ずある。俺はどうしてもシャムへ行くぞ。

太田の家には滝も来ていた。このことは、近く出帆するにちがいないと、仁左はますます確信を深めた。

「近く船が出るそうですが、私はどうしてもシャムへ行きたいのです。一生のお願いですが、大宛までも乗せていってくれませんか」

太田と滝は顔を見合わせたまま黙っている。ややあって太田が言った。

「正式に役所に届けて許可を得なければ、私達の手落ちとなっておとがめを受ける。第一、お家の皆さんはご承知ですか。同じ駿府にいて、あとで恨まれてはたまりませんからね」

太田の言うことは当然である。御朱印状は発行していても、渡航人員や交易物資については、厳重な統制をしていた。

拒絶されることは仁左にもわかっていた。自分の日頃の言動から、この二人は仁左に対して危惧の念をいだいていることはわかっている。

今日ここへ来たのは、出航することが確実かどうかを確かめたかっただけである。

「太田の旦那、滝の旦那、なんとか連れていって下さい。シャムこそが私の生きる所です。船の中でも一生懸命働きますよ。水夫の一人として連れていって下さい」

だが、太田、滝の返事はにべもなかった。

仁左は沈痛な顔をよそおって店を出た。肩を落として。

両人は仁左の後姿を見てほっとした。これできっぱり諦めるであろうと。

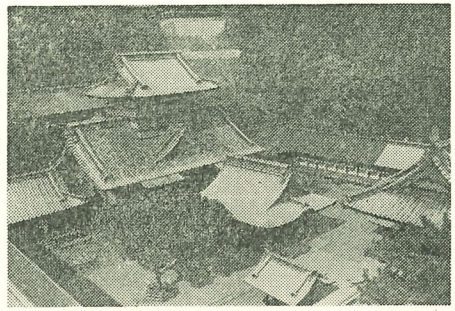
その日一日、仁左はさあらぬ体で、滝、太田の使用人に近づき、出航の月日を聞き回った。使用人の女房の家にまで菓子折りなどを持参して、情報を聞きだした。その晩、家人が寝静まってから、家出の支度をした。家宝の刀、金などを持ち出し、そっと裏口からしのび出た。まだ夜が明けるには間

があった。家を出た仁左は浅間神社へ行った。物心ついてからなじんだ神社である。数々の思い出にもつながる。

「これで駿府も見納めになるかも知れぬ」

と思うと、さすがに感無量である。

シャムへ渡ることに成功したとしても、二度と日本へ帰って来ることは、不可能なことかもしれない。波濤万里の海の彼方である。途中、暴風雨に遭って破船のすえ、海の藻屑と消え去るかもわからない。



静岡・浅間神社

仁左は長いこと社頭で、己の武運長久を祈願した。

「シャムへ渡ったら、俺は織田信長の後裔らしく振舞おう。それには名前が仁左衛門だけでは、なんとも軽々しい。よし俺は本日唯今から、山田仁左衛門長政と名乗ろう」

やがて仁左衛門はつぶやいた。

長は武運長久の長、政はまつりごとである。

暁闇（ぎょうあん）であった。すっくと立ち上がった長政は鳥居をくぐると、いつもの馴（な）れで、津国屋や駿府城の方へ二、三歩歩きかけ、「未練な」と小声で言うと、すぐ道を西へとった。

安倍川をひとまたぎ、そこで堤からくるりと振りかえり、ぼんやり映る駿府城の天守閣をあおぐと、すたすたと西へ西へと歩を運んだ。

長政渡航

長政は別に急がなかった。太田、滝の持船が大坂を出航するのは、晩秋、初冬の北風を利用しなければならないことは長政なりに調査してわかっていた。

まだ涼風がたちはじめたばかりである。

「旦那方の船は大坂から出帆するのを常としている。それまでは日本の見納めをしていくとするか」

道々もシャムへ渡ってからのあれこれを想像して、故国を棄てようとしている翳（かげり）などは少しもみられない。

大坂へたどり着いた長政は、大坂城を見て愕いた。さすがは豊太閤、豊臣秀吉の造った城だと感嘆した。今は天下様と言われている家康の駿府城より、はるかに壮麗である。

駿府の大御所もこの城を攻め落とすのは、大変なことであろうな、とひそかに思った。

大坂港の近くに宿をとって毎日見張っていると、太田、滝の持船、富士丸が入港して積荷を開始した。正面から乗船の許可を求めても、ことわられるにきまっている。

富士丸の積荷は完了した。あとは風を待つだけである。宿から長政の姿が忽然と消えた。富士丸は大坂港を出帆した。

その晩のことである。太田、滝の船室に長政が現われた。両人は愕いてしばらくは口もきけない。

「これは御両公、幽霊ではありません。足のある仁左衛門ですよ」

「ど、どうしてここにいなさるのだ!?」
「なんぼ頼み込んでも聞き入れて下さらないと思い、積荷の時に水夫姿になって紛れこみました」
滝が憮然と言う。
「こんなことが知れたら、どんなおとがめを受けるかわからない……」
「さあそこですよ。長崎へ着いて私を役人につき出せば、あなた方の落度にもなるでしょう。長崎ではじっと船底に隠れておりますから、是非連れていって下さい。このとおりでございます」
長政は真顔になり、土下座して頼み込んだ。
両人は船室の隅へ行き、ひそひそと相談する。駿府では長政の養父や母のことを慮って、断りつづけてきたが、両人もその時代の気宇壮大な海の男である。事態がここまできてしまったからには、長政の熱望を適えることに一決した。
「仁左衛門さん、この船は大宛までしか行きませんよ」
「そこまでで結構です。そこからはまた船をみつけて行きます」
「船賃はどうなさる?」
「前から貯えた銀を持っております」
当時の長崎からシャムまでの船賃は、銀五十匁であった。
「仁左衛門さん、あんたは一体、なぜそんなにシャムへ行きたいのです?」
「お二人とも駿府のお方だから、よくおわかりでしょう。大御所様はシャムからさかんに火薬や鉛を買い付けなさった。これからもつづけるでしょう。シャムにはその他の産物も沢山有ると聞いており

ます。それに」
「それに?」
「日本人も多数行っていると聞きました。私はそこで一旗挙げたいのです」
かくして長政は、待望のシャム行きの第一歩を踏み出したのであった。
慶長十五年(一六一〇)の冬。長政二十歳の時である。この年に家康は、名古屋城の天主閣を完成させ、明国(現中国)の来船を許可している。
太田、滝の持船の富士丸は、約四百トン。楠材を多く使っていたので、キメが細かく、狂いが少なく、楠材は当時としては、最高の船材であった。船の長さは四十メートル、幅十二メートル。船の中には座敷が三つもあり、風呂の設備もあった。
さて、太田、滝の船が長崎を出航すると、長政は率先して水夫の仲間に入り、一心に働いた。
シャムの日本人町は大河にかこまれたところにある、と聞いていたので、真剣に操船法を学ぼうと心がけたのである。船は大宛に無事に着いた。富士丸は交易をすませたら、日本へ帰らなければならない。
長政は両人に篤く厚く礼を述べた。
船が台南港を出港する時、岸壁で手を振っている長政を見て、太田、滝は思わず涙ぐんだ。
——この野放図な暴れん坊を、シャムではどんな運命が待っているのであろうか。本人はにこにこ笑っているが、こちらの方が胸がつぶれる思いがする……。

アユタヤ界隈

さて、長政を待っている当時のシャムの国情はいかなる情況であったろうか。また日本人達はいかなる立場におかれ、どんな活躍をしたのであろうか。

十七世紀はじめのシャム（現タイ国）は、アユタヤ王朝の時代であった。

アユタヤ王朝のエカサツアロット王は、一六〇五年から一六一〇年まで王位についていたが、王は国内の財政問題、それを助けるオランダ、ポルトガル等との交易に重点をおいていた。

王の時代にはすでに多数の日本人がシャムに渡り、首府のアユタヤの南の地区には、日本人の居留地が与えられていた。

アユタヤは現在のタイの首府バンコク北方、百キロの地点の、メナム河上に浮かんだ東西四キロ、南西三十キロの小島の町である。この島はデルタ上のいくつかの小島によってかこまれ、島のなかを河川が縦横に走っている。

現在は汽車でも自動車でも、バンコクから一時間で行けるが、当時の交通機関はすべて舟であった。日本人町はアユタヤの南郊、メナム河の東岸にあり、東西二百五十メートル、南北五百メートル、約三万坪（十万平方メートル）で、ここに日本人は約二千人くらい居住していたと推定される。

これらの日本人はシャム王の近衛兵をつとめ、戦争の時は外人部隊として活躍し、平時は物資の買い付けや貿易に従事していた。

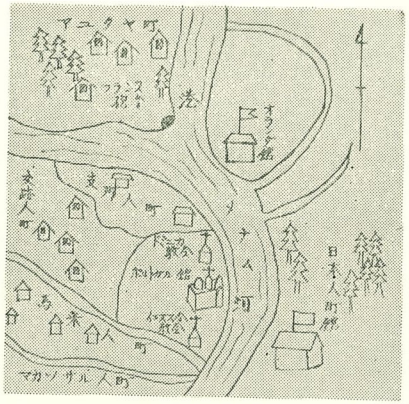
日本人町の北にはオランダ人町があり、対岸にはポルトガル人町、支那人町、マレー人町、コーチ人町等があった。

日本人町の首領は、オープラ純広（すみひろ）であった。オープラはシャムの少将の位であるから、相当な高官である。

オープラ純広は関ヶ原の役後、単身シャムへ渡り、一六〇九年（慶長十四年）から一六一二年まで、日本人町の頭領であった。

すなわち、長政がシャムへ渡った前年から頭領になっていたのである。

純広は山陰因幡（いなば）（現鳥取県の東部）の領主、亀井武蔵守玆矩（これのり）と密接な関係があった。彼は亀井の命令でシャムへ渡ったのである。亀井という大名は、関ヶ原の役では東軍、すなわち徳川家康に味方して勝利を得た。当時としてはよほど経済観念が発達していたのであろう。自分の藩の財政充実の方策を、東南アジアの貿易に求めた。老中の本多上野介にとり入って、シャム、マカオへ渡航する朱印状を手に入れ、毎年のようにアユタヤや東南アジアへ船を派遣している。



日本人町アユタヤの見取図

亀井の領地で編さんされた『因幡民談』に、次のような興味あることがらが記録されている。

「亀井武州、貿易の利益の莫大であることに着目し、海

外へ船を派遣しようと思いたち、長崎で三百トンの船を買い入れ、資本を投じて京都、堺、大坂でそれぞれの国で欲する物資を買い込み、それを船に積み込んで、領内の農民、漁夫をかりたてて水夫とし、シャム、カンボジアへ乗り込むと、見込みどおり多大の利益をおさめた。

その国々で買ってきた珍しいものを城内に並べたて、毎年、毎年船を仕立てて珍奇なものは、参勤交代の時、将軍（家光）へ土産として献上し、大いに喜ばれた」

現在、亀井家に残されているシャム貿易に関する三通の文章のうち、二通はオープラ純広から亀井玆矩に送ったもので、その一通は、家康が鉄砲二十挺をシャム王へ贈り、シャム王はその答礼として、鉛千斤（一斤は約六百グラム）を家康に贈った、と書かれているものである。これは慶長十一年のことである。

鉛は前にも書いたように、鉄砲や大砲の砲弾にするのである。

もう一通は、亀井からシャム在住のオープラに対し、三百トンぐらいの船をシャムで買えとの依頼書に対する、オープラの返書である。

亀井は数多くの貿易船を各地へ派遣していたので、長崎でも造船させていたが、それでも間に合わないので、外地へ発註したのである。

オープラから亀井へ、次のような返書を出している。

「昨年のお手紙、ありがたく拝読いたしました。さて三百トンの船のことを御下命になりましたので、種々の手だてをつくしてみましたが、現在シャム国王が明王（中国）へ朝貢船（貢物を運ぶ船）を派遣しているので、シャムでは船の調達はできませんでした。

そこで交趾（十六世紀から十七世紀にかけて、現在のほぼアンナンに当る地方を呼んだ語）、安南あたりに連絡して、小船を一隻探しましたので、お送りいたします。当地には今のところ、こんな見事な船は見当りません。一段と良い船であることは自信があります」

また亀井はオープラを仲介人として、シャム王と家康との仲を斡旋しているし、毎年、シャム王に進物を贈るので、シャム王からお礼として、蘇枋木（紅色染料を作る木の皮）三千斤、鉛五百斤を贈ったことを記録した手紙も残されている。

話は大宛に残された長政のことに移る。

長政は台南港でシャム行の便船を待った。前にも触れたように、家康の命令で長崎の豪商木屋弥三右衛門は、毎年船をアユタヤへ出している。その船が来たのである。

長政からの話を聞いた木屋は、にっこり笑った。アユタヤの日本人町は、有為な青年を求めている。木屋船は、ためらうことなく、台南港から長政をアユタヤ行きの船に乗せた。いよいよ風雲児山田長政は、アユタヤの日本人町へ乗り込んでゆく。

長政初陣

アユタヤへたどり着いた長政は、まっ先に日本人町の頭領、オープラ純広を訪ねた。

「私は山田仁左衛門長政と申します。織田信長公にゆかりの者です。どうか大将の家来にして下さい」

本人は神妙に挨拶したつもりであるが、純広の方では苦笑した。真面目くさって信長の後裔であると言いきる。この若さでシャムへ来るということは、いずれその身になんらかの因縁を背負っているにちがいない。

だがその頑丈な体軀と不敵な面魂、しかもなんとも人を惹きつける不思議な魅力に、むしろ純広は好感がもてた。

それに木屋の口添えもあった。木屋は台南からアユタヤまで長政と同船していて、その一挙一動を見守っていた。

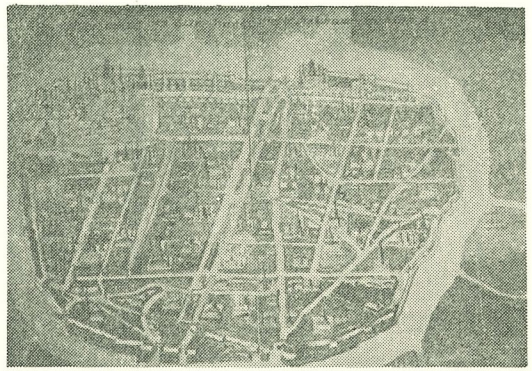
木屋も純広もひとかどの人物である。人を見抜く眼識を備えている。

純広は長政を同居させた。

木屋はかねて純広に依頼して買い付けてもらった物資を、船に積み込みをはじめた。長政もその手伝いをした。たんに手伝うばかりではなかった。一体、木屋は日本からどんな物資を運び込み、その見返りにいかなる物を日本へ持ち帰ろうとするのであろうか。

長政は興味をもって、手伝いの間に間に観察した。それは駿府育ちの長政の、はるかに想像したことと推量したことを絶する品々であった。

まず日本からは主として、日本刀、金銀の細工物、京染の小袖、蒔絵の諸道具、絵屏風、それに銀



オランダヘーグ文書館蔵「アユタヤ古図」

などであった。当時の日本は世界でも有数の銀の産出国であった。

アユタヤから日本へ持ち帰る物資は、紗、ビロード、ラシャ等の毛織物、豹、鹿、鮫の皮（刀の柄や鎧等の製作に使用する）や、鉛、火薬、鉄砲、サンゴ、メノウ、沈香、白檀、紫檀、黒檀等であった。

だが木屋等の船は、翌年の春または初夏まで船出を待たなければならない。初夏の南風を利用して日本へ帰航するのである。その間は、なお足りない物資の買い付けをする。長政はそれも手伝った。そうこうしている間に、シャム王室内で異変が起きた。国王エカサツアロット王は、二十五歳という若さであったが、発狂して国政をつかさどるような状態でなくなった。当然、王位継承問題がおきる。奇異なことであるが、シャムでは王位を長子には譲らずに弟に譲る。

皇太子スタット親王は、その紛争の渦中に巻き込まれてしまう。というのは、王位を奪うという疑いをかけられたのである。その策謀の中心人物が貿易長官の、ピヤナイ・ワイであるとされ、スタット親王ともども処刑されてしまう。

エカサツアロット王は、ついに狂死する。殺されたスタット親王の末弟ソンタム（妾腹の子）が王位につく。

貿易長官のピヤナイ・ワイは、日本人に非常な好意を持ち、なにかと便宜をはかっていた。オープラ純広をはじめ日本人は、大いに彼を徳としていた。その恩人が殺されたのである。

それ、仇を討て、と、オープラの号令一下、五百人の日本人部隊が一斉に蜂起した。オープラは同居人長政の日頃の言動に、熱い眼差しをそそいでいた。その機略、その胆力、その武勇、これが二十

一歳の青年かと、目を見張るばかりであった。

こせこせした日本を離れ、異国の大地に舞い降りた長政は、まさに魚が水を得たように振る舞った。長政の天成の資質が、萌芽したのである。

オープラは長政を自分の伝令として手許におき、時には斥候に出した。

長政のシャム語の習得は、短期間としては愕くほどの上達振りを示していた。長政は斥候の任務を見事に果たした。

ソンタム王が王宮を出て、寺院におまいりに行くことをつきとめてきた。よし、とばかりにオープラは、寺院を包囲して、王に三か条の要求をつきつけた。

一、日本人に対して快く思っていない高官二人を渡すこと。

二、日本人に対して居住、商業、貿易の権利を認めること。

三、前二項の実行を保証するため、数人の高僧を人質として差し出すこと。

長政はオープラ純広の伝令として、傍にかしずいている。ソンタム王とも視線がときに合う。ソンタム王はこの時、長政と同年の二十一歳であったが、この三か条については、その場では承諾した。だが、若気の至りか、王宮へ帰ると、にわかに変心して、ポルトガル兵に援助を依頼し、王の兵と連合して日本人町を攻撃してきた。

長政はオープラに進言した。

「ポルトガル軍は大砲を持っています。城壁もない日本人町は、砲撃されたら、ひとたまりもありません。夜に乗じてここを脱出して、ペチャブリー要塞に立て籠もりましょう」

木屋船でアユタヤへ行く途中、長政はこの要塞を見ている。オープラは長政の言を容れて、日本人町に一隻あった小さな軍船に半数を乗せ、他は陸路を行かせることにして、夜、それぞれアユタヤを脱出させた。

水軍と陸上部隊はバンコクで落ち合い、南タイのペチャブリー要塞に入り、ここを本拠地として戦った。長政は自ら志願して軍船に乗り、水軍を指揮して神出鬼没の戦い振りをした。

要塞を占拠しているので、日本軍は独立国が出現したような威力を示した。

ソンタム王はもともと日本人に好意を持っていた。というのは、

――まず日本人は信義に篤い。日本国の将軍にたびたびシャムから使節を派遣しているが、帰国したその者達から聞くと、日本人の教養、文化は、他国をいちじるしくぬきんでているという。

――貿易をしてみても、オランダ、ポルトガル、スペインのような西欧国の者達より、はるかに信頼がおける。それに武勇も抜群である、等々を、常日頃思っていたのである。

そこで、いつまでも日本人と敵対関係になっていることの不利を悟り、純広に和解を申し入れてきた。純広もシャム国王と争うことの害は、充分に知っている。和解に応じる条件として、メナム河口の水上警備と、出入船の関所の管理権を日本人に委ねることを承知させた。

この河口のバンタワイ付近は、河に中洲があって船が自由に航行できなかったので、関所として関税を徴収するには最適地であった。この状況は現在でも同じである。

長政は一時はこの関所の管理隊長を、オープラ純広から命ぜられた。日本人町へ帰ってきたオープラは、町の再建と貿易に励んだ。長政はオープラの秘書のような立場になった。貿易のコツも一心に

覚えた。また彼の語学をマスターする能力は天才といってもよかった。日本人町の長老達は、年齢の点もあるが、いっこうにシャム語を覚えようとはしない。

年も若いこともあるが、長政はすぐ日常会話を身につけた。さらに貿易に必要な言葉もマスターした。

長政がさらに目をつけたのは、宮廷用語であった。土俗語や貿易商人の言葉と、宮廷用語とはおのずから差異がある。なんといっても、日本人町、ポルトガル人町、支那人町、オランダ人町等を支配し、権力を持っているのは、シャム王であり宮廷である。

宮廷人に近づき、宮廷の最高権力者の王に近づくには、何よりも正しくきれいな宮廷語をあやつらなくてはならない。長政は心して生きた宮廷用語の研究につとめた。

みどり蛇

長政にとっては、胸をかきむしられるようなことが起きた。それはオープラ純広の日本への帰国である。これは因幡城主亀井の命令であった。

多量の鉛や火薬をシャムから輸入した家康は、いよいよ豊臣家と大坂城をこの地上から抹殺しようと、決意を固めたのである。

家康からの密命によって、亀井は純広に帰国を命じた。純広から大砲のことについて、直接種々訊ねたい、ついてはできうる限り大砲の知識、できうればその鋳造法についても、学んで来るように、

との手紙であった。

「頭領、どうしてもお帰りになるのですか」

「長政、俺はお前と違って自分の意志でこの国へ来たのではない。いつの時代でも主持ちというのは、つらいものよ。自分の身であって自分のものではないのだ」

「頭領がおられなくなったら、私は一体どうしたらよいのでしょう」

「そう言ってくれるのはたいへん嬉しいが、お前らしくもない。お前はいまにこの日本人町になくてはならぬ者になる。シャムの王室とも昵懇にして、皆の者を頼んだぞ」

「頭領、私はまだ洟たれ小僧です」

「まあいいわさ。次の頭領は津田又衛門殿だ。津田殿は私のように商人じみてはいない。実に立派な御仁だ。津田殿にはお前のこともよく頼んでおいた。津田殿もお前のことを、頼母しい青年だと言っておられた。今までどおり秘書として仕えるがよい」

オープラ純広はシャムを去った。その日、長政は岸壁で、オープラの乗った船影が見えなくなるまで、立ちすくんでいた。

残照が映えている黄昏であった。それは長政の故国、駿河の久能山の黄昏によく似ていた。

オープラの次の日本人町の頭領は、純広が言ったとおり、津田又衛門であった。津田は一六一二年(慶長十七年)から一六一六年まで頭領をつとめた。

津田は長崎の人。大志をたててシャムへ渡った。いずれは名ある武士の末であろうが、誰にも自分の経歴については、一語も語らなかった。武術の心得もあった。

オープラからの引き継ぎもあり、津田も長政を手許において、何くれとなく面倒をみていたが、津田自身も長政を調法としていた。

シャムへ渡ってから長政は、すでに三年が経っていた。今では津田のシャム語の通訳をつとめることができた。

ある日のこと、長政は宮殿近くの孟宗竹の竹林のほとりを、一人で歩いていた。シャムにも日本と同じような竹が密生する。ふと立ちどまって、その葉鳴りを瞑目して聞いた。なんともなつかしい。駿府の浅間神社の山にも竹林があった。やがて眼を開いた長政は、はっとして息を呑んだ。貴人が従者を二人連れて、三間ばかりの距離の小道に、たちどまって長政を見つめている。

長政がはっとしたのは、貴人を見たからではない。蛇を見たからである。二尺あまり（約六十センチ）の緑色の蛇が、貴人の足許へくの字を幾つも描きながら突進している。

それは一瞬のできごとであった。

長政の腰間からは日本刀が抜かれ、二、三歩駆けると大きな弧を描いて跳躍し、夕日に煌いた大刀は、大地に打ち込まれて火花を散らした。緑色の蛇の首は胴から切り離され、茶色の尾はまだくねっていた。貴人と従者は無意識のうちに後退りして、身構えた。長政は素早く刀を鞘におさめて跪いた。

事態は貴人達にも、すぐさま判然とした。

緑色の蛇は外国人たちの間では、グリーン・スネークと呼ばれ、日本人は「みどりへび」と呼んでいた。日本の蝮のように頭が三角にくびれていないが、尾が茶色の緑蛇は猛毒を持っているので、内外人から怖がられていた。

貴人はソンタム王であったが、日本人町の青年であることは理解していながらも、無官の者に軽々しく言葉をかけることなく、長政に眼で会釈して立ち去った。

長政任官

津田が日本人町の首頭になって間もなく、シャムとビルマの間に戦争が起きた。シャムとビルマとの抗争は宿命的なもので、のちにアユタヤはビルマのために焼き払われて、首都をバンコクに移すことになる。この時のビルマ軍には、ポルトガル軍がついている。シャム側は劣勢なので、ソンタム王は日本人町に援軍を依頼してきた。アユタヤには各国の外国人町がある。

津田は、それらの中でも日本人町が主導権を握ろうと、七百人ばかりの日本人部隊を引き連れて参加した。

津田は長政に百人ばかりの日本人部隊を預け、一方の隊長とした。

「ありがとうございます頭領。ついてはお願いがございます。俺の隊には暴れん坊ばかりをまわして下さい」

長政は喜んだ。正式に百人の隊長に任命されたからである。その鎧、兜に身を固めたいでたちも立派であった。大刀は無銘ながら、駿府脱出の時、家宝になっていたものを盗み持ちだしたのを、帯びている。

鎧の背に差した旗指物が、人々の目を瞠らせた。最上端に大きな赫い日の丸が描かれていて、その下に「南無八幡大菩薩」と、墨痕鮮やかに書かれている。日の丸が好きなのである。

加藤清正が朝鮮出兵の時に用いた烏帽子のような長い兜の上の方に、日の丸が描かれていたことを、耳学問で聞いたうえでの発想であろうが、とにかくひとの意表をつく。

たびたび述べるが、人心操縦の妙を得ていたのは、天成のものであろう。

百人を前に得意な弁舌で獅子吼する。

「みんなよく聞いてもらいたい。俺の命はみんなに預けた。みんなの命も俺に預けてくれ。俺はいつも言っているように織田信長の後裔だ。だから俺はいつも先頭にたって戦をする。南無八幡大菩薩もご照覧あれ」

長政隊はいつも先陣をつとめた。

中軍の津田も叱咤する。ふるいたった日本人部隊は、実に勇猛果敢に戦って、ビルマ、ポルトガルの連合軍を大いに破った。

ソンタム王は喜悦した。

そして自分の妹を、津田の妻として与えた。

これはシャム王室の慣習の一つで、戦に勝った将軍には王の妹を与えることになっていた。

ソンタム王にお礼に参内して帰った津田は、長政を呼んで言った。

「長政喜べ、ソンタム王が、いつも先頭を進んで勇敢に戦った、体の大きい若い隊長は、なんという名前か、御下問になった」

「はあ!?」

「山田仁左衛門長政と申す者で、日本の偉い武将の血をひく者です、と言上した」

「頭領、そう言ってくれたのですね。俺にとっては何よりもありがたいことです」

「王はお前を知っておられるように頷かれた。そしてお前に握・板（オーク・パン）の位をたまわったぞ。お前はもう無官ではない。今日からオーク・パンだぞ」

長政の顔がみるみる紅潮した。

その頃のシャムには、一代制の六階級の官爵名があった。上から順に記すとこうなる。

握・雅（オーク・ヤア）、握・浮哪（オーク・プラ）、握・鸞（オーク・ルオング）、握・坤（オーク・クン）、握・悶（オーク・ムン）、握・板（オーク・パン）。

基本になるのは以上の六階級であるが、それに付随する官職もあって、固有の姓名はいっさい呼ばなかった。

駿府の浮浪の徒、ほら吹き仁左、沼津のかごかきが、シャムへ渡って三年目に、兵隊の位で言えば最下級の将校ながら少尉に任官したのである。

長政は早速、津田に伴われて宮中へ参内して、ソンタム王の御前で任官式を行った。

王は親しげに長政に笑みかけた。言外に「みどり蛇」の時のお礼を言っているのであろう。

戦いのない時の長政は、水軍の訓練に励んだ。駿府の滝、太田の船で日本を脱出以来、シャムへ渡来するまでの間、自らすすんで水夫の仲間に入り、操船術を習練し、アユタヤへ到着してからも、つとめて船へ乗るようにしていた。

当時のアユタヤへの陸路はなく、各国の貿易船もメナム河に停泊していたし、物資の運搬船の小舟も数百と往来していた。

日本人町の間でも百ぐらいの舟を所有していた。

日本人町の仕事は外国人部隊として、シャム王宮に忠誠をつくすことも重大なことであったが、なんといっても根本をなすものは貿易であった。

「頭領、これからは水軍をつくらなければならないと思いますが。それにはなんといっても、もっと大きな軍船の建造ですね」

長政の提案に津田も大きく頷いた。

「ソンタム王は日本人を一番信認しておられる。水上警備も日本人町におまかせになるであろう」

津田はその頃、戦功によってソンタム王から下賜された王の妹との間に、三左衛門という男の子が生まれていた。

「時になあ長政。俺は近く日本へ帰らなければならぬのだ。もともと交易のために長崎からシャムへ派遣されてきたのだ。お前にだけは話しておく」

長政な悲しそうな顔をして、津田を見つめた。先にはオープラ純広がアユタヤから去っていった。今また津田も去ると言う。

「今すぐにというのではない。日本への積荷も大量に集めなければならないし、できたら船を建造して、それへ乗って帰りたい」

津田は頭領を城井久右衛門に譲りたいと言い、間もなくそれは実現した。

城井は元和二年（一六一六）から六年まで日本人町の頭領をつとめた。王宮から「クン・スン・サットル」の官に任ぜられている。

城井もなかなかの人物で、元和三年にシャムの外務大臣から、日本の老中、井上主計頭正就への手紙のなかにも、城井の活躍振りが書かれている。

城井の父は九州の平戸から、イギリス、オランダの商館を経て、絶えず城井と連絡をとっていた。これは貿易に関してである。

城井も津田の意を受けて、大軍船の建造に着手した。発案者の長政は、建造の責任者として監督した。現在でもアユタヤの日本人町跡には、造船や船の修理をしたあとと思われる〝船堀〟のあとがある。

大軍船は見事にできあがった。これを機会に、津田と城井は長政を日本人町の頭領に推挙した。日本人町の人々は、年の若い長政が頭領になることに誰も反対しなかった。

元和六年十月のことである。駿府を出てから十年、弱冠三十歳で山田長政は日本人町の頭領になったのである。

長政、幕閣へ書簡を出す

ソンタム王は日本との貿易の有利なことを知り、それまでにも日本の将軍に親書や貢物を贈っている。

長政は日本人町の頭領になったので、ソンタム王から上から四番目の『坤・采野・惇（クン・チャヤ・スン）』の官爵名をもらっている。これは軍人の位で言えば大尉級である。

元和七年（一六二一）八月十一日、ソンタム王はまた使者を日本に送った。シャムの使者は、クン・プラサート、クン・ピチット、ソン・マーツ等であったが、長政は自分の家来の伊藤久太夫を派遣して、老中の土井利勝、本多正純に手紙を送り、二代将軍秀忠には鮫二本、塩硝二百斤を献上している。

金地院崇伝像

他に通訳官としては、木屋弥三右衛門、それに一行の護衛として日本町から、六十数名が従った。この時の模様が『異国日記』に残っている。

本書でたびたび引用する『異国日記』とは、先にも述べたが、これは江戸幕府初期の外交文書の控帳で、上下二冊になっている。京都南禅寺金地院が所蔵している。

第一冊の方は、前にもふれた金地院崇伝が、慶長（一五九六）、元和（一六一五）、寛永（一六二四～一六四三）にわたって、シャム、カンボジア、オランダ、朝鮮、中国など諸外国船の来航の模様や、外国使臣との謁見、外国からの文書、それに対する返書、それを作成するにいたった経緯等を記述したものである。

第二冊は崇伝の書いたものではなく、門人の最岳元良の筆記によるが、アンナン、ルソン等への書

簡の根本資料となるもの等がおさめられている。

このほか、南禅寺には、江戸時代初期に幕府が出した海外渡航許可証の控帳『異国渡海御朱印帳』などもある。さて、シャムの使者を将軍及び幕府が引見する模様を、日記風に書いてみよう。

一行は元和七年八月十一日に、長崎の長崎奉行所へ到着の届けを出し、江戸へ行って将軍に謁して両国の親交を結びたいと願い出た。

二十六日。シャム国使江戸へ到着。誓願寺を客館に当て、牧野豊前守信成が接待役になる。

二十七日。老中の邸にシャムの通訳官、長谷川、木屋を呼んで、シャムの使者の趣意を尋問する。この時、将軍の政治顧問で御朱印船の発行や、外交文書の作成係、南禅寺の僧崇伝も同席する。

二十八日。通訳官など江戸城へ上り、シャムから本多上野介正純、土井大炊頭利勝に贈る書簡、花緞十条ずつを贈呈する。花緞は木綿織で当時は木綿は貴重品であった。

またシャム国王からは将軍に、長剣、短剣、各一把、鳥銃一双、全磐一具、花緞十条、硯一具、象牙千斤などを贈る。

二十九日。林永喜信登、金地院崇伝、牧野豊前守信成、誓願寺へ行き、シャムの使者にたいしてシャムの国土風俗等を聞く。この時の長政の土井、本多への手紙を意訳すると、

「恐れながら申し上げます。シャムの使者につけて伊藤久太夫をさしむけ、上様（将軍）に鮫二本、塩硝二百斤を進呈致しますので、御前体よろしく願い上げます」

と言っている。

この時、土井、本多両名の名で長政に返書と晒二十匹を贈っている。この手紙も崇伝が書いた。崇

伝は『異国日記』九月三日の項に、

「大久保治右衛門の六尺、山田仁左衛門、暹羅へ渡有付、今は暹羅の仕置を致す由也。上様の書にも見えたり此者のことか。大炊殿（土井）、上州殿（本多）へ文を越す」

と書かれている。

ソンタム王から将軍秀忠への国書は、金札、すなわち金紙に書かれていた。また、長政からの土井、本多あての書簡は奉書の折紙に書かれていた。

幕府からの国王や長政への返書は、鳥の子紙の上下を切って、丈を短くしたものに書かれていた。どんな文字で、どんなスタイルで書かれたか、興味をひくので、その原文をかかげてみよう。

貴国之両使捧二王書一来　奏上二大樹源君一　両使拝礼則賜二返翰一　鮫弐本塩硝弐百斤至二両臣一恵来。厚意多多。晒布弐拾匹充投二贈之一

元和七年九月吉辰　土井大炊助利勝（朱印）

本多上野介正純（朱印）

答　山田仁左衛門尉

意訳するとこうなる。

「貴国の御使者がシャム王の金札を奉じて来られました。よって将軍家に奏上致しました。両使には将軍からの返書を差し上げました。鮫二本塩硝二百斤を、我等二人に賜わり、厚く厚く御礼申し上げます。

返礼といたしまして晒二十匹（一匹は二反）をお贈り申し上げます」

〝大樹源君〟というのは、将軍のことで、家康は「我は八幡太郎の後裔であるから源氏である」と称して〝征夷大将軍〟になったので、徳川将軍のことを〝源君〟という。

面白いことに、長政あての手紙の最後尾へ、

「貴域に日本人が多数おられる中から、抜擢されて頭領になられた由、大慶至極に存じます」

と書こうとしたら、他の幕閣の閣僚が、日本にいた時の長政が、性来流浪の人物であるとか、怪傑であるとかの噂を聞いていて、

「もし長政が今後、日本へ反旗でもひるがえすようなことがあると、将軍家のお名前を汚すことになる」

と危惧して、この一節は抹殺して、返書したという。これは長政が青年時代、六尺として仕えた沼津の城主、大久保忠佐が、

「あれは私の六尺（舁夫）であった」

等と、沼津時代の長政のことを、あれこれと吹聴したので、幕府の老臣達が、長政の素性を知っていたのであろう。

さて、『異国日記』をつづけよう。

九月一日。今日は正式にシャム国の使節を引見する日である。二代将軍秀忠は、御長袴を召して大広間に出る。上段の緋緞子の大錦の敷物の上に坐る。

シャムからの貢物は秀忠の前に並べてある。酒井忠世、土井利勝、本多正純等は、半袴をはいて侍座する。

ここでも、こういう儀式の時の立役者、金地院崇伝は、紫の衣にどんすの袈裟をかけて控えている。その他、諸大名は半袴で列席する。

酒井忠世がシャム国王の金札を将軍に見せる。つづいてその書簡を将軍の右に置く。

シャムの使者、通訳三人が下段から将軍に拝礼する。酒井と土井と本多が、それぞれ将軍の慰労の言葉を伝える。

通訳たちが使者の言葉をそれぞれ伝えたのちに退出する。将軍は常の間に来て、崇伝にシャム王からの書簡を読ませ、その意味を聞く。それにはこう書いてあった。

「シャム国は貴国と永く友好関係を保って、お互いに国書のやりとりや、貿易関係を結び、両国の利益となるよう、お互いに努力いたしましょう」

そこで将軍は返書を書くよう、崇伝に命じる。翌、九月二日。崇伝は書いた返書を将軍に見せる。本多、土井の両人からは、今までの報告文を見せる。

九月三日。シャム国使は江戸城へ上って、お別れの言葉を言上する。将軍からシャム国王へは、答礼として、金屏風三双、鎧三領、太刀二振、馬三頭を、使者二人には銀二百枚、小袖十枚ずつを、通訳には銀五十枚、小袖二十枚ずつを贈る。

かくして長政が、はじめて日本の将軍、幕府の高官に、「日本人長政ここにあり」と、その名を知らしめた儀式は終ったのである。

シャム、カンボジア戦争

その翌年の元和八年、ソンタム王はカンボジア王ジャイ・ジェタ王が、貢物をシャムへおさめないので怒った。

シャムとカンボジアは隣国で地つづきである。表面上は対等ということになっていたが、シャムの方が国力が上なので、それまでカンボジアはシャムに従属という形をとっていて、毎年貢物を献じていた。

それがおさめなくなったので、従属関係を明確にさせるため、ソンタム王はカンボジアへ大軍を出すことを決意した。

その報はすぐさまカンボジアにもとどく。

そんな時、長政のもとへ密使が来た。カンボジアの首都プノンペンの日本人町からの密使であった。

日本人町には小西行長や加藤清正の遺臣が、千人ばかりいた。

「アユタヤの日本軍の勇猛さは、プノンペンまで伝わっている。同じ日本人として慶賀にたえない。このたび、シャム国王は大軍でカンボジアへ進軍すると聞く。我等日本人部隊は、カンボジア王の厚い庇護のもとにあり、絶えず王の親衛隊となって、戦っている。今度もシャム軍と戦う決意である。ついては、同胞相殺し合う流血の惨だけは、なんとしてでも避けたい。願わくは友誼をもって、善

処されんことを。いつの日か、必ず貴君等に報いんことを誓う」

密書にはこう書かれてあった。

長政は沈思した。そしてすぐに決断した。

――日本人同士の流血は断じて行ってはならない、と密使にもその旨を伝えた。

密使が帰って間もなく、ソンタム王からの使者が来て、宮中へ伺候するようにと伝えた。

長政が参内すると、思っていたとおり果たして、ソンタム王からカンボジアへ出陣の要請であった。長政は容(かたち)を正して言上した。

「陛下、まず臣の心情をお察し下さいまし。プノンペンにも日本人町がございます。私たちは遠く故国を離れて異境で暮しているもの同士です。その日本人が敵と味方に分かれて、殺戮(さつりく)し合うということは、なんとしてもたえられません。

私たちは陛下の御命令があれば、いつでも身命を捧げてまいりました。しかし、日本人町本来の仕事は貿易でございます。その点でも日本と陛下とのかけ橋になってまいりました。

私たちの船も造船いたしましたので、近く長崎まで航海することになっております。陛下、このたびの出陣だけはご辞退致しとうございます」

真情をこめての長政の言葉に、賢明なソンタム王は諒承した。事実、長政等の貿易船もすでに竣工していたのである。

ソンタム王は水陸両面から、日本人部隊ぬきでカンボジアへ進攻した。王は陸上を進んだが、水軍の方はカンボジアの猛反撃にあって敗退してしまった。勢いにのったカンボジア軍は、水陸一体となってシャム軍に襲いかかった。なかでも勇猛果敢に先陣をかけ、獅子奮迅の勢いで壮絶な戦いぶりを示したのは、プノンペンの日本人町の部隊であった。

乾坤一擲(けんこんいってき)の戦いであるからと、カンボジア王から懇請された日本人町は総出動で参戦した。

シャム軍はさんざんな敗北をきっした。指揮官の大将は戦死し、数千人と二百五十頭の象部隊も捕虜となり、ソンタム王は命からがらシャムへ敗退した。

長政が予見していたとおりの結果になった。長政には、誰にも洩らさなかったが、もう一つの計算があった。大敗したソンタム王は、アユタヤの日本人部隊を、どう思われるか、ということであった。

もし長政軍が参戦していたら、凄惨な日本人同士の殺し合いになり、どちらの日本軍もおそらくは、刺し違えて全滅に近い惨状をていしたであろう。

あとはカンボジア王とソンタム王の胸三寸で講和したかもしれない。

いずれにしろ、日本人部隊にたいして、それまで以上に評価することになろう。事実、カンボジア王は大いに喜んで、プノンペンのポルトガル人町、オランダ人町の監督権までも、日本人町に与えたのである。

これはのちの話になるが、長政没後、養子オクンは、カンボジア王室を頼ってプノンペンへ行っている。

このオクンのことを日本ではオインと呼んでいるが、それは漢字で「阿因」と書いたのでそう読んだのであるが、オクンが正しい。

筆者は昭和四十七年、オクンやアンコールワットの遺蹟を探るため、プノンペンを訪ねた。

その時カンボジアは、シヤーヌーク殿下とロン・ノル政権との間で熾烈な内戦の真最中であった。砲煙がくすぶるプノンペン飛行場へ降り立ち、フランス人が建てた木造三階建てのプノンペンホテルへ落ち着いたが、ホテルでも砲声が聞こえた。しかし、私はなんとしてでも、アンコールワットまでは行きたかった。

というのは、遺蹟の石に、加藤清正の遺臣と称する人物が、矢立で日本字を書いたものがあると聞いたからである。

三つの石に書いてあるが、二つは全然判読できず、一つはわずかに読めるという。

アンコール城城壁

小銃弾や砲弾が飛び交う中で、三日間ホテルでねばったが、ついに目的を達することはできなかった。

プノンペンの日本人町も大いに栄えた時期もあったが、時代の変遷とともにいつしか消滅してしまった。

話を戻そう。

敗退してきたソンタム王は、長政の思惑どおり、日本人町の日本人部隊をさらに信頼し重用するようになった。

頭領の長政への信頼度、依存度がますます高まったのは、当然のことであった。

ソンタム王は長政と相談して再度、日本の将軍に国書を出すことにした。

二人はどんな相談をしたのであろうか。

元和九年（一六二三）八月一日。

シャム、ソンタム国王の金札を持った使者が二人、京都二条城で秀忠と会見した。今度は長政は手紙も貢物も出していない。

秀忠はすでに将軍職を家光に譲り、大御所になっていた。

秀忠はその日、長袴をはいて大広間の上段に着座していた。重臣としては酒井忠世、土井利勝、その他幕府の執政者が侍り、それ等は秀忠同様に長袴、その他の諸大名は半袴で伺候した。

シャム側の通訳は一名、幕府側の通訳は前に述べた木屋船で有名な木屋弥三右衛門。木屋は当時の堺の商人がよく着た十徳姿で、その時は入道になっていた。

シャム側の貢物は鉄砲二十挺、鉛二十貫、焰硝（火薬）一箱、貝光布二十枚、花綿五反、象牙九本であった。

金札を差し出したが、その国書が問題であった。

まずシャムがカンボジアに兵を出した所以を説明し、シャム軍が敗退を余儀なくされたのは、プノンペン在在の日本人部隊が応援したからであるとし、

「何卒、将軍からプノンペンの日本人部隊に、シャムとの戦闘に参加しないように、命令を出して

いただきたい」
というにあった。
このことをソンタム王と長政は相談したのである。
その他に国書には、
「両国を結ぶ情、骨肉に等しく、シャム即ち日本なり。歳々往来を絶たざることを望む。もし貴国の用いんと欲するところの物あらば、乞う示し給え、常に命に応ずべし。和好一家と同じなり」
と結んであった。
これは長政がソンタム王に示した文章であった。駿府の臨済寺で学んだ学問を役立てたのである。
この国書を読んだ幕府側は九月五日、シャムへの返書について、金地院崇伝が二条城へ上り、秀忠に面接して打ち合わせ、大体において次のような趣旨の返書をしたためて、シャムの使節に渡した。
「カンボジアがシャム王にそむき、貢を入れないのでシャム王が兵を送って誅せんとした時、カンボジア在住の日本人が、その理非をつまびらかにせず、カンボジアを援助したことは、商売の利にのみ走り、利欲にかられた商人の行為である。
臣として君にそむき、下として上を犯すことは、天理人道において、誅罰をまぬがれることはできない。
わが国は貴国と通好の本意を失う気は、いささかも持っていない」
いまだ鎖国をせず、御朱印船の許可権を持っていた幕府としては、一応の権威あるところを見せてはいるが、直接の効果はさらになかった。

幕府がカンボジアの日本人町あてに、なんらかの通達を出したとしても、小西行長や加藤清正の反幕の残党にとって、馬耳東風と聞き捨てられたに相違ない。長政もそのことは充分に知っていた。

頭領山田長政の偉功

日本の年号は寛永（一六二四）となった。
のびのびになっていた津田と城井は、日本へ帰っていった。アユタヤで船を建造して、それに乗って帰るという、津田の夢は絶たれた。
というのは軍船を建造したためであった。津田はシャム船を買って、それに乗って帰国した。帰国する時、ソンタム王妹との間に生まれた三左衛門を連れていた。王妹はもとより日本へは連れ帰れない。それは悲しい別離であった。長政も、津田の傍に立っている城井も思わず顔をそむけた。
息子の三左衛門も王妹も、二度とこの世で相まみえることは不可能であろう。
季節風が吹きはじめた春ではあったが、各々の胸には寒風が唸りを生じて吹き荒れていた。
津田は長崎へ帰ると、貿易のかたわら材木町の名主をつとめた。
帰国に際し、大量の物資のなかに三本の赤栴檀（せんだん）を持ちかえった。一本は肥前の鍋島家に望まれ献上し、他の一本で長崎能仁寺の仏像を彫み、残りの一本は長崎貿易奉行の末次平蔵に所望されたので、寄贈したという。
長政はたびたびソンタム王の前へ伺候した。

シャムへ渡ってすでに十年になる。

沼津の大久保家の六尺をやっていた青年時代でも、六尺ゆたかな偉丈夫であった。殿様のかごかきというのは、状況によっては戦場でもかごをかついで駆け回らなくてはならない。六尺ゆたかな頑健な体でなければつとまらない。それで〝六尺〟というのである。

それが駿府を出て以来の精神的な練磨と、潮風、河風に晒され、南国の灼熱の太陽に灼かれ、高く太い鼻梁、広い額、人を射る眼光、大きく厚い耳朶等から貌づくられている容貌は、ますます魁偉の度を深め、甲冑に身を固めて、しっかと異国の大地を踏まえ、屹立するさまは、まさに摩利支天（武士の神）の再来を思わせ、図南の英雄、風雲児山田長政像を形成していたのであった。

軍船が進水したので、長政は水軍の演習に専念した。その力を試す時が間もなく来た。

東南アジアに基地を設け、植民地化を企てていたオランダは、ポルトガルのマカオの基地を奪取しようとして、艦隊を派遣した。ところがポルトガル、スペインの連合艦隊に敗北させられてしまった。

スペイン艦隊は余勢をかってメナム河へ侵入してきて、暴れまわった。シャム王室の貿易船をも拿捕したりして、猛威を振う。

ソンタム王は早速長政に援助を依頼した。

時こそ来たれ、と長政の水上軍と、日本義勇軍部隊は奮いたった。

長政は、元寇の役を思い浮かべた。

それは〝太平記読み〟等で十分に頭へ入っていることであった。

北条氏の鎌倉時代、元のフビライは日本の人貢を求めてきた。鎌倉幕府はこれを拒絶する。文永十一年（一二七四）、元軍は壱岐・対馬を侵し博多に迫ったが、大風が起こり敗退した。

元は再び弘安四年（一二八一）、范文虎を主将として十万の大軍で攻め寄せたが、河野通有等の西国の将兵が奮戦して大敗させた。

二度とも嵐で大風が起き元船が多数沈没したので、〝神風〟という言葉が生まれた。

長政はこの故事を水軍の将兵に話し、その戦法を用いることにした。

夜襲は古来、日本軍の得意の戦法である。軍船を漕ぎ出し、そのまわりに小舟を従え、軍船は適当な遮蔽物の陰に待機する。

小舟に乗った日本軍は、夜陰に乗じてスペイン艦に近づき、縄梯子を利用して艦内に忍び込み、敵の火薬庫に放火する。蟻のような多数が艦内の諸所方々に放火し、一団は火薬庫の放火係りを護衛する。

こと成就とみるや河中へ飛び込み、小舟へ乗れた者達は軍船へ帰るし、他の者は両岸へ泳ぎつく。それは勝手知った土地のこと、わが家の庭を歩くようなものであった。

負傷兵などを軍船に収容した長政は、スペイン艦隊に漕ぎ寄せた。

紅蓮の炎をあげた五隻ばかりのスペイン艦隊は、メナム河を深紅に染めて、断末魔の様相をていしていた。戦果を確認した長政は、兵士に命じて大砲を発射させた。実戦の訓練である。まさに止の一斉射撃であった。

生き残ったスペインの将兵は、ポルトガル人町に収容された。それもごくわずかな人数であった。

これはシャム王室や他の外国人町の人々にとって、驚天動地の出来事であった。

一夜で、あれほどの猛威をふるったスペイン艦隊を全滅させてしまったのである。しかも日本の水軍はほとんど無傷であった。

ソンタム王は驚喜した。

みどり蛇以来、頼母しい日本人として、任官させ、じっと見守ってきたが、これほどの胆力、智略、武勇の持主であるとは思わなかったのである。

ソンタム王は長政の位階を昇進させた。

長政に与えられた「オーク・プラ・セナー・ピムック」は、上から二番目の位である。

兵隊の位でいえば大佐で、まさに三階級の特進である。日本人部隊はソンタム王の近衛兵となり、長政は毎日宮中に参内してソンタム王に謁見していた。

このことは、寛永三年（一六二六）の正月のことであった。

毎日参内して、あざやかなタイ宮廷語をあやつり、ソンタム王や王の側近の高官たちと、日本の軍法や戦争の話などをする。

時には中国の『四書五経』等についても話す。その程度の知識は、駿府の臨済寺で勉学したものである。

シャム民族は、中国の雲南省から移動してきた民族なので、長政の話に興味を示す。

それらの話のなかで、長政はソンタム王に重大な進言をしている。それは王位継承に関することである。

このことはのちに、長政の運命にも重大な影響をもたらす。

シャムでは、王位は弟に譲ることになっていた。それを長政は世襲にすべきである、と説いたのである。

まず「堯舜時代」から説き起こす。

ここで少しく注釈を加えると、堯とは中国太古の帝王で、日月星辰の運行を測定させ、暦を作らせたことは有名である。

人民のなかで舜という者が、大変に親孝行であると聞いて、側近として重用し、その徳の高い人物を見込んで、自分の子供に帝位を譲らず、二女と娶せて帝位を舜に譲った。

堯は舜とともに、後世の人々に理想の帝王として尊ばれ、その治世は理想的な黄金時代とされている。その中国においても、堯舜時代をのぞいては、代々世襲であり、日本でも皇統は連綿として万世一系である、と長政は説いた。

ソンタム王は大いに心を動かされて、自分も王子に譲ることに決意し、のちにそのとおりにした。

このことで長政が王位継承争いに、まきこまれるのである。

長政の戦艦図

シャムで大佐の位まで昇進した長政は、寛永三年にシャムの外務大臣から、幕府の酒井忠世、土井利勝あての書簡を呈した使者とともに、駿府の浅間神社へ『戦艦図』を奉納している。

これが駿河人の、長政駿府出生説をなす根拠であり、長政の手紙の写し以外には、日本に現存する唯一の長政史料であるので、詳しく述べることにする。

ここに『長政渡唐録』なる一書がある。

駿府城外東押切村に居住していた国学者、柴山柳陰子が書いたものである。

柴山は、長政を台湾まで密航させた駿府の船持、太田治右衛門の後裔、太田与兵衛の蔵書（俗に太田本という）をもとにして、元禄年間（一六八八～一七〇四）に著述した。

この渡唐録には冒頭に、

「長政は自ら言う、織田信長の苗孫也。山田は織田の別名也」

と、大胆不敵に喝破している。その渡唐録に、

「寛永三年丙寅の頃、商船彼国（シャム）に到る時、山田おんぷら（オーク・プラ）命じて曰く、〝我本国にありし時、駿府の総社浅間新宮は霊徳高く、神威盛んにましませば、日頃殊に敬拝す。今他邦に有とも敬慕尊位すること等し。故に今玆に来りて軍艦を造り、戦場しばしば勝利を得しこと、日本神徳の冥護にあらずんば、いかでか我軍功を成すことを得ん。これによって戦艦を図し、絵馬に易えて神殿に奉納せん。宜しく持去って我為に寄附せよ。

標題の文字は平田仁右衛門に附託して書せしむ。年月姓名倭朝（日本）の暦号を以て本国の姓名を記すべし〟となり。平田氏諾して染筆す。

倭商来帰の後、神殿に掲げて国人をして見ることを得せしむ」

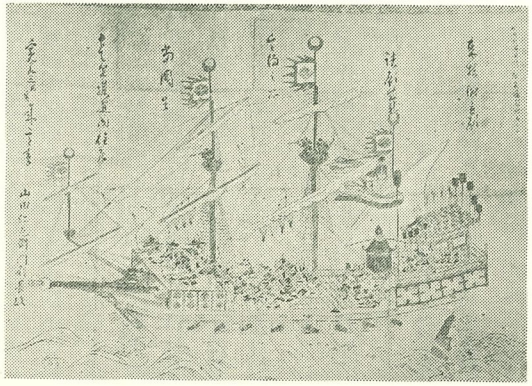
と書かれている。

また駿河の国学者で、天保三年（一八三二）に没した桑原黙斎の『駿河誌』は、

「長政は、浅間の社は産神なるに就て尊崇し、軍船の図を絵馬として暹羅より寛永中奉納す。右の絵津年誌ともに長政の自筆の由、一度帰朝の願望有けれども果さず」

と書いている。

図に書かれている、



山田長政の戦艦図（静岡浅間神社蔵）

「奉挂御立願、諸願成就、当国生、令満之所今天竺暹羅国住居、寛永三年丙寅歳二月吉日山田仁左衛門尉長政」

の文字が、駿府在住の平田左右衛門に書かせたのか、自筆かの点で分かれているが、おそらくこれは長政の自筆ではあるまい。

艦首には巨砲が二門あり、舷側にも八門の大砲がある。反対側にも同数の大砲があると思えるので、十八門の大砲を備えていた軍艦であることがわかる。

艦の上には約三十人ほどの人物が描かれているが、それぞれに甲冑で身をかため、ある者は矢を放ち、ある者は櫓柱の上に高所から鉄砲を撃とうとしている。

甲板上の中央には主将らしい人物が扇を持って立っており、その前に一、二の武士が銃を横たえてひざまずきながら、

主将の指図を仰いでいるらしい姿が見受けられる。

この主将こそ長政自身を描かせたものに相違ない。いったい何故、長政が浅間神社へ軍船図を奉納する気になったのであろうか。

長政は駿府脱出の夜、浅間神社の社頭で、これからの武運長久を祈り、名前も自ら長政としたのである。しかも浅間神社は自分の氏神である。

寛永三年の正月には、ソンタム王の依頼を受けて、一夜にしてスペイン艦隊を全滅させ、三階級特進の大佐（オーク・プラ・セナー・ピムック）になった。

ほら吹き仁左が駿府を出奔してから、十六年目で射止めた栄誉であった。

日本人町で造った軍船で、日本人部隊だけで樹てた偉功である。そのことを故郷駿府の人々にも知らせたいし、感謝もしたい。

そこでその軍船の図を描かせ、浅間神社へ奉納しようと思ったのである。

この軍船図は寛永三年から天明八年（一七八八）までの百五十年間は、浅間神社に秘蔵されていた。

戦艦図考

榊原長俊（この人物は戦艦図に関しては、きわめて重要な人物なので、後に詳述する）の記するところによると、この絵馬は木地に書いたものではない。

「享保の頃までは社中にありしが、玉殿多く破損し、雨露の災を憂て、今は表具して御宝蔵に納め、神主新宮兵部方に預れり。

表具竪（たて）六尺四寸五分、幅二尺六寸、上下茶緞子、中縁空色緞子、一文字白字の金入、金地彩色絵軍船図一艘、日本人乗たる体なり」

せっかく浅間神社に奉納されたが、寛永十三年（一六三六）の鎖国令で海外関係のものは隠され、宝庫に深く秘蔵されていたが、元禄年間以後、長政のことを駿河人が書くようになってから、再び浅間神社の宝物として脚光を浴びるようになった。

この戦艦図をさらに有名にしたのが、八代将軍吉宗が、「戦艦図を見たい」と希望したことであった。将軍の希望は絶対的命令である。

そこで戦艦図をわざわざ駿府から江戸城まで運んで、吉宗に見せた。

正徳元年（一七一一）、幕府は「長崎貿易新令」を出して、長崎での貿易を制限したが、逆の考えを吉宗は持っていた。

天明八年（一七八八）十一月五日昼、浅間神社の隣の町、片羽町から火が出て、おりからの西風にあおられて、本社、拝殿、楼門、末社などが一時に燃え出し、みるみるうちに全焼してしまった。火はさらに草深町の武家屋敷まで焼いてしまったほどであった。

その時、山田長政奉納の戦艦図も、他の絵馬とともに全部灰になってしまった。

ここで前述の榊原長俊が登場する。

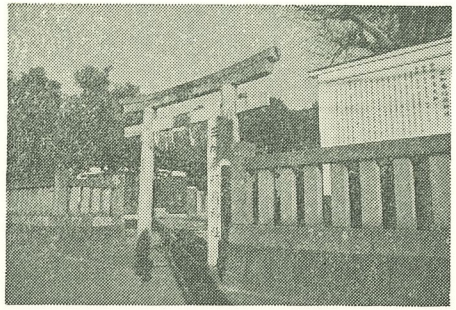
榊原は江戸から駿府加番として赴任してきた武士で、宝暦三年と天明三年の二回、駿府に在勤している。

駿府加番というのは、駿府城は三代将軍家光の実弟、駿河大納言忠長が失脚以後は城主をおかず、城代、奉行等はすべて一年交代で、江戸の小大名、旗本等が駿府へ来て勤務した。したがって下級の武士もそれぞれ駿府へ来たのである。

榊原は大身の旗本で、香山と号し、儒学にも精しく、故実の知識も豊富で、さらに武具、甲冑等に関する著述もあり、駿府勤番中、駿府の内外を遊歴して『駿国雑誌』を著している。

ちなみに現在の静岡市には、一加番稲荷（鷹匠町）、二加番稲荷（草深町）、三加番稲荷（水落町）の三つの稲荷神社が、駿府城跡をめぐって点在している。

これは加番の役人の役宅のあとで、いずれも邸内に稲荷神社を祀っていたので、明治維新後、その邸跡に稲荷神社を祀ったのである。



駿府三加番神社

なお三加番は、由比正雪の慶安事件後、駿府の警備を厳重にするために設けられたものである。

榊原は駿府在勤中、浅間神社の宮司、新宮左近に乞うて、戦艦図を模写した。宝暦四年のことである。

大火の翌年の寛政元年（一七八九）、新宮左近の子の兵部は父のあとを継いで宮司となったが、たまたま江戸へ来て、榊原のもとを訪ね、戦艦図焼失の顚末を話した。

その間の事情は榊原の書いた『浅間詣』に詳しいので引用する。

「この絵馬の事蹟、台聴に達し（将軍の耳に入り）、享保中江戸へ召し下して上覧あり、其後、天明八年申十一月五日浅間の社炎上の節、此絵馬も災を免れず灰に委す。寛政元年浅間の社司新宮兵部、予が茅屋へ訪来りていわく、去申年の炎上に当社珍物の絵馬も焼たり、この絵馬は有徳院殿（八代将軍吉宗の法名）の上覧に備えし物故、神宝同然なりしに、写しを仕置たるものなし、残念なりと悔み語りし故、予宝暦四年甲戌駿河に在しとき、その先考左近にはかりて、彼絵馬を謄写し留置たりとて、取出して兵部に与えければ、限りなく喜びて、夫を謄写してまた社頭に留むるという」

これでみると、従来宝物として伝わっている戦艦図は、原本から模写したものではなく、複写であるということになる。

ところが、榊原長俊が模写した戦艦図がその後、出現したのである。

時代は現代となる。

郷土史家に後藤粛堂という人物がいた。後藤が大正十年の秋、地元の『静岡民友新聞』に「山田長政とその時代」という記事を連載したことがある。

するとある日、後藤氏のところへ一通の手紙が舞い込んだ。差出人は森の石松で有名な遠州森町の医師の中沢親之氏。

「私の家に山田長政の戦艦図があるが、一度鑑定してもらいたい」

という文面。

早速後藤氏は森町へ飛び、見たところ、まさしく榊原が宝暦四年に、長政奉納の戦艦図から模写した第一号であることがわかった。

それが中沢家に伝わっていた経路は次のような次第であった。

榊原長俊の子の台谷は軍学者であった。その台谷が門人の中津藩の島津定恒に戦艦図を譲った。島津はさらにそれを門人の中沢親定に与えた。中沢家は下総佐倉藩で三代つづいた軍学師範の家柄であった。親定はこの戦艦図とともに、左の記文を残している。

「山田長政戦艦図一葉、駿府浅間神社奉納額の謄写にて、榊原長俊氏秘蔵のところ、故(ゆえ)有って余が軍学の師、旧中津藩士島津定恒先生に伝う。嘉永五年壬子十月上午、同師より授けられたるもの也。依って永く之を子孫に伝う。　中沢親定」

親定氏はすなわち親之医師の父上。

しかもその図の上右端に、「駿河国浅間社へ、暹羅より献じた絵馬の写」と書いてあり、香山家珍蔵の印も押してある。

香山は榊原長俊の号。これでは間違いない。そこでこの戦艦図は、当時の静岡市助役、水野富三郎氏と後藤氏の斡旋によって、中沢氏も快く浅間神社の宝物として寄付してくれた。

その献納式は大正十二年十二月十日、静岡市郷土史研究会員たちが参列して行われた。浅間神社には、したがって二枚の戦艦図の模写があるわけだが、公開しているのは、榊原長俊が模写したものである。

この戦艦図を長政は〝絵馬〟として奉納したとあるが、絵馬について述べてみよう。

長政の戦艦図に「当国生」と書いてあるから、駿府生まれだと、駿河人は断定する。

しかし、尾張生まれ、伊勢生まれを主張する人々は、当国生まれとは、外国からみれば日本を指しているのではないかと反論する。

であるから、熱田神宮か伊勢神宮へ奉納するつもりではなかったか、との説をなす人もいる。

日本における絵馬の伝説は古くからあり、寛文十二年(一六七二)六月、大江匡衡(おおえのまさひら)(平安朝中期の学者)が北野天神への供物のなかに、「色紙絵馬三匹」、「走馬十列」と出ている。

絵馬とは文字どおり絵に描いた馬のことであるが、はじめは神馬の図を描いて神社に奉納したものが、後世になると神馬だけではなく、鳥獣、人形、武者絵なども描くようになり、さらに紙から板に描かれるようになった。

長政の戦艦図は、板でなく、絹地に描かれたものである。シャムは古くから絹の名産地で、現在でも〝タイ・シルク〟として珍重されている。

駿河の浅間神社には、弘化、文久、安政以後、明治維新直前までの板の絵馬が百数十枚、拝殿や楼廊の軒下にかけられていた。

今はとりはずされて保管されている。

これらのことからおしはかると、駿府の浅間神社には、古くから絵馬を奉納する慣習があったことがわかる。伊勢神宮や熱田神宮には、庶民の絵馬を奉納する慣習はなかった。

奉納絵馬（静岡浅間神社）

貿易家長政

ソンタム王時代の長政の本来の任務は、なんといっても貿易であった。ソンタム王とて、年中戦争をやっていたわけではない。

貿易家としての長政はなかなか活躍している。寛永元年（一六二四）以前にも、長政の船は毎年長崎へ来ていたらしいが、正確な記録は残っていない。寛永元年にオランダの商館が長崎にできた。ゆえに、それ以後の記録はオランダ側の文書で明らかである。

長崎オランダ商館長、ニウローデの記録によれば、寛永元年に長政の持船が長崎へ入港した。持ってきた鮫皮は品質が最優秀であったので、オランダ船が持ってきたものより、はるかに高く、またたく間に売れてしまったという。

鮫皮より利益が多かったのは、蘇枋木であった。ニウローデは長政の持船が積んできた蘇枋木の半分を買い占めた。

この持船は長崎で艫をつけ加えたり、他の個所の修理をしたりしている。

その翌年の寛永二年には、長政は大鹿皮五百枚と鮫皮三百枚を、無賃でアユタヤ発のオランダ船へ積み込んで、日本へ送ることを依頼した。また別に同船へ、これは運賃を払って、蘇枋木五百斤を積み込んだ。

アユタヤのオランダ商館長、ファン・デル・エル・ストは、長崎の商館長ニウーローデに、「種々

の理由でこれを引き受けざるを得なかった」と、通知をよこしている。

種々の理由とは、もしこのことを拒絶すれば、ソンタム王の信頼の厚い長政の機嫌をそこねて、オランダ商館としても、いろいろ支障をきたし、また日本人町の頭領としての長政の意に反すれば、オランダ商館として輸出品の集荷の際、長政以下の日本人の手を経なければ、いっさい集まらなくなることを考慮したのである。

寛永元年に長崎へ来た長政の船が、なかなかアユタヤへ帰って来ない。そこで寛永三年にタイの使節が日本へ行った際、タイの執政から老中の土井利勝に送った手紙のなかに、次の文章がある。意訳する。

「オーク・プラ・セナー・ピムックは船を海外に出して貿易しているが、その持船が三年も経っているのにアユタヤへ戻って来ない。その船は日本の長崎へ行っているので、どうして戻らないのか調べてもらいたい。また早く帰るように斡旋していただきたい」

〃オーク・プラ・セナー・ピムック〃とは長政の官爵名である。土井はこれにたいして、

「艫を修理したり、貿易で多忙なためおくれているのであろう」

と答えている。

出帆の許可は幕府が与えていた。結局この船は、季節風のこともあり、寛永三年の冬に長崎を出帆した。

貿易家としての長政は、数隻の船を持っていた。その交易の範囲も、日本だけでなく、ジャワ、マレー、カンボジア、交趾（こうち）支那一帯の日本人町であった。交趾支那というのは、十六世紀末から十七世

紀初めにかけて、現在のアンナンに当る地方のことを言った。

寛永五年（一六二八）の春、長政の船は米を積んでマラッカを航海中であった。

マラッカは当時はポルトガル領で、この時はオランダと戦争の最中であった。ポルトガル領を航海していたので、長政の船はオランダの艦隊に拿捕（だほ）されて、バタビヤへ護送された。バタビヤにはオランダの総督クンがいた。

クンはシャムにおける長政の名声も聞いていたし、ソンタム王が長政を敬愛し、信頼していることも聞きおよんでいた。そこでクンは早速、参与会を召集して、その結果長政の船を解放した。

解放するに当って、オランダの敵国であるポルトガル領のマラッカに、米を送らないと約束するならば、バタビアへ来て貿易することを許可すると言い、その時長政の船が積んでいた物品を便宜をはかって全部売りさばかせた。

アユタヤへ帰港した船長からこのことを聞いた長政は、クン総督の好意に報いるため、総督あての貢物と手紙を持たせ、バタビアへ航行させた。総督は非常に喜んで、長政の船に積んであった米を全部買い上げ、次のような手紙を長政に送ってよこした。

オランダの総督であるから、アユタヤのオランダ商館長よりはるかに地位が高い。その人物が書いた手紙であるから、その当時のシャムにおける身分や力がわかる。これもオランダ側の文書として現存するものである。

「シャム在住の日本人オープラ（長政のこと）に敬意を表します。閣下の手紙と贈物は船長のシミズ（清水、長政の部下）から受け取り、大変うれしく存じました。

また、われわれやシャムに在留するオランダ人に親切にし、貿易の上でも種々便宜をはかって下さるとのこと、衷心より感謝致します。

閣下がわれわれに好意を示されると同様、シャムにいるオランダ人にも何卒同じように交わっていただくことを熱望いたします。

われわれもまた、日本国民と閣下が、当地へ派遣される日本人を優遇することを誓います。閣下の船長と乗組員がそれを証言することでしょう。

彼等が積んできた米は全部買い上げ、輸出の税金は全部免除いたしました。

我等の友情と好意を表すため、閣下のもとに万力（まんりき）を一台贈ります。

一六二九年（寛永六年）五月二十八日」

万力というのは、アユタヤでは貴重品で、機械工場で、やすりやたがねのような工具を使って、金物の仕上げをする時、その仕上げをしようとする金物を、取りつける器具のことを言うのである。

この寛永六年に長政は、自分の船に国王の使節三人と、家来の二五右衛門を長政の使者兼通訳として乗船させ、長崎へ派遣して、江戸城で三代将軍家光と会見させている。

ルオング・サコン・テーとクン・サワットと、クン・ヨーターマツのシャムの三使は、九月十九日江戸城へ登城して家光と会見し、ソンタム王の死と新王チュート・ター（ソンタム王の王子）の即位を報告している。

この頃が長政の得意の絶頂の時期であった。

元和七年、長政の名がはじめて日本に知られ、正式に幕府の記録に現れているから、わずか九年の

後のことで、長政はその時、オークヤー・セーナー・ピモック（大将、軍司令官）の官爵名を与えられ、位人臣をきわめていた。

長政からも老中の酒井忠世や土井利勝に手紙を送り、敬意を表している。全部漢文なので意訳する。

「ご書面謹んでいただきました。去年、わずかばかりのものを将軍に献上致しましたところ、将軍にご披露下され、冥加に存じます。あまつさえあなたからは、皮袴五領を頂戴致し、誠に有難うございました。シャムのソンタム王は去年の冬、永眠なさいました。新王が即位されましたので、ここにご報告いたします。云々」

これによると長政は、寛永五年にも将軍家光に献上物をし、その返礼として酒井忠世から、皮袴五領をもらっていることがわかる。

酒井からも長政に返事を書いている。

「ご書面拝見致しました、先王がおなくなりになった由、悲しみにたえません。謹んで哀悼の意を表します。また数々の贈物、誠にありがとうございました。

将軍にも大御所（秀忠）にも報告し、ご披露いたしました。またあなたには感謝のしるしとして、晒布二十四をお贈り申し上げます。云々」

この時のシャム使から将軍への献上物は、上奇楠香（沈香）、次奇楠香、上氷片（竜脳）、次氷片、以上各一斤、西洋緞四反、西洋花緞五条、花毛氈二条、象牙五担であった。

また大御所秀忠にも同じようなものを贈っている。

将軍からは返礼として、金屏風三双、鎧三領、太刀二振、馬三匹。秀忠からは駿馬二頭（鞍馬具一式）を贈った。

この船は翌年一月、長崎を出航して帰国の途についた。

寛永六年には長政のアユタヤにおける勢力は巨大なものとなり、日本や南北各地との貿易も盛大だったので、アユタヤ駐在のオランダ商館は、長政との競争に負けて、事務員一人を残しただけで、館員を引き揚げさせたほどであった。

長政が八、九年の間に最高の位まで昇進したことは、同年輩のソンタム王の長政への信頼と、長政自身のソンタム王への献身的な忠誠心にもよるが、貿易家としての長政が、シャムと日本との貿易で、多大な利益をシャム王室に献じ、また日本からの御朱印船が、シャム側の物資を大量に買いつけて（鹿皮、鮫皮、硝石等）、アユタヤ王室に貢献したことも大いに力になった。

日本側や長政の船が、オランダ、スペイン、ポルトガルより十倍の物資をシャムから買っていたのである。

しかし、そのソンタム王が三十八歳の若さで死んだことが、長政の運命を大きくかえてゆくのである。

ソンタム王の死

山田長政を最も信頼し愛したのは、ソンタム王であった。このソンタム王の人物像を、オランダ、

ポルトガルではこう記録に残している。

「王は良識に富み、愛情深く、外国人に対しても自由な政策をもって扱い、貿易を許し、一生をシャムの国法である仏教に捧げた。前の王よりも多くの寺院を建立した。アユタヤを輝く王都にもした」

事実、アユタヤのラマ公園北側にある「仏陀聖骨寺院」のパコダの尖頭、五十メートルの頂上に黄金の尖頭を飾りつけた。

この寺について一言すると、これはアユタヤ初期に建てられたもので、第二代の王、ボロマラジャー一世がスコタイの中心寺院、マハタートと同じように、仏陀の聖骨をここに埋葬した。

王は生涯をスコタイとの合併に費やし、自らもスコタイのリイタイ王のごとく信仰厚く、僧籍に身をおきこの寺院で修道した。この寺院は十四世紀時代、アユタヤにおける重要な修道院の一つであった。

ソンタム王の時、高さ五十メートルのパコダの頂上に黄金の尖頭が飾りつけられたので、〝輝く黄金の仏寺〟と呼ばれていた。ソンタム王の次の王の時に、大落雷で黄金の尖頭は破壊された。

一七六七年ビルマ軍の砲火で仏塔は灰燼に帰した。一九五六年アユタヤ修復のとき、金の仏像、宝石等が発掘された。

これは現在は、アユタヤの博物館で見ることができる。美しい仏像も博物館にある。

前にも述べたように、長政はソンタム王に王位継承は世襲にすべきである、と説いた。

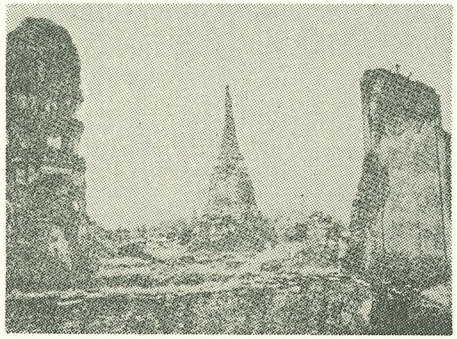
そのソンタム王が急に気むずかしくなり、家臣をつまらぬことで投獄するようになった。これは生命の終る前兆ではないか、と心ある家臣たちは心配した。

一六三六年（寛永十三年）から一六四二年（寛永十九年）まで、オランダ東印度会社のアユタヤ商館長をつとめたエレミヤスファン・フリートが、蘭領印度総督、アントニオ・ファン・ジーメンに報告した『十七世紀に於けるシャム革命史話』のなかに、〝公正にして偉大なる白象の王〟ソンタムの病死と、巧みに王位を簒奪（さんだつ）したプラサトーン王のことや、オーヤー・セナーピムックの活躍のことが、かなり詳しく書かれている。

長政のシャムにおける最高の官爵名を、日本流に言えば、大将、軍司令官と言っているが、正確に言えば、オーヤは大将相当官、セーナーは長、ピムックは前衛であるから、ソンタム王の大将、前衛軍団司令長官、山田長政ということになる。

台北帝国大学学長の村上直次郎博士と教授の岩生成一氏は、昭和になってから、オランダのハーグ文書館に行かれ、ファン・フリートの『革命史話』を発見されて、岩生氏は昭和十年に、村上氏は昭和十七年に、その訳本を発表された。また岩生氏はのちに『南洋日本人町研究』も出版された。

アユタヤのオランダ商館は、寛永六年に、長政との貿易の競争に負けて、事務員一人をおいて引き揚げてしまったくらいであるから、長政には好意を持っていなかったであろうから、その点、割引きをしなくてはならないが、それでも長政が大活躍をしている。



マハタートの仏塔

寛永五年十月、ソンタム王は突然昏倒した。それ以前から王位は、長政の進言を容れて世襲にし、十五歳の長子に譲ろうと決意していた。しかし一般では、今までのシャム王室の定めどおり、王弟が継承するものと思っている。そこでソンタム王は宮内長官のオーヤ・シー・ウオンに命じて、大官たちの召集を命じた。そして王の考えは秘して、王位継承は誰にするかを問い、それぞれに答えさせた。

「若い王子はすでに王位を継ぐに堪える年に達しているので、王子に継がせるべきである」

「国法に従って王弟に継がせるべきだ」

「どちらでもよい。ただ王の御意志にまかせ、その方に忠誠をつくすだけである」

以上のようにだいたいにおいて意見は三つに分かれたが、なかには答えない者もいた。

宮内長官のオーヤ・シー・ウオラ・ウオンは千六百年生まれで、彼の父は王宮の侍従であり、彼の叔母はソンタム王の母后であったので、年少の頃から宮廷に仕えて、十六、七歳で小姓頭になった。

しかし品性は粗暴で残虐。たびたび王の怒りにふれ、牢獄へつながれたこともある。ある時はソンタム王の弟のシイシン親王やトング親王の殺害を企て、それが発覚して数年間入牢し、一六二二年(元和八年)に赦免され、その後カンボジアとの戦いに出陣して、粗暴なくらいであるから戦功もたてた。

ところが今度はシイシン親王の妃の一人と密通したことがわかり、またまた投獄された。三年の後には許され、その後は言葉巧みにソンタム王にとり入って、王の晩年には宮内長官になった。

彼はソンタム王が病気がちになった頃から、王位につこうと、ひそかに野心を磨いていた。それには最大の敵は王弟であった。この人物は性格もよく、人々に愛されていた。

長政は王に進言したとおり、十五歳の王子に継がせることに賛成しており、王もまたその意志であることを見抜いたウオラ・ウオンは、にんまりと北叟笑んだ。

ソンタム王の病気中は、彼は誰をも王に会わせなかった。王の言葉はすべて彼の口を通して、他の大官連中に伝えられた。王位継承も改めて王子にすると伝えられた。

長政にすぐ参内するようにと使者が来た。病床の王は長政の手をとって、王子のことを繰り返し、繰り返し頼んだ。

長政は感激した。さらに王とシー・ウオラ・ウオンは長政に、武装した日本兵を王宮の内外に配置して、万一に備えるように依頼した。長政はすぐにそのとおり実行した。

シー・ウオラ・ウオンはそれでもなお安心できず、四千人の武装した兵をひそかに宮中へ引き入れ、一万人の武装兵を市外に配置した。これは王が回復したのち、春季行軍を行うためであると宣伝させた。

武勇をもって鳴る日本人部隊を近衛兵として宮中に入れ、さらにその頭領である長政を味方にしたと信じた彼は、王の死んだあとに打つべき手をあれこれと考え、それを実行に移すべく万全の手段を講じていた。

ソンタム王はついに死んだ。これはあきらかにシー・ウオラ・ウオンによる毒殺であった。寛永五年(一六二八)十二月十二日の午後のことであった。

ソンタム王は数人の夫人との間に、男子九人、女子の子供があったがいずれも年少の者が多かった。王は聡明であり温厚寛大であった。宗教、諸寺の管理に意を用い、多くの寺院を建てた。また人

民はもとより、外国人のためにも大いに意をそそいだ。

オーヤ・シー・ウオラ・ウオンは直ちに大官一同を宮中に召集した。身も心もないほど嘆き悲しんで王の死を告げ、さらに遺言として十五歳の長子が王位につくと宣言し、自分は同じく遺言によって摂政になることを告げた。

直ちに十五歳の王子を王座につかせ、王冠をかぶせて大官連中を接見させた。日本人の近衛兵や武装した兵が宮中の内外にいたので、誰一人反対する者はなかった。しかし、ここでまごまごしているような、シー・ウオラ・ウオンではなかった。王位継承に関し、ソンタム王に意見を求められた大官のうち、王弟に継がすべしと発言した者、態度を曖昧にした者等を、新王の命令ということにして疾風の勢いで捕えた。国の正当なる継嗣に対して謀叛を企てたという罪名である。

そのなかで一番の大官は、オーヤ・カラホム（陸軍大臣）であった。彼は象軍の大将で、象二百頭、私有の奴隷二千人、その他良馬多数を持っていた。

二番目は騎兵の大将オプラ・タイナムであった。彼は五年間も国璽（国印）の保管者であった。

三番目はオロアン・タム・トライロクで、タナツサリの知事をつとめたこともあった。

この三人は宮門の一つであるタカムで斬られ、首、手、足を切断され、王宮の諸門に架けられた。財産はすべて没収されて王や、シー・ウオラ・ウオンの寵臣たちに与えられた。

その他に死刑の宣告を受けてタカム宮門に連れて行かれて、まさに処刑されたようとしたオプラ・シルシー・アクラットと、オプラ・チューラの二人は、長政が駆けつけ、両人を抱きかかえて斬首をやめさせ、シー・ウオラ・ウオンに赦免を乞うて命を助けた。

長政の機嫌をそこねてはと、彼もその申し出を聞き入れたのである。摂政となった彼は、若い王に言葉巧みに説いた。

「オーヤ・カラホム（陸軍大臣）という職は、重要で名誉ある職であるが、それにも増して兵馬の権を握るので、これに任ずべき人物の性質や経歴や行跡には、特に注意を要します。王に忠誠な人物でなければ大変に危険です。

ところで私がこの職につくと、名声や収入は減少しますが、王を愛し国家を安全にしようと思っておりますので、受けてもよろしゅうございます」

年少の王はすぐさま彼をカラホムに任じ、死刑にされた前カラホムの財産と収入を授け、その弟を、オーヤ・シー・ウオラ・ウオンに任命した。兵馬の権を握り、弟を宮内大臣にした彼は、次に狙ったのが、ソンタム王の弟、シー・シン親王である。シー・シン親王は、兄のソンタム王にもおとらぬ信望のある親王であった。シャムの国法では当然王位を継ぐべき人物であった。

シー・シン親王の挙兵

この時のオーヤ・カラホムは二十九歳の若さであった。いったい、若いこの男のどこに権謀術数の権化、飽くことをしらない、殺戮者としての魔性が秘められているのであろうか。

この男と同時代の日本の徳川家康は、その座右の書として、『東鑑』を熟読玩味していた。それは北条義時の、〝権謀、血の粛清〟のすさまじさを踏襲するためであった。北条義時という男は、伊豆

韮山の小豪族、北条時政の二男として生まれ、姉政子が源頼朝の正妻となると、鎌倉幕府の一人として、自分自身は決して表面に出ず、源氏の血族を全部根絶やしにし、あまつさえ、鎌倉の御家人を全員血の粛清で抹殺し、ついに北条の天下にした男である。いささかの憐憫の情、惻隠の情も持ち合わさず、鉄の意志をもって断行した男である。その経緯が書かれている『東鑑』なので、家康が熟読した所以である。

シャムのオーヤ・カラホムは、アユタヤの王族や重臣を、義時にもおとらぬ残忍さで、血の殺戮をつづけてゆく。ここにも歴史の相似点を見出す。

さてオーヤ・カラホムは、まだソンタム王が存命中、僧として修行中のシー・シン親王を偽って宮中に招き、王にも会わせず幽閉して王が死んだら殺そうと思っていた。このカラホムの企てを知った彼の祖母は、必死に止めた。

「神々及び僧侶を冒瀆すれば、己自身も天の恵みを受けず、滅ぼすことになるであろう」

そこでしぶしぶカラホムは親王を寺へ帰した。しかし心配で仕方ない。信望のある親王が一度起てば、大官や実力者の間にも味方になる者が多数いるであろう。そうならないうちに、なんとか殺してしまいたいと考えていた。

しかしシャムの国法では僧衣をまとっているかぎり、俗界の裁判官が裁くことはできない。なんとか僧衣をぬがせて宮中へ招き入れなければならない。

ここでファン・フリートは、『革命秘話』のなかで、カラホムに頼まれた長政が、親王を甘言で欺いて宮中へ招き入れ、カラホムに渡したと書いてあるがそれは違う。

オランダ人であるフリートには、日本人的感情や考えがわからなかったのであろう。長政はいまわの際に、ソンタム王から遺孤（遺子、新王のこと）のことを頼まれている。王位は世襲にと進言した手前、長政にも責任がある。彼は毎日宮中に出仕して新しい王に仕えていた。

日本の幕府にもソンタム王の死と、新王の即位を知らせなければならない。それが寛永六年のシャム王ならびに長政の使者の、日本訪問となったことは前述した。

長政の存在は無気味なものにカラホムには思えて仕方がない。理解に苦しむほど、新王に忠誠をつくすのである。カラホムは長政に懇願した。

「親王が僧衣をぬいで新王の前へ来れば、王族として宮中へ毎日参内することが許されます。新王も伯父親王にしきりに逢いたがってもいますし、武人として新王を補佐してもらいたいと願っています。あなたから親王にお願いして、是非実現させていただきたい」

長政はその旨を親王に伝えた。兄のソンタム王の特に信任の篤かった長政の言である。親王も長政の忠誠心は知っていた。親王は僧衣を脱いで、親王の盛装で宮中へ参内した。宮門を入るやいなや、有無を言わさず捕えられてしまった。そして王の前へ引きたてられた。

王もカラホムもこれを顧問会議にかけた。判決は最初から決まっていた。死刑の判決が下った。新王はさすがに直接手を下して血を流すことを欲せず、ピプリへ送り、同地の地中に掘った洞窟に親王を入れ、食糧を毎日へらして、だんだん餓死させる方策をとった。

国王の命令を受けた者が毎日三回、この穴をのぞき、生命の絶えるのを見届けることになっていた。

長政は顧問会議にも出席せず、日本へ派遣する船の準備で多忙をきわめていたし、日本人町存続のためにも、王室のお家騒動や内紛には巻き込まれぬ方針をとり、よそながら国王に対する忠勤を心がけていた。

ここに親王の一族でオロアン・マンコンと呼ぶ怪傑の司令官がいた。オロアン兄弟はひそかにアユタヤを脱してピプリにのがれ、同地の僧侶を集めて親王の救助を依頼した。僧侶たちは、はじめは王とカラホムと親王を護送してきた勢力を恐れ、公然と手を貸すことをはばかったが、親王が仏門にいたことを思い、つねに寺院を保護していたことと、正当な王位継承者であったことを思い合わせて、親王に同情し、オロアン・マンコン兄弟を援助することにした。そこで夜、他の穴を地中に掘り、親王を救出する計画をたてた。オロアンはある夜、自分も穴掘りを手伝っていると、親王が、「最後に水を飲みたいものだ」とつぶやいている声が聞こえた。

オロアンは驚喜して帰り、一人の死体を穴に運び入れ、それに親王の衣服を着せて、ついに親王を救い出した。

親王が餓死したとの報告を聞いた王もカラホムも、やれやれと胸をなでおろした。

長政は病気と称して宮中へ出仕しなくなった。親王は僧侶たちの手厚い看護を受けたので、まもなく健康は回復した。僧侶たちは喜んで僧衣を脱いで武装する者も出てきた。オロアン・マンコンは力もあるし、不思議な魔力を持っていたし、当時のシャムの三勇士の一人に数えられ、尊敬されていた。

アユタヤでは、カラホムと新王に対し、ようやく不平を持つ分子もぼつぼつ出てきた。オロアンが各地へ行って兵を募ると、たちまち二万人ばかり集まった。そこで親王は推されてシャム王になり、

オロアンを総司令官に任命した。

新王やカラホムは愕いた。早速二万の大軍をオーヤ・カパインを大将としてピプリに派遣した。日本人部隊も七百人ばかり従ったが、長政は参加しない。

両軍はたびたび衝突したが、多数の死者を出すだけで、なかなか勝負がつかない。オーヤ・カパインは援軍を出してくれ、と若い王に要請してくる。

「オーヤ・セナー・ピムック（長政）以外には、この乱を平げる者はおりませぬ」

カラホムは王に進言する。またまた長政の出番である。

「俺が先王に物語った源平の『保元の乱』のようなものではないか」

王の命令を受けた長政は、最初は逡巡したが、ようやく重い腰を上げて新王のために戦った。このことに関してもファン・フリートは、長政が計略を用いてオロアンをだまして捕虜にした、と書いているが堂々たる野戦の決戦で勝ったのである。

親王とオロアンはリゴールへ逃げようとした。リゴールは六昆のことで、ここはのちに長政にとって、忘れることのできない土地になる。親王は途中で捕えられ、アユタヤへ曳かれてきた。新王の顧問会議は、再び親王に死刑の判決を下した。処刑される前に親王は特に願い出て、王の前に進んだ。そこで親王は甥である王に言った。

「私は王の叔父であり、王国の正しい継嗣であるが、神々によって与えられた悲運により、死の時を待つ敗残の親王として陛下の前へ出たのである。しかし私は生命を軽んぜず、また死を怖れない。ただ一つ望むところは、私の苦難が陛下の戒めとならんことである。良き友が示すことができる最善の

好意は、重要な時にのぞんで、良い進言をすることである。

陛下がもし、真の国王とならんとせば、思慮ない乱れた生活をやめ、正義を守り、また国王の心の正しさを示すには、神々を祀り祖先の家を尊び、友を喜ばせ、彼等の陛下に対する愛を増させねばならない。そうすれば善人は心を傾けて陛下に仕え、悪人はおそれをなして自ら敗北するであろう。

もし私の肉体の死によって、陛下の地位が安全で固くなり、国がおさまるなら喜んで死のう。陛下、もし来たらんとする不幸を免れんと欲せば、オーヤ・カラホムを信任することなかれ。彼は年少の頃から悪事を働き、陛下の父なる王は、そのためしばしば彼を罰したのである。彼はひそかに謀って陛下の頭より王冠を奪い、私の兄弟である陛下の父の家を滅ぼして、自ら王国を治めるであろう」

誠心を披瀝して、真に王のため甥のために最後の忠告をしたが、王の心を動かすことはできず、王の判決に従って刑の執行を命じた。

親王は王宮の対面にあるワット・プラミンコ・プラーヤ寺へ曳かれ、シャムの王族に対する死刑の方法で殺された。すなわち、赤い布の上に坐らせられて、白檀の棒で胸を打たれて死んだ。遺体は布と白檀の棒とともに穴の中へ投げ込まれて、腐るにまかせるのである。

親王は二十六歳で、兄ソンタム王にまさるとも劣らぬ立派な人物であったという。シー・シン親王の司令官、オロアン・マンコンは、諸所方々を逃げていた。これは決して命が惜しいためではなかった。

なんとかオーヤ・カラホムを襲って殺そうと、ついにアユタヤへ潜入し彼の邸へ侵入した。ところがその夜、カラホムは宮中へ泊っていたので難をまぬかれた。

オロアンは妻を伴って国境近くへ逃げていたが、妻が捕えられたので、自首して出てアユタヤへ連れて行くように申し出た。

彼の魔力を知っている役人たちは、体を七ヵ所縛った。オロアンはあざ笑って、その縄を気合いもろとも切ってしまった。

「命が惜しいのではない。死のうと思っているから、アユタヤへ連れてゆけと言っているのだ。そうでなければお前たちなど、何人でも殺すぞ。俺を縛らずにアユタヤまで連れてゆけ」

若い王はオロアンの魔力に怖れ敬っているので、これを助け王に仕えさせようと、カラホムに旨をふくめて使者を出させた。

カラホムは自分の意志から出たようにして、

「若き王と私に忠誠を誓えば、私が必ずあなたを助けよう」

と告げた。

「わが王であるソンタム王は死し、正当なる継嗣である親王は、若き王と汝に殺された。我も死を望む。絶対に汝等には仕えぬ。早く殺せ」

と、オロアンは笑いながら言う。カラホムは王にそのまま復命した。そこで王も剣をもってオロアンを殺すように命じた。刑場へ引かれた彼は、

「国家は今や危険に瀕している。もし我の力を知らず、疑う者にはわが力を示そう」

と、刑吏に言う。

刑吏が彼を剣で殺そうと横にさせて斬りつけたが、鉄を打ったような音がしただけであった。

オロアンは起きて縄を絶ち切り、刑吏の喉を締めて殺し、水を求めて呪文を唱えてそれを飲み、己の体にふりかけ、右の手の食指をこの水に浸し、この指で左側の短い肋骨の上を突いて、内臓を流出させて殺せと刑吏に言い、もし失敗したら前の刑吏のようにお前も殺すぞと宣言して横になった。

刑吏は一撃を与えたが、死にいたらしめることができない。オロアンは剣を求め、これでわが心臓を突け、と命じようやく絶命した。

カラホムの権謀

親王の死を聞くと長政は病気と称して、日本人町へ閉じこもってしまった。

新王は生まれながらに帝王としての素質に欠けていた。怠惰で逸楽を好み、心は驕り、民に対しては残忍暴虐。長政が引きこもっているのを幸いとばかり、オーヤ・カラホムは諫めようとはせず、逆に佞臣に命じて遊興に耽るように仕向けさせた。

会う人ごとに涙を浮かべ、「先王の信任に報いようと日夜心を砕いているが、その重きに堪えかねる」と訴え、大官にはなにかと恩恵を施して人心の収攬につとめた。心からカラホムを信じる者も日増しに増加する。

祭日や休日にはカラホムの家を訪れる者も多く、その人たちには多くの貢物を献上した。

日が経つにつれてカラホムは、真の実力者の王のように振舞うようになった。

こんな時、カラホムの末弟が死んだ。カラホムは弟の死体を焼くに際して、先に死んだ父の骨を再

び焼いた。シャムの習慣では、骨を焼くことは国王及び王子のほかは、何人も受けることはできない栄誉とされていた。

カラホムは敢えてこれを行った。王及び大官連中の動向を験すつもりであった。大官連中や多数の僧侶は、カラホムの邸に集まり、その儀式は三日間つづいて、まことに盛大であった。

王の母は女らしい智恵をはたらかせて、この際、王が徹底的にカラホムを憎むように仕向けようと、ひそかにカラホムを妬む者とはかって、このことを王にざん言した。

王は母の勧めに従って、三日目に正庁に出て、王座につき、家来たちや大臣たちは何処にいるかと詰問した。ここにオーヤ・バルケランという人物がいた。これはカラホムの子分である。スパイの役目を果たしていたので、毎日宮中に参内して、王の行動をカラホムに報告していた。

バルケランは王に、

「オーヤ・カラホムは兄弟と父の骨を焼くのが忙しく、大官連中はその葬儀のため参内いたしません」

と、わざと答えた。王は激怒した。

「シャムには王がいる。我は正当に冠をいただいた王で、諸人は我を尊敬し、我に服従すると思っていたが、どうも違うようだ。カラホムが実際の王のように振舞っている。必ずその報いを与えるであろうに」

と、親衛兵及び侍臣たちを武装させた。

バルケランは早速王宮を出て、その様子をカラホムに伝える。カラホムは大官連中を前にして、は

らはらと落涙し、沈痛な顔で語り出した。

「閣下方よ、陛下の怒りがこのカラホム一人だけに向けられて、その結果私一人だけが命を落としてすむならば、私は喜んで死のう。だが、陛下の日頃の仕法、性格などを考えれば、私一人を殺すだけでなく、私の家へ集まった諸君も必ず殺すであろう。私たちが全員死んだあとのことを考えてみよう。シャム王国や人民はかつてない危険にさらされるであろう。外国が攻めて来るか、内乱が起きるか、あるいはこの二つが同時に起きるかもしれない」

涙を流し、諄々と説き来り説き去るさまは、まさしく千両役者である。

頃合いはよしとみてとると、

「閣下方よ、私たちはこの栄光と繁栄に包まれた祖国シャム王国を守るため、今こそ全員団結して決起しようではないか」

カラホムの見事なアジ演説に大官一同は、その途中からすでに乗せられ、上気して涙を流していた者もあり、一も二もなく賛成して、その場でお互いの血をすすり合い、盟約を結び、今後はいかなる場合でも共同一致の行動をとることを申し合わせた。

そこでカラホムは、国民や大官や僧侶たちに、なおも王の無道さを証明するために、バルケランを王のもとへ再び差し向け、「カラホムや他の大官は決して王に叛かないで、忠誠をつくすと誓いますので、助命をお願いいたします」と言上させた。

血気にはやる王は、

「バルケランよ、お前までがカラホムにだまされてしまったのか、汝も早くカラホムのもとへ行き、

しかと伝えよ、早々にカラホムは宮中へ参るようにと。必ず王はカラホムにたいして、断乎たる処置をとるぞ」

と、必要以上に怒りをあらわにした。

王の侍臣たちも、それほどまで言わなくてもと、互いに顔を見合わせた。バルケランは、いかにも倉皇としたふりを見せ、カラホムのもとへ帰り、王の言葉を十倍もの激しさで伝えた。

大官連中は色めきたち、座して死を待つよりは、各自家へ帰り家来、象、馬等に武装させ、ペタウ・チャーイ（鹿の門）に参集して、全力で王宮を攻撃して、王を捕虜にしようと決議した。

念の入ったことに、バルケランはカラホムの意を受けて、またまた宮中へ引きかえし、さらにカラホムや大官連中の許しを乞うた。これは王や親衛兵に油断させるためであった。

この間にカラホムと弟のシー・ウオラ・ウオンは、とてつもない謀略工作を行った。

というのは、王の司令官、オーヤ・カパインに対してである。カパインは莫大な財産の所有者で、象二百頭、農奴二千人、馬数十頭を持っており、王の親兵を指揮してカラホムに対抗すれば、たいへんなことになる。もし長政の日本人部隊がカパインと合流して王を守れば、カラホム軍も破れるかもしれない。カラホムとしては、なんとしてでもカパインを味方にしなければならない。それにカパインは王の敬愛も受けているし、信用もされている。カラホムの家の葬儀にも参列していない。カラホムはカパインに深々と叩頭して、また涙を流して哀願した。

「私一人の命を差し出してすむというのなら、喜んで投げ出しましょう。しかし王は私だけではなく大官全部を殺す、と言っております。そこで一同団結してやむなく王に叛くことになったのです。

われわれ兄弟は唯今から閣下を父と崇めます。父よ、われらを父の子として、思慮なき国王より死の宣告を受けたわれら一同を庇護し、われらの生命を護り、われらを暴君の手からお救い下さい。われら兄弟はもとより父の子として、またわれらの同志の大官一同も、閣下を国王として崇め、忠実な臣下として服従を誓います。どうか今の愚かな王を倒して、シャム国王の王に閣下がなられて、王国を存続させて下さいますよう」

カパインは六十歳を過ぎていた。温厚な人物である。それに若い王の、王者としての資質に欠けていることも知っている。聞いているうちに、そんな気にされてしまった。

ひれ伏している兄弟を起こし、血をすすり合って、親子の誓いをして、自らもカパインは武装して、近衛兵を率いて鹿の門に参集した。

バルケランが王の前でお芝居じみた嘆願をしている間に、カラホム一味は戦備をととのえ、鹿の門から宮中へ攻めてきた。

バルケランは、「私が様子を見て来ます」とカラホムが待っている門へ来て、城門を内側から開いた。

宮中の王の親兵は命がけでよく戦った。

王は王座から他の部屋へ隠れ、天明とともに単身で王宮を抜け出し、象に乗って河を越え、アユタヤの上の方にある有名な聖地にある、ノンプリー・メカムヨング寺院に逃げ込んで数日間を僧侶と過ごした。

この間、長政はどうしていたのであろうか。

実際問題として、長政が率いる日本人部隊は千人内外の兵力と思われる。

伯仲の勢力か、どちらかがやや劣勢の方へ味方したのなら、大きな力を発揮するのであるが、大勢がおもむく兵力に対抗しても、勝算はおぼつかない。

日本人町の頭領として、異国にある日本人の生命財産を守る責任のある長政としては、軽々しく動くわけにはいかない。ファン・フリートはこの場面での描写では、長政の名は出さずに、日本兵がカラホムの軍隊と一緒になって、王宮内で斬りまくったとだけ書いてある。

殺戮者カラホム

天明になってからカラホムは王宮を占領した。王室の財産をいったんは全部自分のものとし、金銀の飾りのついた剣や置物、その他を側近の者や奴隷に分かち与え、奴隷や身分の卑しい者にも官職を与えたので、人々はすっかりカラホムに結びついてしまった。

好人物のオーヤ・カパインは、カラホムとの約束を確信していた。王が逃走し途中戦死したなどの噂を聞いたので、自分で国王の座につき、王冠を頭に戴き、王のクッションを腕の下へ敷き、王剣と金の扇を持ってカラホムに向かって言う。

「子供よ、幸福は今我とともにあり。来たって汝を子とした汝の選んだ父を祝福して、国王に対する敬礼を行い、また宮中にいるわれらの同志に、その義務を尽し、余を国王と認め、国を治めしむることを命ぜよ。しからば余は汝を親王とし、シャム国の継嗣とせん」

全くいい気なものである。カラホムとしては、まだ余燼がくすぶっている最中に、よもや本気でそんな行動にでるとは思ってもいなかった。

大いに弱ったが、そんな素ぶりはつゆ出さず、

「父君よ、その座に着いて王衣を着けるのは、まだ少し早うございます。王の生死はまだわかっておりません。それにソンタム王にはもう一人十歳になる王子がおられます。とりあえずこの王子を王にしなければなりません。さもなくば、我々は謀叛人とされてしまいます」

と、まずなだめた。

「わが子よ、王位は尊い。年少の童子はこれに即くべきではない。政治は重要であるから空位にしておくべきではない。もし汝が選んだ父に王冠を戴かせることを欲しないのなら、この父の手より王位を受けよ」

と、どこまでもお人よしのカパインは言う。

カラホムはさぞ愕いたようなふりをして、

「人から非難を受けないため、早くその座を降りて、協力して王を探し今後のことにつくしましょう」

と説いた。やむなくカパインも賛成した。

一方、逃亡した王は、ノンプリー・メカムヨーグ寺院で発見され、捕えられて宮中へ曳かれてきた。カラホムの提案で、王宮内で顧問会議の審議会が開かれることになった。

カラホムは陪審官として出席はしているが、一言も発しない。長政は出席していない。病気という

理由である。

議員はカラホムの腹心の大官ばかりである。

「陛下は王宮を捨てて逃亡したので、すでに統治権を失っているので、もはや王ではない」

と判決が下り、死刑を宣告された。

カラホムはここでも涙を浮かべて、王の助命を一同にはかった。これは猿芝居の一種である。勿論、否決されて死刑は確定した。

年少の王ではあるが、さすがに血は争われない。粗暴の点はあったが、王者の風格は人生の最後になって顕現した。

カラホムの陰謀であることは、とうに見抜いていた。判決を聞いても、いささかも悲しまず、毅然として言った。

「叛逆した者たちが、この判決以外のものを下すはずがない」

バルケランには、笑みさえ浮かべて言う。

「よくも騙しとおしたものだ」

さらにカラホムには、その眼を見据えながら、冷徹な表情で声を励まして言った。

「カラホムよ、汝は不幸な時にこの世に生まれた。汝はわが父である先王を毒殺し、わが叔父である親王をも殺した。さらにまた我が王統の血を流そうとしている。やがて神々が汝の頭に報いを下すであろう。叔父親王よ、あなたの忠言に耳をかさなかった不明を恥じるのみである」

王は最後に母に逢わせろと言った。

カラホムは王の母を呼び出して言う。

「王の母がこのような不肖な子を生み、これを滅亡に導いたため、不幸と流血が重なって起き、このカラホムも恥辱を受けた。

もし大后が王に対して子としての愛を捨て、死刑の宣告を是認するならば、大后の生命を助け、王族として扶育するであろう」

しかし大后は白蠟の塑像のように、屹然として立ち、神々しいばかりの面差しで、厳かに言った。

「わが君なる王は、死するに当って汝の誤った進言によって、私の子を最高ではあるが、不幸な王位に即かせたが、汝が残忍で王位を望んでいるゆえ、この結果にいたったのである。

われは汝の血でぬられた手によって養われるより、王とともに死ねることを望む。死を恐れるがために、自ら生んで育てたわが子にそむき、子への愛を捨てることは望まぬ。

われは生まれて多くの年は経ていないが、不幸の野にさまよい、生命の危険に遭ったので、安全な休息に導く死を少しも恐れない。わが子はわれよりはじまったので、われは子とともに終ろう」

この堂々とした言葉は、さすがに人々の肺腑を抉った。どんな邪魔者が飛び出すかわからない。カラホムは二人の処刑を急いだ。

その日のうちに廃寺ワット・プラミンコ・プラーヤへ曳かれ、親王の処刑と全く同じの、王族に対する処刑の方法、すなわち赤い布の上に坐らされて、白檀の棒で胸を打たれ、死体は布と棒とともに穴に投ぜられて、腐敗するにまかせられた。

若いこの王は十五歳で王座に即き、わずか八か月で王位を空しくするとともに、命までも失ってし

まったのである。

王が捕えられたと聞いた長政は、部下や日本人の人々に檄を発ばして、戦備をととのえさせた。日本人部隊が決死の勇を振るえば、シャム軍五千ぐらいは蹴散らす自信はあった。

王と大后の処刑を終ったカラホムは、腹心のバルケランを連れて、夜中に小舟で長政の邸へ訪ねてきた。王宮と日本人町とは六キロばかりの距離である。

カラホムにとっては、長政の存在がなんとも無気味でならない。病気と称して参内せず、沈黙を守っていることが、なんともカラホムには堪えられない。ああするのではあるまいか、こうするのではあるまいか、と揣摩憶測する。

長政の信義と武勇、日本人部隊の勇猛心は誰よりもカラホムは身をもって知っている。

疑心はさらに暗鬼を呼ぶ。カラホムは長政の前でまた涙を流して、訴えた。哀訴した。

「私はどこまでも王と大后の命を助けようとしたのですが、シャム国の最高機関である顧問会議の審議会で、死刑と決定したので、いかんともなす術がございませんでした。どうぞ私の苦しい胸のうちをお察し下さいまして、ご諒承をいただきたいのです」

長政は無言である。日本人町の頭領として、時の総理大臣であり陸軍大臣であり、摂政でもあるからカラホムに対して軽々しく死刑に対する意見は述べられない。

だがソンタム王の遺託は、義を重んずる日本人として、なんとしてでも果たさなければならないし、せめて残された王子は護らなければならない。

カラホムはなおもつづける。

「国は一日も王を欠くことはできません。残された王子は幼少で、国政をみることはできません。そこでご相談ですが、いかがでございましょう。大官の中で誰か一人を王として、王子が成人に達したら、位を譲るということにしたらどうでしょう」

カラホムの腹の中は長政にもわかっている。今度は長政はきっぱりと言った。

「それは反対です。大官の中から一人を選出するとすれば、まず王の縁族であり摂政であるカラホム、あなたを挙げなければなりません。そうすればあなたは、王位を望んで親王や王や大后を弑したと言われるでしょう。

他の大官を選べば、王子が成人に達しても、王位を譲らず、その地位を確保するために、王族をせん滅するでしょう」

カラホムは思わず眼を伏せる。長政はさらにたたみかける。

「国王がすでに二人までも弑されたことは、悲しみに堪えません。この上の流血は断じて避けなければなりません。あなたをはじめわれわれは、幼少の王子を奉戴して、忠節をつくすべきでしょう。私はソンタム王の御遺言を守り、大王の血統が存する限り、王冠が正統に継がれることに全力をつくします」

この言葉は、カラホムの腹にずしんとこたえた。ややあってカラホムは言った。

「それでは摂政は誰にすべきでしょう」

「それは勿論、カラホム、あなたです」

「それでは明日、顧問会議を開くことにしましょう。オーヤ・セーナ・ピムツク（長政）あなたも出

席して下さいましょうな」

「はい。出席いたしましょう」

カラホムは翌日、顧問会議を召集した。

結果は長政の主張どおり、わずか十歳の王子を国王とすることになり、学校へ行き勉学中の王子を迎えにゆき、直ちに戴冠式を挙げて、プラ・オン・アチット・スラワンの尊称を奉った。

顧問会議は再びカラホムを輔導役兼摂政に選んだが、カラホムは一応辞退して長政の顔を見た。長政は前夜の言質の手前、カラホムを推せんした。やむなく承知したような格好を見せたカラホムは、一同を見回して言った。

「お年の若い新王であるが、新王のご命令には、絶対に服従すると誓ってもらいたい」

これは重大な発言であった。

子供の新王の命令というのは、カラホムの意志から出ることなのである。だが一同は、ゆきがかり上、これに誓わざるを得なかった。

摂政になったカラホムは、子供の王を意のままにあやつったが、自分が王位に即くための、次期作戦を練ることを片時も怠らなかった。

次に地上から抹殺すべき人物は、オーヤ・カパインであり、最終目標の人物は、日本人オーヤ・セーナ・ピムツクである。

しからばまずカパイン殺しにとりかかろうと、腹心のオーヤ・パルケランと計った。カラホムは王に訴えた。

「オーヤ・カパインは、先王が宮中を逃亡し死にいたらしめた元凶です。なんとなれば、彼は処刑されたシーシン親王を討つべく軍司令官で出陣したが、親王軍と合流して先王に叛こうとしました。それをとどめたのが、先王の忠臣、日本人のセーナ・ピムツクでした。親王が処刑されたと聞くと、大いに悲しんで、必ず復讐すると公言しました。

それが証拠には、先王の司令官であるにもかかわらず、宮中に侵入してついに先王を死にいたらしめた。そればかりではありません。宮中へ入るとすぐ王座につき、王衣を着て戴冠して王と触れさせようとしました。それを必死にとめたのが、私とオーヤ・バルケランでした。ですからいつまた王に叛き、王の命を狙うかもわかりません。

王よ、速やかにカパインを捕えて死刑にするご命令を出して下さい」

傍からバルケランもカラホムの言を支持する。幼い王はその場で命令する。

すぐさまカパインは捕えられ、体を七か所縛られ牢に入れられた。邸は掠奪されて、奴隷はカラホムの側近者に配られた。

牢のなかでもカパインは悠然としていた。カラホムとその弟の宮内大臣は、自分とは親子の契りをしている。必ずカラホムが助けに来る、と牢番に言った。

何食わぬ顔で牢へ来たカラホムは、

「父君よ、今度はとんだ災難でございました。これは誰かのざん言から起こったことに違いありません。父君よ、心静かにお待ち下さい。必ずお助けします。決して外部へ連絡などとってはなりませんぞ。とくにオーヤ・セーナ・ピムツクには気をつけなければなりません。おわかりですね、父君」

カラホムはそれを言いに来たのである。他の大官や、長政が王に嘆願するのを怖れたのである。最も恐れたのは、長政の動きであった。

シー・シン親王を討つ時、カパインと長政は同志的盟約を結んでいると聞く。日本人の信義と、中国雲南から移動してきたシャム民族のなかで、カパインは温厚な東洋的な大人としての風格を持っている。この二人に団結されたら、いちばんこわい。

カラホムは昼に捕えたカパインを、日没二時間前に処刑することにした。

カパインは牢から出されて宮城のタカム門外の河岸に曳かれてて椰子の木に縛りつけられた。

「オーヤ・カラホムに急使をたてろ。まず汝等はこの縛を解け」

カパインは処刑役人の長に叫んだ。

「そのカラホム閣下のご命令です」

「なんと!?」

お人好しのカパインもようやく、カラホムの奸計に気がついた。

「おのれカラホム、汝はなんという呪うべき悪人か。汝が予を父と選んだのは、わが血を流し、わが家を辱しめ、わが財産を奪い、妻子を奴隷とすることであったのだ。

愚かにも予は汝の偽りの心を今知った。汝は先王を欺いて死に至らしめ、なお血を求めてやまず、王冠を求めるあまり今後も、王子たちを刈る鎌となり、ついには国を滅ぼすに至らしめるであろう」

言い終ると、言葉を静めて、

「オーヤ・セーナ・ピムツクに使いを出して、王の前へ出て無実を弁明させるか、または国の慣例に従

って正当な裁判を受けさせよ、と依頼してもらいたい」

と懇願したが、カラホムからその旨を厳に命令されていた処刑人たちは、いっさい耳を藉さず、椰子の木に縛ったまま、その左肋を切り、内臓を外へ流出させた。

そして首を籐（熱帯産のヤシ科のつる性植物）に刺し、体を竹の絞架（はりつけ柱）に懸けて曝しものにした。

これは国王に対して陰謀を企てたものにたいする、刑罰の方法であった。

ローマの古詩にいう。

同じく国王の名を求むる者の間には
信義も又協力も見出す能はず
最高なる権力を望む者は
己と同等なる者を容赦せず
何人も己に譲らんことを欲す。

洋の東西を問わず、権力の座を欲する者たちの、忌まわしい闘争といえばそれまでであるが、なんとも陰湿なありゆきであった。

その日長政は、自分の持船が長崎への出帆が近いので、その積荷をあれこれと指図していて、カパインの捕えられたことを知らなかった。邸へ帰ったあとで、その処刑を知った。

直ちに部下を連れて現場へ駆けつけ、遺骸を絞架から下ろして、丁重に葬ってその死を嘆いた。

長政はカラホムの謀殺とは知らなかった。カラホムは長政がカパインの死体を手厚く葬ったことを、内心、快く思わなかったが、なにも追及せず、いよいよ長政を除く決意を固めたのであった。

長政との和睦

長政はのちにカパインの死が、カラホムの謀略であったことを知り、それ以来宮中に出仕せず、邸の門を閉ざしていた。カラホムはなんとしてでも、ここは一時、長政と手を握らなければならぬ、と節を屈して、長政の邸を訪ねたが、長政は門を開かず、門前払いをくわせた。

これはカラホムにとって大変な恥辱であった。かりにもシャム王国の摂政である。長政がシャムにおける最高官の一人ではあるが、異国人である。その国の元首同様の人物が、宮中へ召喚せず、わざわざその邸を訪ねたのに、門前払いをくわされたのである。

しかしカラホムは怒りを顔を出さずに、次の手をうった。その時、アユタヤの港にバタビアから来たオランダ船が碇泊していた。それにはバタビアの税務長官セバルトが乗っていた。カラホムはバルケランをセバルトのところへ派遣して、「日本人から加勢を頼まれても、決して動かないように」と、申し入れさせた。

さらに王の名をもって、黄金づくりの剣を贈った。一方では、長政等日本人部隊が、オランダ船の助けを借りて、王宮に攻め入ることを企てているとの流言を、アユタヤ中に言い触れさせた。

宮中でも、シャム人も武装して日本人にたいして備えた。大官連中は長政の真意を糺すべきであると、国王の名をもって、宮中へ招いたが、長政は病気を理由に参内しない。

頃合いはよし、とカラホムはバルケラン一人を伴って長政邸を訪ねた。今度は長政も会った。

カラホムはれいによって叩頭して、彼の任務の重大で苦労が多いこと、王が幼稚であるため、彼が王の意図を実行するのであるが、彼を嫉む者から不当な憎悪を受けること、カパインの死もなんら彼には責任がなく、彼を嫉む者が、彼の名をもってざん言したためであること等をあげて種々弁明につとめた。

さらに今度の噂については、自分は露ほども疑っておらず、大官連中や王にもそのことを説き、今は誰一人、長政を疑う者はいないと言い、またまた涙を流して、

「あなたも私もソンタム王に、王位の世襲を進言し、その御遺命を守って今日まで来たではありませんか。こと志と違って、不幸な血が流されましたが、これからも一緒に幼王を守って、ソンタム王の遺託に報いようではありませんか」

と、長政の両手をしっかりと握りしめる。

長政も日本人町のことを思い、幼王のことを思い、カラホムと共同することを約し、二人は互いに血を啜り合った。

長政との和睦が成功したので、カラホムはいよいよ最大の妨げになる長政を除く計画を綿密に練り上げてゆく。

はたしてカラホムは、一歩、一歩、どんな手をうってゆくのであろうか。

長政への密謀

カラホムの考えたことは、長政をアユタヤへおくことは、なんとしてもまずいということであった。ことに表面上は長政と和解したので、律義な長政は毎日宮中へ出仕して、幼い国王の側近に侍り、片時も離れないであろう。そうなればカラホムの最後の望みを果たせなくなる。

そこで考えついたことは、長政を遠く六昆へ飛ばすことであった。六昆はシャムでは当時、リゴールと呼ばれていた。現在ではナコン・シー・タマラートと呼ばれている。

バンコクから南へ千百キロの地点にあり、由緒のある大寺院があり、マレー半島のシャム湾の南に位置しているので、良港でもあり、新鮮な魚料理の町としても有名であるが、治安の点では、いささか不安が残る。

長政時代のリゴール（六昆）地方は、住民が二派に分かれていて、アユタ王朝から任命された長官もその統治に手を焼いていた。

さらに隣国は現マレーシアであるが、当時はバタニーと称し、バタニー人はマレー語を話し回教徒である。同じ仏教徒であるならば、まだ話し合いの余地も残されていたであろうが、宗教がらみの戦争は古今を問わず、苛烈をきわめるものである。そのバタニー軍が虎視眈々として、リゴールを狙っている。

カラホムはこのリゴール地方に目をつけて、長政おろし（追放）の密謀を着々と実行に移そうとす

る。

彼の考えた最初の案は、リゴールの長官をアユタヤへ召喚することである。というのは、王が幼いので、遠隔の諸領が不満をいだき叛乱を企てるおそれがあるので、いっさいの危険を予防し国を安泰にするため、遠隔の数人の長官をアユタヤへ呼び、国王に敬意を表させ忠誠を誓わせようと、顧問官会議の席で提案した。

一同はすぐさま賛同する。オーヤ・リゴール（リゴール長官）も勿論のこと召喚された。実に、カラホムの狙いはそこにあったのである。

領内が二分されていて、隣国バタニーから挑戦されているリゴール長官が、任地を離れることの不可能なことは、カラホム自身がいちばんよく知っていた。案の定、トラクハウサ・チービヂ（国璽を押した命令書）は直ちにリゴールへ送られたが、長官は今は任地を離れられないので、当分の間、猶予を乞うとの返書をよこした。

カラホムは顧問官会議で、リゴール長官からの返書を、悪意に満ちた報告をして、オーヤ・リゴールを国王の命令に服さない謀叛人と断定し、直ちに新長官を派遣して、前長官を捕えてアユタへ送らせ処罰することを決議した。

ついでカラホムは大演説をぶった。

「リゴールがシャム主要州の最たるものであり、良港であり、国防上の最重要であることは論を俟たない。しかるに今や住民の叛乱、バタニー襲来の脅威、旧長官の叛意は一日もこれをゆるがせにできない。

であるから新しいリゴールの長官たるべき人物は、武勇ある尊敬すべき英雄でなければならない。速やかに英雄をリゴールに送り、旧長官を捕縛し、バタニー人を威嚇し、住民を鎮撫し服従させなければならない。

この大業をなすことのできる英雄とは誰あろう、実にオーヤ・セーナー・ピムツクその人である」

この演説には幼王までひきこまれて、拍手した。顧問官一同も酔ったように拍手して、賛成した。だが長政は承知しなかった。あくまでもアユタヤにとどまり、幼王を守りたいと言う。

カラホムはそれからは長政邸へ日参して、辞を低くし、れいのように涙を流してリゴール行きを懇願した。

幼王の代理であり、摂政であるカラホムが、見栄も外聞もかなぐり捨てて、長政の前に、鞠躬如として頼むのである。

長政はどこまでも日本人的英雄であった。心は動く。最後にカラホムは奥の手を出した。

幼王に直接、長政に言わせたのである。

大官一同、長政もふくめて、幼王の命令には絶対に服従と誓っている。カラホムは最初からその手は使わなかった。奸智に長けた彼は、さんざん根まわしをしたあげく、この手を打ったのである。

結局、長政は承諾した。だが、一つの条件をつけた。

「リゴール地方の住民を統一し、バタニー軍との決戦に勝利をおさめたら、ただちにアユタヤへ呼び戻されんことを」

というのである。王もカラホムも承知した。

リゴール行きの儀式は、王の面前で、カラホムはじめ諸官侍立のなかで、盛大に行われた。ここできわめて注目すべき儀式が行われた。

日本に長政のことを最初に紹介した、智原五六八の『暹羅国山田氏興亡記』や『天竺徳兵衛物語漂流奇談』等や、それらをもとにして書かれた幾多の本に（後述）、長政のことを、「暹羅一国の王なり」と書かれているので、日本人の間には今でも、「山田長政は海外に雄飛して、ついにシャムの王となり王女と結婚した」と信じている人々が多数いる。

これは次のことが誤り伝えられたからであろう。盛儀を整えて長政を宮中に迎えたカラホムは、王の命により、長政をオーヤ・リゴール（リゴール長官）に任命し、さらに金字塔型の冠を幼王の手から長政に冠した。

これは異例中の異例のことである。今までのリゴールの長官は誰一人として、冠を戴いた者はいない。はじめて長政に長官兼リゴール王として王冠を戴かせたのである。であるから長政のことを、近代になってからの著述のなかに、『六昆王山田長政』と書かれてある書物があるがこれは正しい。

だが長政は王冠を戴いても、少しも嬉しそうな顔をしなかった。するとカラホムはさらに王からの贈物と称して、黄金の鉢、剣、国王の用いる調度品の数々を贈呈した。

長政が宮中へ参内する時、日本人町から乗船してゆく専用船プラウ船は、数多くの財宝を積んで、王冠を戴いた長政を乗せて帰途についたが、その邸に近づいた時、たまたま強風が起きて、積荷が過重であったため、プラウ船は転覆してしまった。

付近にいた日本人の多数が水中へ飛びこみ、その肩でプラウ船を支えて邸まで運んだという。

この上は一刻も早くリゴールへ行き、六昆を平定し、バタニー軍を蹴散らして、寸時も早くアユタヤへ帰り、幼王を守らなければならぬ、と長政は日本人町には留守番程度の人数を残し、軍艦をも率い、水陸両面からリゴールへ出発したのである。

幼王を殺害す

オーヤ・カパインを殺し、煙たくて仕方なかった長政を、遠くリゴールへ放出させたことによって、己の野心を遂げるための障碍を除いたカラホムは、急いで最後の仕上げにかかった。金銀や物品を多く与えて、殆どの大官連中を腹心にしてしまった彼は、その連中を集め酒宴を催しながら、次のようなことを言った。

「若い王は全く物事の道理を解さない。シャムのような強大な王国の各階層や人民が、未成年の小児に支配されるということは、かつて例のないことである。であるから幼王は高僧のもとで勉学し徳を積むべきであると思う。

その間は摂政が他の大官連中と協議して、幼王が成人に達したならば、大官の合議政治をやめて、再び王となって統治してもらいたいものだ」

これは一理ある。効果は忽ち現われた。

最大な大身のなかの数人が、全貴族会合の席上で、

「国の幸福及び平和を計り、付近諸王国に対して威信を保つには、若き王は修業のため寺院に入れ、

オーヤ・カラホムを国の統領、または摂政として、対外的には王の尊称を与えるべきである」
と提案した。それを聞いたカラホムは、
「とんでもないことだ。私は政治いっさいから引退して、ひそかに暮したい」
と辞退した。
しかし一派は強引にこの案を推し、快からず思った者も、カラホムの血の粛清の数々をみている恐怖心から、表面上は賛成し、選挙では全員一致でこの案は可決された。
カラホムは、しぶしぶと引き受けた。
若い王はワット・デムン寺院へ送られ、首僧が教育することになった。王冠をいただく第一段階に成功したカラホムは早速、第二段階の策謀にうつった。
またまた側近にこう話す。
「余は政治いっさいから手を引きたい。なんとなれば、寺院にいる王が成人に達した時、余を憎む者、嫉む者等が余の施政について種々ざん言し、または虚偽の訴えをなし、陛下の憎悪を受け、多数の人人の生命は奪われ、憎しみは予が一身及び一家に及び、予が一族の全滅となるであろう。
一国に二人の支配者がある時は、騒擾内乱及び外国との戦争を惹起し、全国の滅亡にいたらしめるおそれがある」
これは実に恐ろしい言葉である。
数人の大官連中は、密かに会合してカラホムの言葉を熱心に討議して結論に達した。
数日の後、顧問官数人が国の役人一同を集め申し渡した。王座は二人が坐るには狭すぎる。有能な

王一人にすべきである、と。
古代ギリシャの哲学者でプラトンの弟子の、アリストテレスは言っている。
〝多数の君主は不可である。ただ一人の外にない国王を、我等の最高の君主となすべきである〟と。
また古代ローマの皇帝で、終始、辺境諸族と戦い偉大な哲学者でもあったマルクス・アウレリウス・アントニヌスは、その『自省録』のなかでこうも言っている。
〝君主の数多きことは何故善くないかといえば、政治が暴虐である場合には、ただ一人の暴虐は多数のよりも危険が少ない〟と。

カラホムがこれらの言葉を知っていたかどうかは、知る由もないが、少なくともシャムは熱烈な仏教国である。古代ローマやギリシャとは国情も違うし、政治情勢も異なる。それにもかかわらずシャムの各階層は、これに似たような見解で、合法な王を未成年であるという一事によって、政治に堪えぬものと認め、自分たちの利益を守るために、賢明で思慮ある摂政を国王に選んだのである。しかも国に二人の王がいることは、国家にとって甚だ不利益であると、不当にも決議した。
カラホムはこの決議に不同意を表明したが、強制されたということで、やむなく承諾することにした。
なんとも残酷なことであるが、若き王は巧みに寺院より連れ出され、僧衣を剝がれて、叔父、兄、兄の母が殺された同じ場所へ連れてゆかれた。この若い王は王位について、春、夏、冬を見ることなく、在位わずか三十八日でその若い命を閉じたのであった。

王者の死刑の方法である赤い布の上に坐らされた時、若い王は言った。

「われはまだ十一歳にも達しないのに、何故に殺されなければならないのか。血の評議会は先に叔父、兄、及びその母を殺し、わが王冠を奪ってもまだ満足せず、なおわが血を流そうとするのか。わが冠を奪って評議会に選ばれた王は、そのままその地位にとどまればよいのではないか。なんでわが命まで奪おうとするのか」

心ある刑吏や市民は密かに嘆いた。

なかにはもし可能であるならば、己の血をもって若い王の生命を購わんと欲した者もあったが、申し出る勇気もなく、この不幸な王はその終焉をむかえた。

一六二九年、日本の年号の寛永六年、三代将軍家光の治世に、カラホムは三十歳の若さで、絶対の王と自ら宣し、多くの儀式を盛大に行って戴冠し、プラサート・トーン王と称した。

新王はその地位を強固にするため、死刑に処した二人の王の姉妹、すなわちソンタム王の長女を第四夫人とし、次女を弟の妻とし、弟を親王として国の継嗣と定めた。

殺された最も年少な王の母は、シャムにおいてはこれまで見たことのないような美人で、才色兼ね備えた窈窕たる王妃であった。

新王は王妃を侍妾の一人に加えようと、何回となく使いを出したがそのたびに断固として峻拒された。最後に無理やり新王の前へ拉致された。

王妃は毅然として言った。

「わが君である王はすでに世を去り、またわが子たりし王も汝に殺された。今は生命に厭き、生きている価値もない身であるが、わが体も心も清浄である。この清浄な体は、生きている間は血に渇したる汝には与えぬ」

新王の面子は完全に失墜させられた。

激怒した彼は、王妃を宮中より河岸まで引き摺らせて二つに斬り、体は首に籐を通して竹の絞架に懸け、諸人の前に曝した。

さる寺院の高僧が、命を的に死体を王族を弔う風習にのっとって、焼いて葬った。さすがの新王もこの僧を罰することは、民衆の手前できなかった。

王妃のこの態度は、血腥く陰湿なこの『史話』のなかで、日本流に言えば、悲壮美感にあふれ、清けくも美わしく、気高くもすがすがしい心地がする。

その他数々の残忍な行為が行われたが、王妃の処刑を最後として、この忌まわしい、なんともやりきれない記述を擱くことにする。

六昆王山田長政の終焉

軍艦を率い、水陸両面から王冠を戴いてリゴールに進軍した長政は、前長官が拠っていた六昆城の修復と補強工事を行った。同時にパッタニの日本人町とも連絡をとらせた。パッタニは現マレーシアの国境にある港町で、六昆へ長政が下る決意をした一つの理由は、この日本人町との連絡と親交を結ぶことも、その目的の一つであった。

山田長政が拠った六昆城址

それと、その日本人部隊の兵力も長政軍に合流させなければならなかった。

長政来る、オーヤ・セーナ・ピムツクが新しいオーヤ・リゴールとなって来る、と聞いたシャム政府に叛旗をたてていたリゴール人は続々と投降してきた。

旧リゴール長官は、長政に捕えられてアユタヤへ送られるかと、戦々恐々としていたが、長政は旧長官に属していたリゴール軍を接収すると、そのまま待機するように命じ、その弟、オプラ・ナリツトには城内への出入りを許可し、情報蒐集や住民の宣撫工作に当たらせていた。

バタニー軍に合流する気配をみせていた部隊に対しては、猛攻を加え、一兵も余さず全滅させて軍陣の血祭りにした。またたく間にリゴールは平定された。旧長官や住民たちは、いまさらのようにオーヤ・リゴールに畏服した。あとはバターニー軍との決戦を待つだけであった。

国境の防備を厳重にしたり、砦を築かせたり、演習に明け暮れていたが、諜者の報告によると、バタニー軍が雨期明けを期して、水陸から六昆へ攻めこんで来るという。

万端の準備は整っている。バタニーへ出撃するよりも、六昆城に拠って邀撃し、おりをみて出撃する作戦を長政はたてた。

山田長政とバタニー軍との激戦地址。六昆城北２キロ

バタニー軍は七万の大軍で、異教徒撲滅の大旆をかざして、怒濤のように攻め込んで来た。

長政軍の兵力は五万であった。リゴール軍が四万、アユタからのシャム軍が六千、日本人部隊が四千、日本人部隊のなかには、パツタニの日本人部隊千人もふくまれている。

異郷にあって、四千人の日本人部隊が、四万余の外人部隊を指揮して猛攻撃振りを示すのであるから、いかに長政の指揮統率の能力が卓越していたか、はたまた、日本人がいかに勇猛果敢であったかがわかる。

長政は城門から撃って出て、水陸両面からこれを迎え撃ち、七日七晩死闘をくりかえした。これを殲滅して一日も早くアユタヤへ帰らなければならない。長政の眉宇は、なみなみならぬ気魄で、ひきつっていた。

長政は陸上部隊を指揮していた。日本人町の所有の軍艦には、長政の部下の今村左京が、日本水軍を率いて戦い、すでにバタニー水軍を全滅させていた。

陸での最大の激戦地は、ターポート運河とパーリナコン川の、水路間にある平原であった。今でもこの町の人々はこの場所を平原と呼ばず、戦場と呼んでいる。ここの激戦でバタニー軍は再起不能におちいった。長政軍の大勝利であった。

しかし長政も足に敵の矢傷を受けた。凱歌は六昆城をゆるがし、領民はこの王がいる限りと平和を謳歌した。長政は六昆城を引き揚

げた。

戦勝を待っていたかのように、昨年アユタヤから新王（ソンタム王の長子、すでに処刑されている）と長政が、日本の大御所秀忠と三代将軍家光あてに出した国書と貢物への返事を持って、腹心の明智五右衛門が日本から帰って来て、アユタヤ経由で六昆城へ到着した。

このことは前にも述べたが、この時の使い船は長政の持船であった。五右衛門は老中酒井忠世からの長政あての書簡と、贈答品の晒布を持って来た。

五右衛門は言う。

「将軍よりの王あての親書は、王朝の大臣に届けました。王には会えませんでした。それよりも殿、日本人町の人々に聞きますと、カラホムが幼少の王を殺して王位についているそうです」

「なんと」

長政は愕然とした。

靄のような得体の知れないものが、アユタヤと六昆の間に存在することは、うすうすは気がついていた。またカラホムの魂胆を察してはいたが、よもやこんな短時日に幼少の王の命を絶とうとは……。この上はかねて決意していたとおり、寸時も早くアユタヤへ帰らなければ、日本人町の同胞の存続も心もとない。長政は早速、リゴール地方を平定したこと、バタニー軍を全滅させたことを、幼い王の名あてで報告書を認めた。

カラホムが王になったことを、故意に無視したのである。長政が六昆に着任して以来の反乱鎮定の経緯や、バタニー軍との戦闘の詳報を書き、幼王のために、かねてお約束とお願い申しておいたとおり、バタニー軍を破った今日、一日も早くアユタヤへ帰り、王のために六昆を確保した喜びを申し上げ、輔弼の任に当りたいと書き加えた。

長政からの報告書を読んだカラホムのチラーヤ王は驚愕した。リゴールへ追い払えば長政は、戦死するか暗殺されるであろうと確信していた。それが内乱の平定、外敵の殲滅を成功させた長政の智謀と武威に、いまさらのごとく恐怖を感じた。さらに、「自分が王位を簒奪したことを知ったら、必ず大軍を率いてアユタへ攻めて来るであろう」と、戦慄した。

アユタヤの王宮では、長政が六昆を平定しバタニー軍を全滅させたとの報に沸きたった。久し振りに平和が来たのである。称讃の声はアユタヤを覆った。

チラーヤ王は、心とはうらはらに、貴族と重臣会議を召集し、

「新六昆総督王の武勲は、シャム国王の永く記憶すべきところである。彼の偉大なる功績に対し、国家の名において顕彰褒賞すべし」

と、提案した。

満場異議なく承認し、最高の恩賞贈与を決議した。長政はバタニー軍を破ったあとは、旧長官が城に出入りすることを許した。彼もカラホムの策謀の犠牲者と思って、憐愍の情をかけたのである。

アユタヤではチラーヤ王が自ら莫大な賞品を選んだ。賞品の中には当時のシャムの慣習である美女数名もふくまれていた。なお結婚すべき女は王妹とされていた。

チラーヤ王は妹と称して別の女を仕立てた。この女は長政のシャム人の現地妻と姻戚関係にあった。その当時の南洋や中近東各地に雄飛していた日本人は、殆ど男ばかりで、一、二のまことに稀有

な事例を除いては、女性が進出したということを聞かない。

したがってその土地土地の現地妻を娶り、子を成していた者も数多くいたが、帰国に際しては、妻子は日本へ連れ帰らなかった。

長政も現地妻との間に、一子、阿因をなしていた。長政はその子を養子にした。この一子が日本に伝えられている「オイン」のことで、重ねて言うが、阿因をオインと呼んだのであってオクンが正しい。

オクンはその時、十八歳になっていた。

チラーヤ王は賞品を長政に贈るに当って、それでも、「新六昆総督王は、現国王に対して忠誠を尽すことを誓約されたい」と書き送った。

美女と賞品の行列は六昆に向かった。それより先にチラーヤ王は、前長官に対し、差出人をオーヤ・バルケランとして、「いかなる方法を用いても、日本人山田長政を殺すべし」との密書を出した。またまた腹心中の腹心、奸智の権化のようなバルケランが登場するが、バルケランは彼からの密書として、「必ずオーヤ・リゴール（長政）を殺せば、私が必ず再び長官になるよう、王にお願いすることを誓う」と、追加して書いた。

六昆城に到着した美女たちのなかで、王妹と称している女は、長政の現地妻と姻戚関係にあり、かねてから長政に心服していたので、早速長政に王が長政に密書を送ったことを告げ、さらに愕くべきことを告白した。

「私もおりがあったらオーヤ・リゴールを毒殺するよう、密命を受けてまいりました」

長政はその娘に感謝して、何食わぬ顔をして、長政の居室にいるように命じた。

直ちに前長官の出仕を禁じ、牢獄に投じた。

ただし弟のオプラ・マリットはリゴール人の宣撫工作に功があり、柔順な性格であり、医薬の心得があるので、足に負傷後は、城内に留めて治療に当たらせていた。

六昆城内における祝宴の翌日、長政は城内の奥深い居室に身を横たえて回想に耽っていた。八月ももう終りに近い。この国は雨期をのぞけば一年中猛暑である。酷暑も高い棟木に支えられた頑丈な瓦にさえぎられて、長政の寝台まではとどかない。風通し用の窓は開けられてはいるが、無人の寺院の一室のようで、心なしか陰湿の気がただよっている。

窓の孟宗竹の葉鳴りもおさまり、日は暮れようとしていた。

――シャムへ来てすでに十年以上にもなってしまった……。

――それにしても、万里の波濤を乗り越えて、苦心して渡ってきたのもきのうのように思える。

――自分は徳川家康公の直臣で沼津の殿様、大久保忠佐侯の輿夫をやったが、なんとか武士になって出世をしたいからであった……。

ところが家康公が関ヶ原で大勝利を得て、天下は定まったも同じになった。石田三成や小西行長等の残党は、日本には身のおきどころもないので、唐、天竺（インド）やシャム、カンボジアへ渡った者たちもいる。

自分も一旗揚げるには、日本にいては埒が上がらないと、見極めをつけた。日本人は氏素性を尊ぶ。俺は阿母から織田信長公にゆかりがあると聞いていた。俺は駿府では信長公の落胤の孫だと言い

ふらした。

ところが、人々は俺を大法螺吹きと嗤ったり、嘲った。笑え、笑え、あざけろ、あざけろ。燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや、だ。

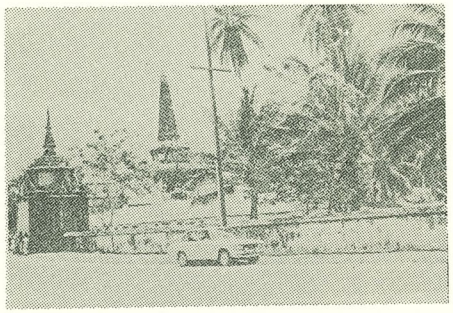
自分は浅間神社前の紺屋を営む養父のもとで、臨済寺へ通って学問を仕込まれ、関口道場で武術を修業した。八幡船が唐を暴れ回っているのも、日本刀の切れ味のせい、と知った。

駿府には滝佐右衛門、太田次郎右衛門という貿易商で船持ちがいた。大宛やシャムへ渡っていると聞いていたので、この二人に慇懃を通じたのだ。あの二人は俺の恩人だ。二人のおかげで日本人町へころがりこんだのだが、日本人町にいる日本人は、なんとも交際が下手で、戦争がある時だけ雇われて命をまとに働く。それにシャム語が下手で、日本人だけが集まっては望郷の念にかられていた。自分はまず、シャム語を自由に話せることが第一だと考え、つとめて港や商店へ行って、シャム人と話した。むこうの役人とも親しくなり、つき合えるようにもなった。

ソンタム王が蛇に襲われたのを、俺は救った。そしていつしか王の前で日本の天皇や将軍のことを話すようになって間もなく任官した。

――シャムはビルマをはじめ外国から、たびたび攻められていた。そのたびに俺は日本人部隊を率いて、戦功を樹てた。官位も進み、今では表むきは六昆王になっている。日本の将軍や老中にたびたび手紙を出したり、先方からも返事や貢物を貰っている。日本にいてはとうてい考えられないことだった。

「いまの自分は日本での大名にも相当する官位をもっている。なんとか一度は日本へ帰り、駿府へ行って故郷の人とも話し合いたい。貿易船も持ったし、軍艦も造った。その軍艦図を浅間神社に寄贈したが、日本の人々は俺のことを、どの程度知っていてくれるであろうか……」



タマラートの大聖骨寺院

「オプラ・マリットでございます」

マリットが伺候した。治療の時間である。

「殆ど快癒いたしましてございます。重ね重ねお目出度うございます」

平身低頭したマリットは、うやうやしく、足の矢傷のあとに膏薬を塗布した。

鞠躬としてマリットがさがった後、長政は全身に痙攣を感じた。

足は麻痺して動かない。

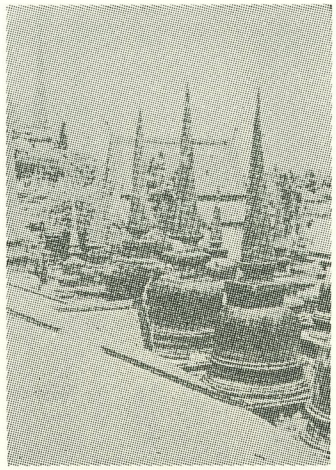
「やったな！」声だけはまだ出た。大声で側近を呼んだ。

マリットが猛毒を塗ったと悟ったが、もはや解毒剤もなんの効果もあらわさなかった。

一子オクンや侍大将今村左京、大塚十左衛門等も、沈痛な顔をして枕頭に侍った。

「まず六昆を治めよ。守りきれなかったなら、柬埔寨王と日本人町を頼れ。しかる後、必ずアユタヤへ攻め入ってカラホムを殪せ。アユタヤの日本人町はなんとしてでも護り抜け」

言葉も次第にとぎれる。



大聖骨寺院のチエデイ。このどれかに長政の骨が納められている。

両手が虚空を摑んだ。眼が大刀にそそがれる。

オクンが察して両手を握らせる。

首を右にかすかに二、三度振る。今村左京が大刀を抜きはなち柄を握らせた。

莞爾たる笑が浮かんだ。日本古来の作法により、屠腹したかったのであろう。

鬼愁は六昆城を包み、万魁の恨みをのんで魂魄は中天に飛んだ。

寛永七年八月末日、いまだ四十歳の壮年であった。

チラーヤ王は長政の死を聞き、してやったりと北叟笑んだが、表面は天をあおぎ声を呑み、六昆大守としてバタニー軍との戦闘で戦死したとし、大聖骨寺院に葬った。

ファン・フリートの『革命史話』には、

「長官は最大なる歓喜と光栄を感じ、その幸福が絶頂に達した時、不幸もまた最も近づき、諸人歓喜に満ち少しも不幸の接近に気付かなかった時、オプラ・マリットは彼の脚に毒の膏薬を貼って毒殺した。これによって彼は数時間後に死亡した」

と書かれている。

六昆、現ナコン・シー・タマラートの、マハータート寺（大聖骨寺院）には、長政のチエデイ（舎利塔）があり、その中に骨が納められている。

ワット・マハタート寺は、「大聖骨寺院」と呼ばれ、タイ国では最も古く格式の高い仏教僧院の一つで、聖仏陀の遺骨が納められている。

三丁四方ぐらいある大きなお寺で、歴代の六昆長官のチエデイがあり、その中の一つが長政のものである。その寺史には次のように書かれている。

「強敵バタニー軍が攻めてきたので、わが六昆の長官は町の北部に砦を築き、船団と五万余の兵力でこれを迎え撃ち、七日七晩戦った。その際、敵軍はターポート寺を焼き払い、長官は死亡した。長官の遺骨はチエデイに安置された」

オクン、カンボジアへ

オクンは長政に似て性格もよく外貌もよく、堂々とした偉丈夫であった。

オクンは前長官が父を毒殺したものと思い、牢から引き出してこれを斬ろうとした。前長官はなかなか奸智に長けていた。

「牢に入っていた私が、どうして六昆王を殺すことができましょうか。残念ながら私の弟のオプラ・ナリットが毒殺したことは間違いございません。逃亡中ですが必ず私の手で捕えて差し出します。私は六昆王にはたいへんな恩義を感じています。アユタヤへ送られる運命だった私を、オーヤ・リ

ゴール王（長政）は助けて保護して下さいました。私が決して前王やあなたに、叛意を持っていない証拠に、最愛のわが娘を差し出します。どうぞお傍において下さい。

私にはシャム人の旧部下もたくさんおります。あなたが私をお信じ下さるなら、私はその部下を引き連れて、あなたに忠勤を誓います。六昆の王位は一日も空しくしておくわけにはまいりません。直ちに王位に即かれるべきです」

旧長官の言うように、彼がオクンの側近となり、シャム部隊に号令を下せば、オクンの強い味方になるであろう。

オクンは日本人の重だった者たちと相談して、旧長官の提言を受け入れることにした。それにオクンはまだ独身であったので、旧長官の娘を妻とすることにした。旧長官は喜んで戴冠の日に同時に婚礼も挙げては、と申し出た。

オクンは早速、オコン・セーナ・ピムックに襲爵し、部下にもオーヤあるいはオプラ等の爵位を与え、また一般市民の面前において、公に戴冠して国王と認められ、忠誠の誓いの印として、彼等に祝福された水を飲ませる日を定めた。

しかし旧長官は長政麾下の侍大将、オコン・シルウイ・アグウオット（残念ながら日本名は判明していない）をそそのかした。

「わが婿ではございますが、あの青年には長官となる資格はございません。それよりも年長ではあり、赫々たる武勲をたてられたるあなたこそが、長官になるべきです」

この日本人は野心家であり、長政よりも年上であった。十八歳のオクンの下風につくことはなんとしても堪えがたい。せっかく異国へ来たのであるから、最後のチャンスであるので一旗揚げたいと、同志を語らってオクンに敵対した。

さらに旧長官は、リゴール地方の貴族や民衆に説いた。

「なんとしても日本人をリゴールから放逐しなければならない。名誉を重んじるシャム人が、なんで日本人に頭を下げなければならないのか。ましてリゴールの統治は世襲ではなく、選任によるものである。その選任はアユタヤの陛下の権限にある。日本人は継承の権利のない反逆者であり、国王の名と権威は彼等によってすでに冒瀆された。われわれもそのまま彼等の行動を許せば、アユタヤの国王によって、われわれも生命を奪われるであろう」

旧長官の嘯しにのって、貴族等はオクンの戴冠の日にも宮中に出ず、日本人の統治を認めず、またその優越することも認めない、と決議した。

オクンたちは戴冠式に必要ないっさいの準備を整え、たびたび貴族たちを促したが、定められた日には一人も参内しなかった。

しかしオクンやその部下たちは戴冠式を挙げ、人民に国王への敬意を表するため、参内して誓いの水を飲むように、また敬礼を行うように布告したが誰も来なかった。

旧長官はさらに人民を巧妙に誘導したため、リゴール人の日本人にたいする憎悪はつのり、双方は攻撃の態勢を整え、一触即発の危機をむかえた。

オコン・シルウイ・アグウオットは、ようやく旧長官の奸計に気がつき、怒り心頭を発して、その邸を襲撃して彼を殺した。長政を毒殺した弟のオプラ・ナリットもその邸に匿われていたので同時に

殺された。

これをきっかけとして日本人とリゴール人との間に戦端が開かれ、日本人部隊はリゴール人を殺戮し、六昆の町の大部分を焼き払った。

オクンはリゴール王の名をもって、逃走した人民にたいし、その生命財産を保証するから六昆へ帰るように布告したが、わずかに支那人が帰ってきただけであった。オクン等とオコン・シルウイ一派とは、最後まで相容れざる仲であった。オクンはついにオコン・シルウイ一派を討ち取った。

廃墟と化した六昆には、オクンは留まることの不可能であることを知った。それにアユタヤからは新長官が任命されて、大軍を率いて来るであろうことも予想されたので、長政の遺言によって、軍艦に乗ってカンボジアへ行くことにした。しかしアユタヤの日本人町がなんとも心もとない。そこで今村左京、速水又三郎等がオクンを守ってカンボジアへ行き、他の侍大将の大塚十左衛門、山田仁兵衛、明智十太夫、明石舎人、後藤又六等は途中から分かれて、若干の部隊とともにアユタヤの日本人町へ行くことにした。

プノンペンは前にも述べたように、カンボジアの首都である。そこには日本人町がある。かつてソンタム王がカンボジアを攻めた時、王は長政に日本人部隊を率いての参戦を求めた。それより前にプノンペンの日本人町の頭領から長政のもとへ密使が来て、「日本人同士が血で血を洗うようなことになるから、出兵を見合わしてくれ」と申し入れた。

長政はこれを承諾して一兵も出さなかった。そのために、プノンペンの日本人部隊は勇猛に戦い、カンボジア軍は大勝し、リンタム王は敗退した。

それ以来、カンボジア王は日本人を大いに信任して、オランダ人町、支那人町、ポルトガル人町の管理も委任されるようになった。

プノンペンに到着したオクン等を、カンボジア王は歓迎した。オクンにたいしては六昆王として遇した。

これは後述するが、間もなく、シャムのプラサート・トーン王はアユタヤの日本人町を焼き払ったため、日本人はプノンペンへ逃げてきた。カンボジア王はこの日本人たちを優遇した。それまでシャム王はカンボジアを属国のように思っていた。そこでカンボジア王は、日本人部隊の助けをかりて、シャムへ攻め入った。トーン王は敢えてことをかまえなかったので、それ以来、カンボジアはシャムから完全に独立した。

オクンもこの戦闘には参加した。

寛永九年の一月三十日、一人の日本人がプノンペンを訪れた。肥後の加藤清正の遺臣、森本近太夫である。彼はアンコールワットへ行き、日本から持って来た仏像を奉納し、中央回廊の柱に落書したのが今でも残っている。

オクンはその後、父長政と同じように、カンボジア王室の王位継承の争いに巻き込まれて、戦死したと伝えられる。

その後の日本人町

アユタヤの日本人町は、鳴りを静めていた。長政の毒殺されたことや、オクンがカンボジアへ行ったことは、リゴールから帰ってきた大塚十左衛門や山田仁兵衛から聞いて知った。そこへ長政の持船の貿易船が長崎から帰ってきた。

この船には日本との貿易によって得た利益金の銀を、多量に積んでいた。日本人に多大の資金が入れば、軍用金として、またリゴールのような叛乱を企てるであろう、との側近の意見に耳を傾けたトーン王は、この船を没収した。

そこへカンボジアがプノンペンの日本人町の部隊と、オクンの部隊を主力として、シャムへ侵攻してきた。これと同時にアユタヤの日本人部隊が呼応したら、と懸念した王は、長政の貿易船と銀を日本人町に返し、さらにチーク材製の優秀な船を日本人町に売却し自由貿易を許した。

アユタヤの日本人町はこれで大丈夫と考えた王は、カンボジアと講和して、その独立を認めた。

しかし、アユタヤの日本人町とプノンペンの日本人町は絶えず連絡をとっていて、とくにオクンはアユタヤの王宮へ攻め入って、必ず父長政の仇のプラサート・トーン王を殺すであろうとの噂が、カンボジアから流れてきた。

トーン王はしばしば長政の亡霊に悩まされていた。それならばと意を決し、その年の十月二十六日夜中、日本人町に火を放ち、大砲を撃ち込ませた。その日は、数日前からアユタヤの付近は河水が溢れ浸水していた。河水が溢れ、水びたしになっていたので日本人町は油断していた。そこへ不意の襲撃である。銀（取引きは銀であった）を、せめて二隻の軍船へ積み込もうと思ったが、一隻へ積み込むのが精一杯であった。

大塚、山田、明智十太夫、明石舎人、後藤又六等の侍大将等が指揮してメナム河を戦いながら下って、プノンペンへ落ち延びた。しかし、日本人町は焼き払われてしまった。

ことの次第は幕府にも届いた。日本では秀忠が死に、家光が三代将軍になって独裁時代となり、旗本御家人にたいして「武家諸法度」を制定し、日本は内政中心主義に移行していった。

この日本人町焼打ちのことが幕閣に知らされたのは、二年後の寛政九年であった。幕府では尾張大納言をはじめ御三家や老中が、江戸城へ参集して、善後策を相談したが、しばらくは形勢を傍観して、すすんで行動はさしひかえるというところに落ち着いた。

しかるにプラサート・トーン王は、正統なシャムの王を三人までも殺し、その一族を根絶やしにして王位に即いただけのことはあって、人民の統御や対外的には、きわめて柔軟な姿勢をとって、シャム王国の発展のためにつくした。

バタニーやソンクラ（バタニーの隣国、シンゴラともいう。現タイ領）もアユタヤに従属しなくなると、すぐさま日本人にアユタヤ帰還を許している。

これはオランダがひそかにバタニーとソンクラを裏面から操り、援助をしていたのを探り、それならば信義に篤い日本人を再びアユタヤへ呼び、貿易面でもオランダを牽制させようとしたのである。

一六三三年（寛永十年）、カンボジア在住の日本人三百四十人が妻子（現地妻とその間にできた子）を連

れて、アユタヤへ移住したと記録に残されている。アユタヤの日本人町の再建は寛永十年からはじまった。その頭領に選ばれたのが糸屋太右衛門で、副頭領が平松広助であった。

太右衛門、広助時代

この二人のことに関して記録に残っているのは、『シャム、オランダ商館日記』一六三三年六月五日の条である。

「また当地日本人の頭領たる太右衛門殿及び広助殿と、会社のために皮革を適当なる価格で買い占めることを契約した」

これでみると、日本人町復興に着手していくらも日が経っていないのに、日本人町は大いに活躍していたことになる。

この時代の背景を考えてみると、寛永十年二月、幕府は第一次鎖国令を発令しているので、海外渡航は全面的に禁止された。

そこでアユタヤ在住の糸屋太右衛門――長崎の貿易商糸屋随右衛門の一族で、彼の一家は早くからルソン、南洋各地に貿易船を派遣し、鎖国直前まで家業をつづけた――と、平松広助（平戸出身）等の日本人たちは、日本との貿易をすることができず、オランダ人を仲介として商売をするしかなかった。

幕府は長崎港ただ一つをオランダ人と支那人に開港して貿易を許可していた。これはキリスト教禁

止令のためである。

一方、オランダ商館側にとっては、日本人がこの地方で長年にわたって培っていた実績と、実力に依存して買い付けすることが、最も有利で確実な方法だったのである。

また同じく『商館日記』同年九月十三日の項にも、

「鹿皮買入れの季節も始まり、すでに数週間前から日本人商人が、皮革買集契約を結ぶことを余に乞うているので、商館員列席評議の上、鹿皮を買い占めのため、当地日本人の頭領、太右衛門殿、及び広助殿、ならびに日本人商人喜太郎殿等と、鹿皮を三か月以内に応じて引き渡すべき条件に基づき、シャム銀五十一カチイをを手交することを承諾した」

と記している。

またオランダ商館長、ヌハウテンは、翌一六三四年（寛永十一年）一月二十二日に、太右衛門と鹿皮三千枚、及び鮫皮三千枚をそれぞれ四か月以内に引き渡すべき買付契約を結んでいる。

続いて同年四月十八日、五月二日、三日及び四日、六月二日に日本人は契約に基づき鹿皮と鮫皮を分納した、と日本人の約束に忠実なことも記録されている。

このように、太右衛門、広助の両人は、オランダ人の委託によって、当時のシャムの重要輸出品、皮革の購買等を斡旋するとともに、他の諸商品、たとえば鉛のごとき物も、日本人の尽力によって入手していた。

さらに『商館日記』一六三三年（寛永十年）九月二十六日の項にも、

「太右衛門殿の斡旋で鉛棒百本を、ひそかにペグー商人数名から（非常に安値に）一本百斤を、三

テール四分の一で買い入れたが、ペグー人はこの鉛を土地の鉛鉱山から、普通の場合は河水の氾濫期に持ち下って、必ず国王の手代に引き渡さねばならぬとされ、この商品取引は特に厳罰をもって禁じられていた。

であるから、支那人、日本人、交趾支那人（十六世紀末から十七世紀初めにかけて、今日のほぼアンナンに当る地方に住んでいた人種）等の、ジャンク船が当地に来航しても、一本に付き四、五または五テール半で売却されていた。

その輸出に当っても多額の献上物をしなければ、許可されなかった。

日本人が安く買い付けた鉛を、ひそかに日本へ送るならば、疑いもなく十割以上の利益があるだろう。また船荷としても少しも場所をとらない」

と、記されている。

これらの諸商品の購入後も、運搬や荷造りに関しても、オランダ人はつねに日本人町の頭領の尽力をあおがなければならなかった。

一六三四年（寛永十一年）四月十八日の『商館日記』には、

「太右衛門殿がオランダ商館に参り、鹿皮購入、分類、荷造りのため、日本人を雇って欲しいと申し出たので、今後これらの仕事を全部日本人に委すことを承諾した」

と記されている。

というのは、日本人はオランダ商館の下請仕事までしていたようで、鎖国令によって日本人と自ら直接貿易ができない模様がうかがわれる。

また一六四二年（寛永十九年）十月二十五日の『商館日記』には、

「日本人広助及び太右衛門の妻を、日本人頭領の前に喚問して、オランダ人への債務、未済の理由をたずねさせたが、両人とも負債について知るところがなく、太右衛門の傍に在りし日も浅く、かかることを少しも知らず、また太右衛門は永らく病床にあったので、全く消費しつくして死んだ、と申したので、ベルケラン（外務・財務長官）は引き揚げた」

と記されてあるので、二人の日本人町の頭領、副頭領は死んだことがわかる。妻とは勿論、現地妻である。

したがって糸屋太右衛門と平松広助の頭領としての任期は、寛永十年から十九年までということになる。ここに出てくる頭領とは、次の日本人町の頭領、木村半左衛門のことである。

木村半左衛門

木村半左衛門は、日本が鎖国を断行したので、孤立のやむなきにいたり、なんらの国家的な背景も会社の支援もなしに、独力でオランダの東印度会社を向こうにまわし、錫、及び鹿皮の貿易商として大活躍をし、日本人町頭領に選ばれた男であった。

オランダ商館長、ニコラース・デ・ロイは、「日本人の頭領は最大の錫商人である」と舌を巻いていた。

半左衛門は幼名を喜太郎と言い、長崎本大工町の木屋久右衛門の弟で、平戸町の辻万右衛門や諏訪

町の木村五郎左衛門の兄に当る。

錫のほかに鹿皮の大貿易商で、長政時代に長崎からアユタヤへ来て、自分でも船をマレー地方やアンナン地方へ航行させていた。一六三九年（寛永十六年）七月十四日に、オランダの商館長、ファン・フリートからオランダ船の船長、フランソア・カロンに送った手紙に、

「当地においては喜太郎という一日本人が、商館の再建以来、しばしば来訪して鮫皮や其他諸商品の蒐集、鑑別並びに荷造りに無報酬で非常によく働いてくれたが、前記、喜太郎の言うところによれば、長崎に万右衛門という兄弟がいて、相当な暮しの商人で善良なる男であるこの弟に、貴下が逢ってやって、託送した日本文書一通を彼に渡してもらいたい、と言っている。

喜太郎のこの熱心なる願いを無下に退けかねるので、あまり私の紹介が束縛にならないならば、貴君が上手にこの手紙を届けてやって、万右衛門に適当な顧眷（こけん）と信用を与えられんことを願う」

とある。

喜太郎とはすなわち半左衛門で、アユタヤ王宮からオーク・ルオング（尉官）に任官されていた。鎖国時代にオランダ人に託して、故郷の長崎の弟に、シャムから手紙を送ったなどは、時代を背景とした一つの挿話である。

鎖国といえば、半左衛門が手紙を故郷に送ったこの寛永十六年には、日本では島原の乱もおさまり、幕府は第五次鎖国令を布いた。

その犠牲者の一人が「ジャガタラお春」である。

さきにヨーロッパ人を国外に追放した幕府は、この年に彼等に嫁した日本人や混血児までも、国外

へ追放することになった。

その時少女だったジャガタラお春も、蘭、英系混血児三十二人とともに、長崎からオランダ船に乗せられて、ジャワに追放されたのである。

ジャガタラは、ジャワ島のジャカルタのなまったもの。「ジャガタラお春」のことは、歌や『長崎夜話草』などにも書かれている。

異国にあってこれらの人々は、日本の親族や知人をなつかしむあまり、切々たる心情を、オランダ人に頼んで、織物などとともに送った。その手紙が今でも長崎県の平戸に残されていて、「ジャガタラぶみ」と呼ばれている。

なかでもお春のは有名である。

「あら日本恋しや、ゆかしや見たや見たや」

と。読む人の心を打つ。ちなみにジャガタラお春は一六九七年（元禄十年）四月二十五日、七十三歳で死んだ。

十五歳で日本を追放されてジャカルタで結婚し、死んだ時には、娘マリアと三人の孫に見守られたという。

さて半左衛門であるが、一六七一年（寛文十一年）十一月三十日の、アユタヤ、オランダ商館長、ニコラス・デロイがバタビアへ送った書簡に、

「前年十一月より、本年九月まで六昆において錫十二本しか購入できなかったのは、主として日本商人が六昆で錫の買い占めを行ったからである。日本人の長はわれわれがしばしば訴えたごとく、

最大の錫商人である」

とあるから、半左衛門はこの頃までは活躍していたが、その前年、アユタヤで死んでいる。

アントニイ善右衛門

木村半左衛門と時を同じくして、日本人町の頭領に選ばれたのが、アントニイ善右衛門であった。彼はその名からして、シャムに多数避難したキリシタンの一人であったろうが、アユタヤ王朝からオーク・ルオング・ソーラ・チット（尉官）に任官されていた。

その当時のシャムの外務大臣、オーク・ヤープラクラング書簡によれば、

「日本人の頭領オーク・ルオング・ソーラ・チットは国王の臣僕でまた俸給を給与されているが、国王に長さ十七尋（一尋は両手を左右にのばした長さ、約一・八メートル）、幅三尋のジャンク船に各種の商品を積み込み、交趾支那に派遣することを乞い、許可になった」

とある。

このことは善右衛門が半左衛門と同じく義勇軍の隊長をしていた証拠で、一六四四年四月二十七日にも、国王は日本人の頭領両名に、引出物（手柄をたてたので）として、蘇枋木四万斤を下賜している。シャム政府と親密な関係を結ぶと同時に、オランダ商館へもしばしば出入りした。一六三七年（寛永十四年）三月六日のオランダの『商館日記』には、

「本日、われらは日本人アントニイをして、鹿皮と鮫皮とに投資して購入したる皮革を、当地の商

館に納入せしめ、帆船がバタビヤから帰ってくるまでに、皮の代価を唯今から同船が日本に向かい出帆するまでの間に、相場に応じて支払うべきことを契約した。この契約は会社には有利であろう。この方法によって約一万枚の鹿皮を入手の見込みである」

と記されている。

オランダ東印度会社は日本の鎖国によって、シャム貿易を独占するようになった。日本人はオランダ商館に出入りして、義理堅く商売を行っていたので、オランダ商館側も好意的に、時々、必要に応じて資金を無利息で融通していた。

一六五七年（明暦三年）二月二十二日の、オランダ商館長、ヤン・ファン・ライクが、ジャワ総督に送った文書によれば、

「回収困難な不良債権、糸屋太右衛門一四〇六グルデン、平松広助八四〇グルデン、アントニイ善右衛門、木村半左衛門、石橋加兵衛――オランダ人とも関係が深く、当時のアユタヤ日本人町の有力者の一人。『延宝長崎記』に記された、長崎浜野町、原作兵衛の親類である石橋加兵衛に相違ない――に貸与した額二五二〇〇グルデンの多額に上っていた」

とある。

それほどオランダ商館は日本人に資金を貸し付けたのである。しかしこれは日本人の名誉のために書き留めておくが、この債務は返済されたので、「一六六三年（寛文三年）の帳簿尻によれば、当時未決済債務は、日本人一名、支那人一名で合計七八〇グルデンに過ぎなかった」と、『商館日記』にある。

一六六三年といえば、オランダは植民地政策を強力に推し進め、アユタヤのナライ王（プラサート・トーン王の次男。二十五代王）を圧迫していた。

一六六四年八月十日、オランダ艦隊はメナム河口を閉鎖して、すべての船の航行を遮断した。ついにナライ王はオランダに屈し、オランダに皮革、その他の物資の貿易独占権を与えた。またオランダ人にたいしては裁判権を許可し、オランダ船以外の船は、支那人船員を雇うことを禁止した。かくしてオランダは東南アジアから支那、日本にいたるまでの貿易独占権を獲得し、きわめて有利な立場に立つにいたった。

そこでナライ王は、オランダの侵略を防ぐために、西欧諸国の事情を学び、ついにフランスと同盟を結ぶにいたる。

バランス・オブ・パワーの原則に従ってアユタヤに現れたのは、ルイ十四世のフランスであった。

日本人町の終焉とギョマー夫人

アントニイ善右衛門以後の日本人町の頭領の名は、記録に残されていない。

それならば日本人町はいつ頃まで存続していたのであろうか。種々の記録をたどって、その推定を試みよう。

ルイ十四世がアユタヤへ派遣した大使、シヨウモンに従ってアユタヤ入りした神父ギイ・タシャール――一六八五年（貞享二年）九月、シャムに入る――の紀行文によれば、

「大使閣下がシャムの王都に到着するや、かねて日本人町の前に住んでいたコンスタンス氏は、閣下の旅舎の近くに彼が所有していた立派な邸宅に居を移した」

とあって、明らかに日本人町の存在を示している。コンスタンスとは、当時シャム国の宰相に栄進したギリシャ人、コンスタンス・ファルコンのことである。

十七世紀後半、西欧諸国が東南アジアへ激しく進出してきた時、アユタヤ王朝はどんな対策をもってこれに対処したのであろうか。

西欧の進出に対しては、西欧人を登用して対抗する。山田長政を重要視して重用したのも、ビルマや隣国パタニーに対するためであったことは、いくつかのうちの確かな理由の一つであろう。この政策はシャムの、伝統的な対外政策の底流をなすものであろうか。

ファルコンはベニス系のギリシャ人で、一六四七年、ギリシャのセパロニア生まれで貧しい暮しをしていた。何故にファルコンのことをここで書くかというと、長政亡き後、外国人でシャムの宰相になったということと、彼の最愛の妻が日本女性であったからである。

ファルコンは十一歳の時に東印度会社のボーイになり、船へ乗り込んで各地へ航行し、多くの言葉や知識を修得した。ファルコン（はやぶさ）とは、乗っていた船の名前からとったものである。

彼は誠実で明朗で賢明で美男子で、ポルトガル、英、マレー語を話すことができた。一六七九年、ジャワの英商館からアユタヤの英商館に移り、シャム王の役人となった。三十一歳で英国人町に住んでいた。

当時のアユタヤにはビルマ人地区、支那人地区、印度人地区、交趾人地区、オランダ人地区、英人

地区、マレー人地区、マカッサル人地区、日本人地区、ペルシャ人地区、ポルトガル人地区、フランス人地区があり、フランス人地区だけは特権としてアユタヤ島内に居住地区が認められ、その他の国人はアユタヤ島の南対岸に居住地が定められ、外人居住地区と呼ばれていた。

ファルコンの妻になった若くて美しい日本娘は、現在の日本人町の対岸ポルトガル人町に住んでいた。若い日本娘はその名を、マリアギマルルト・ピニナと呼ばれ、十六歳であった。

彼女は丈は低かったが、清純な美しさは教養の高さを示し、人々を魅了していた。彼女の母はウルスラ山田といい、山田長政時代に日本から移住してきた良家の娘であったと伝えられている。父は日本人とベンガル娘との混血児であり、彼等は日本人町から対外のポルトガル人町に移住してきた。それは祖母がポルトガル人町に住んでいたことと、日本人町がプサート・トーン王によって攻撃されたので、難をのがれて移ったのであった。

ポルトガル人地区はカソリック教徒であり、彼女もカソリックであり、父は日本人町やオランダ商館に出入りして商売をやっていたので、自然にファルコンと親しくなったという。

彼女一家の信仰心の強さはファルコンを強くひきつけ、ファルコンがカソリック教徒になったのも、彼女一家の影響によるといわれている。

ファルコンは十八歳になった彼女と結婚した。ファルコンの恩人ジョージホワイトは、シャム役人をやめるので、ファルコンをシャム貿易財務官に世話した。当時の東南アジアの通訳語は、ポルトガル語とマレー語であった。ファルコンは両国語に堪能だったので、シャムの大蔵大臣に非常に可愛がられた。貿易は王室の独占事業であった。

当時のシャムはオランダと対抗するために、外国勢力と結ぶ必要にせまられていた。ファルコンはフランスと結ぶことをナライ王に進言した。王は喜んでファルコンを外国貿易の総監督長官に任命し、閣下の称号を与えた。

ファルコンの尽力によって、一六八四年、シャムの使節はフランスへ行き、ルイ十四世に会い、一六八五年九月、第一回目のフランス使節団がアユタヤへ到着した。同時にフランス軍艦も来航した。

ファルコンは外交長官に任命され、いっさいの交渉を王によって任された。フランス大使はナライ王に、キリスト教への改宗をせまった。これはシャムの実状を知らぬ無理強いであった。シャムは仏教が国教である。ファルコンはこのことを充分にフランス側に説明し、改宗問題はあとまわしにして、軍事同盟を結んだ。

ファルコンはついに宰相となった。ファルコンは王に次ぐ権力者となった。さらにはフランスのルイ十四世からも、伯爵に叙爵された。

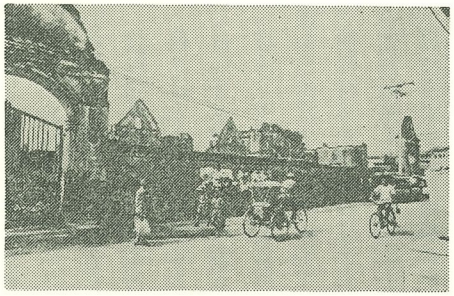
一六八八年（元禄元年）五月十一日、ナライ王は病床にふせっていた。もはや余命いくばくもないとされていた。そこへクーデターの一隊が侵入してきたのである。

隊長はペトラッチャという人物であった。ペトラッチャは象隊の隊長で、小男で短気ですでに五十五歳であったが、勇敢であった。

ナライ王とは乳兄弟で、王はペトラッチャを可愛がっ

コンスタンチ・ファルコン
(1647～88)

ていたが、ペトラッチャはファルコンに憎悪の念を燃やしていた。彼は王に、
「ファルコンが王位をとり、王宮を占領しようとしていると聞いたので、王位を守るために王宮へ来た」
と、告げた。
ファルコンは王宮にはいなかった。アユタヤから北方のロップリの大邸宅に彼はいた。邸の中にフランス式教会堂を建てて、日夜、敬虔な祈りを捧げていた。
この教会址は、現在廃墟になっている四つの建物の西端の建物がそれである。教会は大理石と金箔でおおわれていたと伝えられている。教会の壁は日本人の秀れた画家によって、多くの壁画が描かれていたともいわれる。
当時はキリスト教徒の日本人画家がいたらしい。有名な壁画家山田右衛門は有馬家の臣であったが、天草の乱の時は、一方の大将をした。この山田の弟子か身寄りの者か、アユタヤへ祖国から逃亡してきたのであろう。
一六三五年に徳川家光は、在外日本人の帰国を全面的に禁止したので、シャムにいた祖国喪失の日本人たちは、いろいろな場所で知人を頼り生きのびていた。
ファルコンは妻と四歳になる息子と、妻の母の日本人婦人、祖母と住んでいた。王宮へ来るように使者が来た。
ファルコンは殉教者としての死を覚悟した。日本人の彼の愛妻ギョマーは、
「ファルコンよ、貴方の今日の地位は王から授けられたものです。地位は貴方のものではありません。これは王の側にあるものです。貴方の生と死は貴方自身のものです。これは神の意志によってなされたものです。もし貴方の死が神の意志であるならば、神に捧げる名誉の死となるでしょう。このことは同様、王に対しても名誉の死となるでしょう」
夫妻は神に祈った。ファルコンは妻に、「もし私が帰って来なかったなら、バンコクへ行ってフランス軍艦に避難するよう」にと告げた。
ファルコンは駕籠に乗って邸を出た。宮殿に入ろうとした東門の所で、ペトラッチャの兵隊に捕縛され、王宮の奥の地下室へ入れられた。王宮内には六人のフランス将校も監禁されていた。
ペトラッチャは王座につき、フランス将軍と僧院長を宮中へ呼び、
「王の病が重いので余が王の代理として国政を行う。フランス軍隊は余に忠誠を誓うべし」
と宣言した。
ペトラッチャはフランス守備隊の全面撤退を求めたが、戦争をすることは好まなかった。
彼はこの交渉をフランスへも使節として行ったことのある外務大臣のサンソーンに命じた。サンソーンは一年をかけてこの交渉を見事になしとげた。
ファルコンの妻にたいしては、シャム政府は責任をもって保護す


ファルコン邸跡

ることを、フランス側に確約した。

一方、ファルコンはフランスと共謀して謀叛を計画した、という大反逆罪を科せられて、一六八八年六月五日朝、牢から引き出され、象に乗せられて刑場の森へ引き出された。

彼は独りで立ち、天を仰ぎ輝く眼は天国を見つめ、自ら死することを願い祈った。

彼は役人に妻と子のことを尋ねた。そして刑執行人に、ルイ十四世から授けられた騎士団の十字架を首からはずし、一人息子に渡してくれるように頼んだ。

彼はすでに天国へ登る準備を終り、平和な天国への出発を静かに待った。彼の口もとに浮かぶかすかなほほえみは聖者の姿でもあった。

彼は自ら執行人に処刑の合図をした。かくしてファルコンは四十一歳を最期に、ロップリの森にその生涯を閉じた。

彼は東印度会社の船のボーイから身を起こし、シャムの最高の地位に上り、ルイ十四世から伯爵を授けられた歴史的偉大な人物であった。

ファルコンの死は村から村へと伝えられ、バンコク、アユタヤにも伝えられ、後日刑場跡に小さな祠(ほこら)が建てられ、ファルコンと縁(ゆかり)のあるシャム人の口から、この祠に祈りを捧げると、あらゆる病が治るといわれた。

ファルコンの死刑執行人は、騎士団の十字架を持って、妻のもとへ届けた。

彼女は馬小屋へ息子とともに監禁されていた。彼女の一家はカソリックのなかでも、純正キリスト教を説く、イエズス会教派であった。フランスのセントリイ中尉は、アユタヤへ行き、ファルコンの

妻と息子と他に三人のキリスト教信者をひそかに連れてバンコクへ帰ってきた。その間にギョマー夫人の母（日本人）、伯母、伯父たちは日本人町にかくまわれていた。

日本人町の人々は、その頃は貿易船もなく、フランス館、ポルトガル商館、オランダ商館、英商館等に出入りし、王室貿易の物資購入、販売荷造りの下請け仕事をしていた。

日本人は正直でよく働き、信義に厚かったので、政府役人からも他の外人町からも、非常に信用され、好意を持たれていたので、何かとかばってくれたのである。

外務大臣は日本人町の頭領、アントニイ善右衛門（二世）を呼び出し、ギョマー夫人と息子を日本人町で保護してくれるよう頼み、母子が自由で良心的な生活をし得ることの保証を与えた。

ここにアントニイ善右衛門の名前が出てきたことは、なんともありがたい。というのは、長政以後の日本人町の消息を知る上で、貴重な資料になるからである。在来の資料では、最後の日本人町の頭領は、木村半左衛門とアントニイ・善右衛門とされてきた。その任期は、二人とも一六四二年（寛永十九年）から七一年（寛文十一年）までの、二十九年間となっている。

それがこのシャムの革命の最中に、シャム側の記録とフランス側の記録に、日本人町の頭領、アントニイ・善右衛門が登場してくるのである。

二十九年間も頭領をつとめたアントニイが、それから十七年後に再び現れたということは、同名でも同一人物であるとは断定しがたい。

今までの調査では、元禄年間のはじめに、日本人町に頭領がいたことは間違いないとはされていたが、それが誰であるかは判然としなかった。

ここに出てきたアントニイ・善右衛門はおそらく病没したアントニオの実子、すなわち二世であろう。これが順当な見解であろう。

日本では鎖国令が布かれ、キリシタンを弾圧していたので、アントニオにすれば、アユタヤは安住の天国でもあったであろう。先にもふれたように、アントニオは熱心なキリシタンであった。シャムの外務大臣の要請をアントニオは、喜んで引き受け、ギヨマー夫人と息子を日本人町へ引き取った。一家は感謝しながら、久し振りでともに日本人町で暮せるようになった。

さてこの革命の始末を書こう。

フランスの軍隊と軍艦二隻は、一六八八年十一月、シャムを引き揚げフランスへ旅立った。フランスでも革命が起きていた。

ナライ王は病死してペトラチャは二十七代目の王位に即き、ナライ王の妹はペトラチャの王妃になった。ナライ王の王子と二人の王弟もペトラチャに殺された。ペトラチャは一七〇三年、七十一歳で病死した。ペトラチャの子供として育てられたサラサク——実はナライ王が卑しい女に生ませた子——は、副王となっていた。

ペトラチャが死ぬと副王サラサクは、ペトラチャの子供二人——一人は十四歳、一人は十歳——を謀殺し、自分が王位に即いた。まさに因果応報である。サラサクはタイガー王と呼ばれるほどの暴君であったが、四十四歳で病死した。そのあとは息子のタイ・スラが王位に即いたが、タイ・スラ王はまことに良識のある人物で、運河の開発や多くの寺院を建造し、キリスト教徒を優遇した。

アユタヤには再び平和が訪れた。

日本人町に引き取られたギヨマー夫人は、アユタヤ・キリスト神学校を再建し、多くの子女を教育し、神学校では文字や料理、裁縫を教え、結婚の世話までした。

王宮の子女の多くも通い、神父たちからは聖女マリアのように尊敬されたので、いつしかタイ・サラ王の耳にも入り、王宮へ自由に出入りすることを許された。王宮では女官たちの心の灯のように尊敬され、王にもフランス料理や、母に教わった日本風の菓子等を作って献上したので、王はいたく感じ入り王宮の大膳係女官頭に任命した。

王宮からはしばしば多額の報酬が支給された。夫ファルコンは莫大な財産を持っていたが、すべてをペトラチャに没収されて、ほとんど無一文であったが、それらの支給額の全部を大蔵省に返納した。

「キリスト教徒にとっては、この世の財宝はすべて土塊のようなものとみえる」

と、王は感嘆したといわれる。

タイ・サラ王からは、「チャオ・ギョマー（宮中における黄金の馬蹄の位）を与えられ、一七一七年からは二四年まで王宮で過すようになった。一七二四年に彼女は六十二歳であったが、没年は明らかにされていない。

彼女の一人息子は成長してシャム国海軍大尉になり、ポルトガル人の混血娘と結婚し、一男一女をもうけたが、二十六歳で死んだ。ギヨマー夫人の悲嘆は大変なものであった。孫はギヨマー夫人の愛情を一身に受けて成長し、孫娘はビルマ軍の大尉であったポルトガル人の混血児と結婚した。男の孫はアユタヤのフランス神学校に入学し、王宮の倉庫監視官を命ぜられたが、のちにアユタヤのキリス

ト教信徒の総監督官となり、ポルトガル系の混血娘と結婚した。

さて、日本人町の終焉であるが、確かにギョマー夫人の生存中は、アントニイ・善右衛門が頭領をしていたと記録にあるが、その頃の日本人町には貿易船もなく、他の外人町に雇われて下請けをしたり、荷造りをしたりして、細々と暮していたものとみえる。船を借りたとしても、日本の長崎へ行くこともできず、日本からの渡航者も一人も来ず、どんどん人口は減少し、ギョマー夫人の孫たちのように外国人と結婚したりしていったのではあるまいか。

一七一八年（享保三年）五月、イスパニアのフィリピン総督が特使グレゴリオ・ブスタマンテ・イ・ブスチリヨを、シャムの王宮に差遣した時、シャム国政府は、今後イスパニア船の碇泊貿易の便をおもんぱかって、メナム河の東岸にあり、かつて日本人町と称した土地六四坪を下付して、その商館を設立させることになった、と記録に残っている。（傍点筆者）

ただし、イスパニア商館用の土地はわずか六四坪なので、少人数はおそらく日本人町に住んではいたであろう。

もう一つ見過ごすことのできないことは、ギョマー夫人が日本人町から宮中に住むことになった、という事実である。イスパニアの商館を建てた年代と、ぴったり符合する。初代移住の日本人はその頃は誰一人生き残ってはおらず、その活動が同地に生まれたその子孫、あるいは日本人系混血児の手に移り、やがて彼等も幾星霜を過ぎるうちに全くシャム人に同化融合してしまったに相違ない。

山田長政は、彼が生きているうちに祖国日本が鎖国令を発したことを知らなかった。もし知ったとして、いかに望郷の念に憑かれたとしても、もはや帰るべき祖国はなく、異国にあって文字どおりの

〝祖国喪失者〟として、慟哭の涙を迸らせたであろうか。

長政がそれ以前に死んだので、筆者も、「祖国喪失、長政慟哭」なる一章を書かなくてすんだ。長政を毒殺し、あれだけの残虐を恣にして、若い王子の数々を殺して巧みに王位についた、プラサート・トーン王は、一六五六年八月八日、五十六歳の生涯を寺院の中で静かに死んでいったが、後世、彼への評として、――いずれ御用学者であろうが――「彼は政治家として実力者であり、偉大なる革命家であり、国の政治と幸福については、賢明にして深き思慮があり、シャム国の平和と繁栄をもたらした」とあるが、ますます、なんともやりきれない思いがするのは、筆者一人だけであろうか……。

アユタヤ王朝バンコクへ

タイ・サラ王の死後は王弟が王位についた。ボロマコット王といい、一七三三年から一七五八年まで王位についていた。三人の王妃のほかに側室が百八人もいて、子供は百二十三人あったといわれている。だが王はアユタヤ王朝中すぐれた王であり、平和を愛し、戦争を好まず、人々は平和で幸福な生活を営むことができたという。

王は宮中の人々を集めては、芸術的には音楽、舞踊、詩文等を勉強させ、スポーツとしては競馬、ボクシング（タイボクシング）等を楽しませた。

ボロマコット王は七十七歳で死んだ。またまた王位継承の争いが起きた。王弟エカッタットと王子ウトウムポーンとの間で争われたが、王子が王位についた。しかし間もなくエカッタットが王位を奪

い、この場合は王子は殺されずに寺院へ入った。

エカッタット王はアユタヤ王朝三十三代目の王（一七五八～一七六七）となったが、この王がアユタヤ王朝最後の王となる。

一七六三年、ビルマ軍はまたまたシャムへ侵入してきた。アユタヤ王朝は隣国ビルマとの戦争を何回も繰りかえしてきている。ビルマ軍はまずチェンマイ、ランパーンを占領し、ビサヌロークへ無血入城した。さらにラオスのルアンプラバンを征服し、北方からアユタヤ攻略の作戦をとった。

エカッタット王は、ビルマにたいして平和のうちに局面を打開しようとした。

元来、マレー半島のタボイ、メルギー港は長年の間、ペルシャとの重要な貿易港であった。そのためシャムとビルマの争いは、この港の争奪から起こっていたので、これをビルマに返そうとした。

というのは、一五九三年、シャムのナレスワン大王がビルマ軍を破って、メルギー港をシャムの領土とした。ところが西欧貿易が盛んになるにつれ、ポルトガル、オランダ、フランス、イギリスが次から次へとこの港を要求し、ビルマとシャムの争いに介入するようになった。

ビルマはエカッタット王の申し出を蹴り、一七六三年十一月、勇将マハルフラタ将軍を派遣して、メルギー港を占領した。将軍はさらにメルギーとテナセリユーム一帯の全地域も占領した。その先遣隊はペチャブリーにも到達した。

この地方には支那人が多く住んでいたが、支那人の隊長タクシンは、一時ビルマ軍の進軍を阻止した。その功によりタクシンはシャムの高官に任命された。

同地方を諦めたビルマ軍は、一七六五年六月、五万の大軍でチェンマイ、ビサヌロークを経て、ナ

コンサワンに南下して、アユタヤの北、アングソングに布陣して、アユタヤを陥落させようとした。シャム側はゲリラ戦を展開してビルマ軍を悩ませたが、大軍の前には歯がたたない。

一七六五年十月、ビルマの南軍はテナセリユーム地方を出発し、十一月末、ペチャブリー、ラチブリーを占領し、シャム湾上から北上し、一七六五年十二月、海上軍はバンコクを攻撃した。イギリス人パウニイ船長はエカッタット王を助けて奮戦し、ついに戦死した。

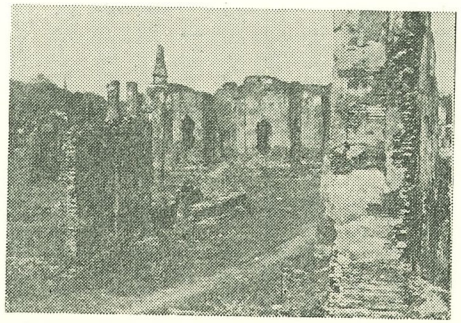
一七六六年二月、シャムとビルマの国境、スリーパコダ路を越えたビルマ軍の主力は、カンチャナブリからスパンブリに到着し、アユタヤを西方から圧迫してきた。

ビルマ軍の兵力は南北合わせて十万になった。それがアユタヤをぐるりと取り囲んだ。やがて雨期になった。日本の豊臣秀吉が、毛利の高松城を水攻めにした時の状況によく似ている。アユタヤのデルタ地帯は洪水になり、高いアユタヤの城壁は難攻不落を思わせたが、ビルマ軍は多数の船を用意し陣地や堡塁には土塁を積み重ねて攻撃した。

一七六六年九月、アユタヤ城外三キロの重要拠点の攻防戦がはじまった。ここには外国人居留地区があり、ポルトガル、キリスト教地区、オランダ東印度商館、支那人地区等があり、外人部隊の火砲は威力を発揮し、水軍は反撃に転じた。

まことに残念であるが、日本人町の人々がこの戦争に参加したという記録は残されていない。外人部隊は激しく戦ったが、十二月、ついにビルマ軍の手中に落ちた。

アユタヤ側の名将、プラヤーター・ペッチャブリと、プラヤータークシンは、六千人の手兵と百六十隻の小艇で反撃に出たが、ペッチャブリは戦死し、タークシンは五百人の部下とともに小艇に分乗



アユタヤの遺跡

してアユタヤから南タイへ下った。

雨期が終りビルマ軍の増援部隊が到着し、シャム側の堡塁は次次とビルマ軍に落とされ、ついにアユタヤ城は、ビルマ軍の大砲の射程内に入った。永い籠城のため、人民は飢えと疫病に悩まされて、死体は道路上に横たわり、野犬がこれをむさぼり食い、まさにそれは地獄絵図であった。

不幸はそればかりではなかった。一七六七年一月七日、アユタヤの市街に大火がおこり、一万戸が焼失した。

最後の時が来た。一七六七年四月七日夜から八日にかけて、ビルマ軍の総攻撃がはじまり、猛烈な砲撃のために城壁は打ち破られ、王宮、寺院、住宅は灰燼に帰した。それからビルマ軍は十四か月もアユタヤ城を占拠し、掠奪を行い、大小の美術品としての価値がきわめて高いパコダや仏像は、全部がビルマへ運び去られ、ここにアユタヤは廃墟と化した。

エカッアット王は小舟に乗って宮中から脱出したが、捕えられて殺された。王族、貴族、市民等、約二十万は捕えられてビルマへ連れ去られ、奴隷として終生働かされた。

さしも四十七年、栄華を誇ったアユタヤ三十三代の王朝は壊滅してしまった。

一方、アユタヤを脱出したプラヤータークシンは、一七六七年六月、南タイで兵力を集め、トンブリに上陸し、ビルマ軍によって任命されたナイトンを殺し、バンコクからビルマ軍を追い出し、バンコクの双子都市トンブリに首都を建設し王位についた。

ビルマ宮廷内に内乱が起きて、ビルマ軍はアユタヤから撤退したので、トンブリ王はアユタヤを奪還した。しかしトンブリ王朝は一代で終り、王の将軍チャオプラヤーチャクリが、一七八二年に現在のチャクリ王朝を起こし、首都をバンコクに建設した。

彼はプラプッタヨーツファーチュラローク王となり（ラマー一世）、現在のプミポン・アデュラヤデーツ大王は、チャクリ王朝の第九代目に当る。

チャクリ王朝で特筆すべきことは、ラマー四世である。この王は婦人解放、ドレイ解放運動を行い、婦人の地位を高揚するため、三人の婦人宣教師を招いて宮中の子女の教育に当たらせ、イギリス人ミセス、アンナ・レオノウェンズ夫人を、一八六三年から一八六七年まで宮中に招いて王子の家庭教師とした。このことが『王様と私』なる題名の小説や映画になった。

第二部　山田長政の史料

江戸時代の著書

山田長政は、昭和十七年三月、文部省から発行した教科書、初等科修身巻二に、海外雄飛の先覚者、図南の英雄として掲載された。

初等科巻二というのは、今の小学校（当時は国民学校）二年生の教科書に当る。

明治時代には小学校の唱歌（音楽）にも歌われたし、国民学校でも歌われた。

もっとも、昭和十六年に大東亜戦争がはじまって、日本は南方諸島――現在のシンガポール、インドネシア、ベトナム、ホンコン等――を占領したので、国民の士気を鼓舞するために教科書にものせたし、唱歌にも歌わせたのであろう。

さて、古来、英雄、豪傑の出生や生い立ちについては、ともすれば曖昧なことが多い。

長政についても諸説紛々である。

長政のことが日本で最初に書かれたのは、いつ、誰がどんな意図で書いたものであろうか。まずそのあたりから探究しよう。

日本での長政に関する最初の本は、『暹羅国山田氏興亡記』である。

この本は天和元年（一六八〇）に智原五郎八という人物が、シャムから帰国後、長崎で人に語ったことを書き留めたものである。

智原五郎八は長政の時代、ある期間ではあるが、アユタヤにいたことは事実である。彼が陣中にいていちいち書き留めておいたというのは脚色である。

斎藤拙堂の『暹羅物語』のなかには、智原五郎八のことを、次のように書いてある。

「木下八右衛門録す。木下氏、智原宋因に従い、山田長政の遺事を問う。之を記述す。宋因五郎八と称す。長政及び其子阿因に従い、暹羅に於て兵間を周旋す。老いて長崎に帰り寿を以て終る」

ちなみに、斎藤拙堂は江戸末期の儒学者で津の藩士。昌平黌に入り朱子学を学ぶ。藩の督学となり詩に秀でる。実用の学も尊び種痘を藩内で実施させた人物である。

五郎八は号を宋因と称していたので、一名『宗因筆記』とも言う。拙堂の文中、長政の子を阿因とあるが、たびたび言うが、オクンの誤りである。

まず中篇の物語で、一種の歴史娯楽読物とでも称すべきもので、事実とは大いに違う。この書では長政の出生を尾張としてある。

つづいて一七〇三年、元禄時代最後に書かれたのが、『山田仁左衛門渡唐録』である。この著者は柴山某といい、駿府城外東押切村の隠士（世をのがれて隠れ住む人）で、柳陰士と号した。

この書を著した元来の目的が、駿河の浅間神社の神徳が海外にまで輝いたことを書くことにあったので、その出生については重きをなしていないが、書き出しにはこう書いてある。

「此仁左衛門長政と云者は自ら言う。織田信長の苗孫なり。山田は織田の別名なり。流浪して駿府に下り市人に交わり知己を求めて、宮ヶ崎の商家に住すること十余年、市中の産業を求めず常に大志ありて仕官を好まず」

ここでは堂々と信長の孫にしてある。これは駿府にいる時も、シャムへ渡ってからも、長政自らが

そう言っていたのを聞き書きしたものであろう。しかしこの物語はごく短い。

つづいて宝永四年（一七〇七）に、天竺徳兵衛が、『天竺徳兵衛物語』を著わした。

天竺徳兵衛は播州高砂の人。寛永三年（一六二六）十月、十五歳の時に貿易商角倉与一の船頭、前橋清兵衛に雇われて船の書き役（書記）になった。

ここで船頭というのは、「船頭小唄」の船頭とは違って、大きな船の文字どおりの頭、すなわち船長のことである。その徳兵衛の乗った船がシャムへ渡り、二年後にいったん帰国して寛永七年十一月に再渡航、同九年八月に帰国して、大坂塩町に居住し、九十六歳で没している。その間に剃髪して、宗心と号した。であるから、『天竺徳兵衛物語』を一名、『宗心物語』ともいう。

海外に行っていた間に見聞したことを、思い出すままに書いたのがこの物語であるが、十五歳で渡航した頃、シャムでは長政の最盛期であり、長政の事跡を直接見聞した徳兵衛であるので、一応信用がおけると思われるが、この物語には「写本」が数種類あり、誤記や徳兵衛自身の年少による視野の狭さや、思い違いなどもあり、そのまま鵜呑みにはできない。その物語では長政のことを、

「しゃむ国の王を、オヤカラホンと言う。此国王は勢州山田の御師の代官山田仁左衛門という者なり。御祓を諸国へ配るおり、遣込出来、欠落して長崎へ参り、逗留の折節、しゃむ国の船帰りける時、天竺へ渡り云々」

と書いている。本書の全篇に出てくる「シャム」のことであるが、終戦までは日本人もシャムと呼んでいた。シャムを「タイ」と改めたのは戦後のことである。昔から外国人はシャムと呼んでいたが、タイ族は独立心の強い自由の愛国者と自認していたので、自分たちはシャムと呼ばずに、ムアン・タイ（自由の国）と称していた。

徳兵衛の長政に関する書き出しは、なんともすごい。伊勢の生まれで御師をしていたと書いているが、それは養父の九左衛門と間違えたものである。浅間神社前の養父の紺屋の屋号が「津国屋」と称していたように、養父の九左衛門は確かに津の生まれであり、伊勢神宮の御師をしていた。

長政の官名をオヤカラホンとしてあるが、オヤはオーヤの誤りでカラホムは陸軍大臣のことであるから、あのカラホムと混同したのであろう。シャムの王としてあるのは、六昆王の間違いである。

長政が伊勢神宮の御師をしていて、全国へお札を売って歩き、その代金を持って出奔したというにいたっては、まさに噴飯ものである。ただ長政に少しく似た人物が、確かに伊勢の出身であった。伊勢松坂角屋の家記に、

「角屋七郎兵衛は名を栄吉と言い、本姓は松本、其先は信州筑摩郡松本郷に居り、四代の祖兵部は神官なり。（同郷八幡宮）

二子あり。二男七郎二郎元吉は、仔細ありて伊勢山田の御師の家に寄食し、後松坂に居住せり。この元吉の子は即ち元秀とて栄吉の父なり。始めて海船問屋を営業とし、慶長六年海外交易の御免許ありし時（御朱印船）、栄吉は安南、交趾の二国に航行し、大いに貿易の利を得、妻を娶り子を生み、呉順官と名づけ、後には一伽藍を建立して、松本寺と号せり。寛永十二年正月九日、安南にて病死せり」

とある。このなかで栄吉の死を寛永十二年としているが、これは寛文十二年の誤りである。この話は貿易に従事している人々の間では、相当有名な話であった。

徳兵衛は九十五歳頃から翌年死ぬまでの間に、この物語を書いたので、記憶違いや栄吉と混同したこともあって、このような物語となった、とも推定される。

次いで享保二十年（一七三五）十月、松井経長なる人物が、『松井筆記』なる一書を著わした。

松井経長は石州浜田の城主松平周防守の御留守居役で、駿河人ではないのが注目される。その松井筆記の中の「浅間神社絵馬の記」の終りに、「王曰、我ハ日本人也、汝が郷、馬場町に在りて山田仁左衛門ト言エリ」と書いてあることを理由に、駿府生まれであると強調している。駿河の生まれではあるが、その母は藁科村（現静岡市）の出身であると書いたのが、『近代正説砕玉話』である。

砕玉話は一名、『名武将感状記』とも言い、著者は「淡庵子」である。本名を佐枝政之進伊重と言い、長沼流の兵法の伝統を継ぎ、博学多識で多数の書物を著わしている。元禄時代から元文年間に、伊勢の藤堂氏に仕え、致仕（辞職）ののち、砕玉軒と号し、戦記、軍書等の著述をはじめた。砕玉話もそのなかの一巻である。

伊勢で藤堂家に仕えていたので、長政のことを書くのに、『宗心物語』のように、伊勢の生まれと書いてあれば、自分でも調査してその説を採用するはずである。

また『渡唐録』のように尾張生まれだというのであれば、彼の愛弟子に近松彦之進という者がいて、この者が尾張侯の御小姓となり、昔咄等の書を著わしているので、必ず近松に質したであろうし、近松もその著書で長政のことに言及したであろう。それがなにも触れていないということは、伊勢生まれでも尾張生まれでもない、ということになる。もし英雄、豪傑が自分の生まれ故郷の出身であるならば、その源に溯り、そのもとを究めるのは自然の人情であろう。

砕玉軒が英雄、豪傑の事蹟を書いたのは、おそらくは天下の士気を鼓舞して、あとにつづく人物を養成するという眼目もあったことと思われる。『砕玉話』のなかには、長政のことを、「駿府ワラシナト云、所ノ民仁左衛門ト言フ者アリ」と書いてある。

『砕玉話』を喜んで引用しているのは、駿府浅間神社の神官、新宮高平の『駿河志料』である。この本は嘉永六年（一八五三）に著わした。そのなかに、「仁左衛門長政は本府の産、父は九左衛門、母は藁科の産なり」とあり、その居宅のことに触れて、

「報土寺の南にあり、近世津国屋半七その末なり。初代九平次、慶長十四年五月九日死、二代九左衛門、寛永二十年六月九日死、二代目妻藁科寺尾惣太夫娘」

とある。

江戸後期の国学者に、平田篤胤がいる。日本における国学四大人の一人である。復古神道を体系化し地方の神職、村役人に多くの信奉者を得、草莽（民間）の国学として、尊王運動に大きな影響力があった。この平田が長政のことを書いたのが、『伊布岐於呂志』である。

この書は長政没後百八十年の文化十年（一八一三）の著作である。この書の目的は、神道が最も尊崇すべきものであり、わが国体が外国に冠絶しているので、よろしく日本人たる者、発奮して外国の侮を受けてはいけない。それには山田長政を見習え、というにあった。であるから、その出生がどこであろうと問題ではない。日本人でありさえすればよいのである。平田は『渡唐録』を基礎として書いたので、それ以後に出た「長政物」は、全部といってよいほどこれを鵜呑みにしている。すなわち、長政がシャムの王になったとか、尾張の生まれであったとかの項までもである。ただし、駿河人

の学者や識者は一様に駿河生まれの説をとっている。

明治・大正の著書

江戸時代を過ぎて、明治になってからの長政研究の第一人者は、関口隆正であった。

隆正は明治になっての初代静岡県知事、関口隆吉の女婿である。明治の新政府となって、政府は各県に県令を置いた。

隆吉も明治十七年に静岡県令となったが、明治十九年になって府県制の改正にともない、県令から県知事になった。

関口家は徳川家康が今川義元の人質時代、政略結婚させられた持舟（現静岡市用宗）城主関口義広の娘、築山御前の一族の後裔である。すなわち、義元の妹が義広に嫁して築山御前を生んだので、築山は義元の姪ということになる。

隆吉は幕臣で山岡鉄舟の同士であった。高潔な人格の所有で名知事とうたわれたが、惜しくも明治二十二年五月、まだ全線開通していなかった東海道線の鉄道事故によって没した。

隆正は隆吉の長女みさ（操子）と結婚し、関口姓を名乗った。隆吉の長男が新村氏を継いだ。この人物が国学者の新村出である。新村出と隆正は義理の兄弟ということになる。隆正は明治・大正時代の漢学者として有名である。隆吉に望まれて女婿となり、日本で安井息軒や大橋陶庵について経学を学んだが、隆吉の勧めで明治十七年支那へ行き、上海で勉学した。旅順の高等学堂の教授となり、中国

時文に巧みで、本場中国の学者もその隷書とともに一目置いたといわれている。

その隆正が日本へ帰って来て静岡に居をかまえ、明治二十五年に、『山田長政事蹟考』『山田長政本伝』（漢文）の二書を著わした。

漢文の方はごく短い。その前書きでこう言っている。それを抜粋すれば、

「然るに近来に至り、長政の伝記を印行し、又は小説体に述作するもの坊間に顕出し、却て本家本元と称すべき静岡に於ては、ただに里老（古老）の口碑に伝うるのみにして、唯一人精確なる書物を発兌し、市民をして観感呉起せしむるの挙なく、又天下の公衆に対し偉業功績を明示する者なきは、実に遺憾に堪えず。（中略）

先ず長政の事蹟は固より此に尽たりと謂うべきも、何分未だ駿河の産なるや否やを証明するの効力無きに似たり。依て余はひそかに浅学寡聞を忘れ、平生蒐輯（集める）所を援引参酌して、将に一篇の事蹟考を編述せんとす。

唯だ余が見聞の博からざるを恐れて、今やこれを印刷に付し、江湖博雅の君子に質さんとす。伏して同好同感の諸彦に余の及ばざる所を輔け、余の知らざる所を報ぜんことを願うのみ。これ単に余一人の幸のみならず、けだし前輩数氏もまた望む所なるべし」

とある。

隆正の意気込みはまことに立派であった。そして参考文献として第一に挙げているのが、天竺徳兵衛の『宗心物語』である。第二としては『渡唐録』を、第三には『正説砕玉話』であるとしている。

結局は今までの著作を仔細に検討して、自分の論説を加え、長政が駿河生まれである論拠としては、

浅間神社に奉納した「軍艦図」に「当国生」と書いてあることを絶対的なものとしている。

オランダやイギリスの文書等が日本に知られておらず、いかに努力したとしても、その当時としては、致し方がなかったであろう。とくにこの著について、惜しむ点は、「国王」についてである。前にも述べたように、長政についての日本における巷説は、「山田長政はついにシャム国王となり、王の娘と結婚した」となっていて、一般にはそう信じられていた。

しかし筆者が今までに書いたように、実際は、政略的にごく短い期間、六昆（現ナコン・シー・タマラート）地方の王に任じられたもので、決してシャム一国の王になったのではない。隆正はこのことに関して、

「長政が暹羅国王となりし年代並に暹羅国王には成らずして、一国の王なりというに対して一言弁明せざるべからざるなり」

として、『宗心物語』の「一大将にておんふらと申候て、左大臣の位に候（傍点筆者。オンプラのこと）手柄共致され候故、国王の聟になり、其上後は暹羅国の譲を受け国王になり被申候」の一文を引用し、さらに『渡唐録』の「王我に后女をめあわせ王位を譲り今隣国を合わせて我領掌とす」を列記して、シャム王になったと強調している。

ここで思うことは、正確な資料のない歴史上の人物の考証が、いかに困難な作業であるか、ということである。大正十三年には西村真次氏が、『国史上疑問の人物』として長政をとり上げている。他の二、三の人も山田長政は、シャムにおいても一行も書かれていない、山田のヤの字もない。おそらくは伝説上の人物ではなかろうか、などの説をなす人々もいた。

これはたびたび述べたように、シャムでは姓名は用いずに、すべて官名で書かれたり呼ばれたりすることと、次のような事情による。

シャムの首都アユタヤは、長政没後百三十五年の明和五年（一七六七）に、一か年半もビルマ軍の重囲に陥り、ついに陥落してアユタヤは焼かれてしまったのである。王室の図書館も灰燼に帰してしまって、何一つ残らなかったので、タイ国史を作成するのにも、わずかに田舎の寺院や隣国、オランダ、イギリス等から記録を集め国史を作ったような有様であった。

とくに長政に関しては、陸軍大臣のカラホムが、ソンタム王亡きのち、王位につこうとの野望に燃え、王弟や王子を次々に殺し、王子を護ろうとする長政と対立し、その奸計にのせられて長政は六昆へ派遣され、バタニー軍と戦って大勝利を得た。

長政の勢力が増強されることを怖れたカラホムは、王位に即くとともに、密使を送って長政を毒殺した。日本人部隊の報復を恐れたカラホムは、一夜四千人の軍隊で日本人町を襲撃し、長政や日本人に関する記録は、湮滅してしまったので、なおさら記録には残されなかった。

さらにもう一つの事情は、その当時のシャムには、紙に印刷するという技術はなかった。バイタラ葉（多羅樹の葉）に鉄筆で文字を彫刻して保存していたので、たくさんはできぬし、火で灰になってしまう公算も大であった。

ただタイ国に、長政に関する貴重な記録の一ページが残されている。それを発見されたのが、三木栄氏である。

三木氏は東京美術学校（現東京芸大）を卒業されてタイへ渡り、タイ王室技芸員として漆芸をもって

在タイ四十年、バンコク王府の内外に空を摩して林立する大寺塔、王宮正殿内に燦然として目を奪う玉座等を経営加工し、タイ国に多大な貢献をされた方である。タイ語にも堪能で、山田長政に関する研究の第一人者であった。

寛永三年（一六二六）、シャムから酒井忠世と土井利勝（老中）に国書が来たが、その中に、「鸞、采耶惇」という語があったが、当時の幕府の大学者、林大学頭が監修した『通航一覧』のなかで、「これは官名、実名を合わせたものなり」と書いている。

その後、そのことはそのままになっていたが、それを「プラー・セーナ・ピムツク」と正しく読み、これは山田長政の官名である、と説かれたのも三木氏であった。

三木氏は日本へ帰国されると、たびたび静岡で長政に関しての講演もされ、また「山田長政義勇軍行列の図」も県立図書館に寄贈するきっかけをつくられた。このことは後に詳述する。

今次大戦後、タイから引き揚げてこられた。筆者は二度ほどお目にかかって、種々ご教示をいただいたが、晩年は失明同様になられていたが、先年京都で物故された。

その三木氏が発見された、長政に関するシャムにおける唯一の歴史上の記録というのは、タイの国立図書館にある、ラブリー親王が著わした『コットマイ・ラブリー』と称する宮廷の古記録を集めた法制史のなかの一ページである。それには、

日本義勇軍の禄高

隊長　浮哪（プラ・セナーピムック）

田地　一千ライ

副隊長　坤（クンスラ・ソング・クラーム）

田地　六百ライ

主計長　悶（ムン・チャイ・スラ）

田地　五百ライ

と書かれている。この時の隊長は勿論長政であり、長政は上から二番目の握・浮哪（オーク・プラ）で隊長も兼ねていた。一ライは日本の約四百坪である。

昭和の著書

江戸時代に出された長政に関する幾多の著作は、いわゆる口碑（碑に刻みつけたように口から口へ永く世に言い伝わる意、昔からの言い伝え）の類である。

前記の三木氏によれば、一種の歴史小説か、稗史（野史、民間のこまごましたものをのせた物語）小説と決めつけて、信憑するに足らない、とまで極言されている。

であるからその出生も、駿河説、尾張説、伊勢山田説に分かれていることは、前述したとおりであるが、今では幼少から駿府で育てられ、二十歳の時に駿府からタイに渡ったことと、筆者は断定した。

しかし、三木氏の言われることは、そのとおりにはちがいないが、筆者はいささかその著者の先輩諸賢に同情しているのである。

今日のように交通機関が発達していなかったので、おいそれと現地へ行くわけにもいかず、また専門の著述業でもなかった。また現今のように、幾百の参考資料もなかった。全くの聞き書きである。ただ江戸時代に書かれた、家康、家光の黒衣の宰相といわれた京都南禅寺の金地院崇伝の『異国日記』は信ずるに足るものである。

さて、昭和になると、山田長政の存在と活躍が、俄然、真実味を帯びて脚光を浴びてきた。前記三木栄氏と、台北帝国大学学長の村上直次郎氏と岩生成一教授（終戦後は東京大学教授）の活躍である。

前にもふれたように、一六三六年（寛永十三年）から一六四二年（寛永十九年）まで、シャムの首都アユタヤのオランダ東印度会社の商館長、エレミアス・ファン・フリートが、一六四〇年（寛永十七年）に脱稿して、時のオランダ東印度総督、アントニオ・ファン・ジーメンに捧げた『十七世紀シャム革命史話』なる一書は、山田長政に対して、起死回生の息吹を与えた。

オランダ人町は日本人町のすぐ隣にあった。日本人町の代々の頭領がシャム王に忠勤を励み、貿易面でもシャム王室に多大の利益を献上していたので、一時はオランダ商館は日本人との貿易競争に負けて、事務員一名をおく程度に衰退したことがあった。にもかかわらず、ファン・フリートは、ソンタム王のオーヤ・セーナ・ピムツク（近衛か前衛軍司令官）としての、山田長政の大活躍を手に取るように詳細に同書に書いているのである。

この本は一六六三年に仏訳されてパリで発行されたが、後年英訳されてシャムの国立図書館にも蔵書として保存された。

三木栄氏は虫食いになっていたこの英訳の小冊子を国立図書館で見つけだし、昭和五年、日本語に

訳して、東京帝国大学文学部の『史学雑誌』第四十一編・第七号、第八号に発表した。

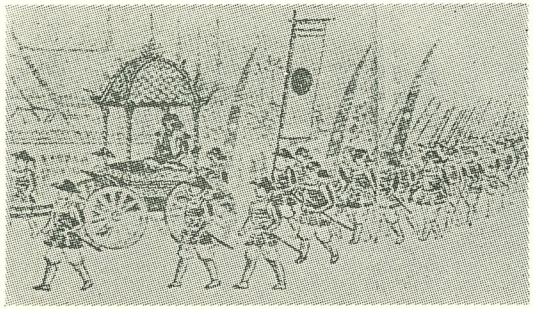
読者層が限られていたので、一般の人々の関心を呼ぶのはもう一歩であった。それより先の昭和元年には、岩生成一教授が、南亜文化研究所から『南洋日本人町ノ研究』を出版された。

この本はシャムにおける日本人町の発生から説き起こし、日本人町の行政機構について、その蘊蓄を傾けられ、つづいてシャム各地における日本人町在住民の軍事的活動、経済活動、アユタヤ日本人町の歴代頭領等についても書かれた労作である。

ただ、アユタヤの日本人町の終焉については、いささかぼかされておられるが、これは資料が皆無といった状態であったので、やむをえないことであった。しかし岩生教授と村上博士は、長政研究者にとっては、画期的な業績をあげられた。

村上、岩生両氏が台北帝大からオランダに研究に行かれたことは、先にも述べたが、岩生教授はハーグ文書館で、ファン・フリートの『十七世紀シャム革命史話』の原本を見つけられ、一年半も滞在されて、他の研究のかたわら、原本を一枚一枚、写真撮影され日本へ持ち帰って翻訳されたのであった。

村上博士は昭和十六年に、朝日新聞社から『六昆王　山田長政』を出版されたが、その中に、岩生教授の訳されたファン・フリートの『シャム革命史話』の全文が掲載されている。



昭和17年国民学校の修身教科書の「山田長政」のさしえ

この著作に刺激されてか、文部省は昭和十七年に、国民学校の修身教科書に『山田長政』を掲載した。興味があるので、その全文を引用しよう。

「今から三百二十年ばかり前に、山田長政は、シャムの国へ行きました。シャムというのは、今のタイ国のことです。

そのころ、日本人は、船に乗って、さかんに南方の島々国々に往来し、たくさんの日本人が移り住んで、いたるところに日本人町といふものができました。シャムの日本人町には、五千人ぐらゐ住んでゐたといふことです。

二十何歳でシャムへ渡った長政は、やがて日本人町の頭になりました。勇気にみち、しかも正直で、義気のある人でした。

シャムの国王は、ソンタムといって、たいそう名君でありました。

長政は、日本人の義勇軍をつくり、その隊長になって、この国のために、たびたびてがらを立てました。

国王は、長政を武官に任じ、のちには、最上の武官の位置に進めました。

日本人の中で、武術にすぐれ、勇気のあるもの六百人ばかりが、長政の部下としてついてゐました。長政は、これらの日本の武士と、たくさんのシャムの軍兵をひきゐて、いつも、堂々と戦に出かけました。長政が、ひをどしのよろひを着け、りっぱな車に乗り、シャムの音楽を奏しながら、都にがいせんする時などは、見物人で、町という町がいっぱいだったといふことです。

長政は、かうして、この国のために、しばしば武功をたて、高位高官にのぼりましたが、その間

も、日本町のために活動し、日本へ往来する船の世話をし、海外ぼうえきをさかんにすることにつとめました。身分が高くなってからは、ほとんど毎年のやうに、自分で仕立てた船を日本へ送ってゐました。

長政がシャムへ渡ってから、二十年ばかりの年月が過ぎました。名君のほまれ高かったソンタム王もなくなり、年若い王子が、相ついで国王になりました。かうしたすきに乗じたのか、そのころ、シャムの属地であったナコンといふ地方が、よく治りませんでした。そこで、国王は、あらたに長政をナコン王に任命しました。

そのため、王室では、さかんな式があげられました。まだ十歳であった国王は、特に国王のもちひるのと同じ形のかんむりを長政に授け、金銀やたからものを、山のやうに積んで与へました。

長政は、いつものやうに、日本の武士とたくさんのシャムの軍兵をつれて、任地へおもむきました。すると、ナコンは、長政の威風に恐れて、たちまち王命をきくやうになりました。

をしいことに、長政は、ナコン王になってから、わづか一年ばかりでなくなりました。

長政は、日本のどこで生まれたか、いつシャムへ行ったかもはっきりしません。それが一度シャムへ渡ると、日本町の頭となり、海外ぼうえきの大立物となったばかりか、かの国の高位高官に任ぜられて、日本の武名を、南方の天地にとどろかしました。外国へ行った日本人で、長政ほど高い地位にのぼり、日本人のために気をはいた人は、ほかにないといってもよいでせう」（原文のまま。傍点筆者）

小説としては大仏次郎が昭和七年、『少年倶楽部』に「日本人オイン」を、長田秀雄が昭和十二年に『大陸』に「史談小説　山田長政」を、竹越与三郎が同じく昭和十二年に白楊社の『倭寇記』のなかで「シャムに於ける山田長政」を、邦枝完二が昭和十五年に興亜書房から『海の英雄　山田長政』を、岩崎栄が昭和十六年に小学館から『山田長政』を、同じ年に菊池寛が新潮社から『海外に雄飛した人々』のなかで山田長政をとりあげ、これも同じ年に三省堂から池田宣政が『南進日本の先駆者山田長政』を、また角田喜久雄が講談社から『小説　山田長政』を、沢田謙が『帝国新聞』に「山田長政ト鉄総督クーン」を、それぞれ出版または掲載した。

昭和十六年には、大東亜戦争が勃発している。日本が海外に眼を向ける必要に迫られた時に、山田長政が各氏によって競って書かれたのであった。つづいて昭和十七年になると、佐藤春夫作、石井鶴三画で、朝日新聞社の『週刊少国民』に「山田長政の一生　図南の鵬」が発表された。また同じ年に佐藤春夫が『改造』に「山田長政の横顔」を、白井喬二が『東亜英傑伝七』に「山田長政」を、さらに角田喜久雄が回光社から『山田長政』を出版した。

静岡市においても郷土史家の村本山雨楼、飯塚伝太郎、柘植清、法月俊郎等の郷土史家が、それぞれ長政物を書いている。

が、なんといっても、タイ国を訪れる日本人にとって、必読しなければならない名著は、西野順治郎の『日タイ四百年史』と、細田正の『アユタヤを訪れる人のために』の二書である。

西野氏は何十年もタイ、バンコクに在留されていて、日本人の在タイ実業界のリーダーでもあり、長い間日本人会会長もつとめておられ、タイ語にもきわめて堪能な方である。その西野氏の『日タイ

四百年史』は昭和四十七年五月、時事通信社から出版された。

また細田正氏は、日本航空の調査開発室に長く勤務されていて、バンコク在留も長く、バンコクにおられた時に、『バンコク商工会議所月報』に一九六八年から一九七一年初めまで連載されたものを、会議所の要望によって、昭和四十六年十月に出版されたのが『アユタヤを訪れる人のために』である。

タイ国に居住する日本人に、タイ人気質を理解してもらうために書かれた、と言っておられる。名著として、西野氏の書とともに世評は高い。

本書の日本人ギョマー夫人については、細田氏の書に負うところが多い。このほかには山岡荘八『小説　山田長政』、遠藤周作も、昭和四十八年に「書き下ろし新潮劇場」として『メナン河の日本人』を新潮社から出版している。

第三部　山田長政と現代

長政銅像建立計画

徳川時代から幕末まで、駿河人や駿河にゆかりのある人々は、なんとか山田長政を顕彰しようと考えてきた。明治十一年の十一月、明治天皇が静岡県地方を御巡幸遊ばされた。その時、静岡県では山田長政に関する文献を天覧に供した。その書名は次のとおりであった。

『駿河新風土記』　新庄道雄著
『駿河府志』　羽倉簡堂著
『渡唐録』　柴山柳陰子著
『伊布岐於呂志』　平田篤胤著

また明治十四年四月に、今でいう文部省の修史局で長政の『暹羅山田氏興亡記』を謄写したので、それからは一般にも流布されるようになった。

ここで銅像の話に移る前に、肖像と胸像のことを述べておこう。長政の肖像画が静岡浅間神社の宝物庫に献納されたのは明治十一年八月であった。静岡市札ノ辻町に居住していた太田与兵衛氏が、その所蔵していたものを同社に奉納したのであった。

太田氏は長政がシャムへ渡航する時に、滝氏と共有の御朱印船に大坂から台湾まで乗せていった太田氏の後裔である。

これは文句なしに、駿河人には長政の風貌を伝えるものとして認められた。この長政の画像について

で、明治十三年刊行の『東京地学協会報第二巻中古外交志』に、長政の肖像が発表された。

これは西洋画法をもって描かれたもので、その原図は『居敬堂随筆』にあるものを、西洋画法で模写したものである、といわれている。

日本にある長政の肖像は、この両画のいずれにか準拠したもので、教科書や出版物に戴る長政の画像は、この二つのうちのどちらかである。

居敬堂というのは、京都生まれで江戸に居住した儒学者の小畑行簡のことで、明治八年七月に没している。『居敬堂随筆』に載っている長政の肖像画は、屋代弘賢の持っていたものであるという。

屋代弘賢は『古今要覧』一千巻の著者で、所有の典籍は一万巻を越えたという学者であるが、好事家でもあり、戯作者の滝沢馬琴などとともに「耽奇会」などをつくり、珍品奇物の展観、考証などをした人物である。

これが問題なのである。

前記の三木栄氏は、その『山田長政の真の事蹟』のなかで、

「長政の肖像として道具屋あたりから見つけてきた、オランダ人か何かの肖像を載せてある。小学校の教科書にまで戴せてあったのは、笑止千万であった」

と極言されている。

山田長政肖像

好事家や好者（すきもの）が各地で蒐集して、いわゆる掘り出し物を手に入れてきて、仲間同士で考証などをし合い、これはこれこれである、ときめつけると、後世にそれが決定的な事実になってしまう。

在タイ四十年の三木氏の眼識からすれば、冬でも三十数度になるシャムで、首に布を巻き、チョッキを着てその上に厚手の洋服を羽織っている点は、なんとも腑に落ちないと感じられたのは当然のことであろう。

その当時のシャムの宮廷人や、軍司令官の服装は、画然と定められていたと思われる。

またある研究家は、この肖像画は九州のキリシタン大名大友宗麟の肖像ではないか、ともいう。長政も日本人町において、軍艦も所有していたし、貿易船も持っていた。戦争がない時は、自らキャプテンとして船に乗り込み、各地を往来した。夏ばかりではなく冬もあったであろう。

軍司令官と船のキャプテンは自ずから服装が違う。ましてやキャプテンは国際人でもある。

日本の御朱印船が、タイワン、マカオ、その他東南アジアの各地で、冬、キャプテン姿の長政を見て、瞼に強く灼きつけられ、スケッチしたか、あるいは日本へ帰りその英姿を人々に語り、何者かがその風貌を聞き書きしたとしたら、と筆者は思うのである。

とまれ、現在ではその肖像画が、いわゆる長政の人物像として、広く知られているのである。

長政にたいする関心や研究の機運が、こんなに高まったことはないタイ側で、何か新しい発見でもしてくれたら、と筆者はひそかに願うのである。

なお、山田家から奉納された長政の肖像画を、関口隆正氏の紹介で、画家村田丹陵子が模写し、関口氏の『山田長政伝』の口絵を飾った。

また明治二十一年十一月、当時静岡市馬場町に居住していた、静岡師範学校の教師天野鎌太郎が、油絵風に模写した。

紀元二千六百年奉祝美術展覧会には、彫塑界の大家小倉右一郎氏が、長政の胸像を出品された。これはこれで立派な作品である。これは静岡県へ寄贈され、県の貿易館に飾られていた。

さて、銅像であるが、なんとかして郷土の偉人を顕彰するために、銅像を建立したいとは、駿河人の願望であった。その企図はおりにふれて表面化するが、なかなか実現の運びにいたらなかった。

ここに思いもかけない人物が登場してきた。講談や浪曲で名高い清水次郎長である。この男の半生は、旅から旅の、斬った張ったのいかさま博奕打ちの暮らしであった。道楽に身をもちくずし、喧嘩の果て、博奕打ちになること以外は、考えることのできなかったこの男であるが、子分はごく少数しかなく、まして縄張りのかけらもなかった。

国を売って以来、半可師（中途はんぱ）の博奕打ちに終始したことも当然といえよう。それが大政奉還から死ぬまでの後半生、さらに死んでからも、この男の人生の骰子（さいころ）の目は、丁と出続けた。

次郎長は一生を通じて博奕では、丁目に張り続けた。やくざになってからの初代の女房は、お蝶という名であったが、二代、三代目の女房にも「てふ」お蝶と名乗らせた。次郎長がつかんだ丁の最高の賽の目は、「山岡鉄舟」という人物である。山岡鉄舟との邂逅によって、彼は思いもかけない幸運をつかんだ。次郎長が明治以後今日の虚名を博しつづけたのも、一にも二にもこの山岡鉄舟の知遇を得たことによる。次郎長は鉄舟の庇護のもとに、彼にすがり、彼に媚び、彼に甘えつづける。

次郎長は鉄舟の紹介で天田愚庵を知り、歴代の静岡県知事を知り、一介の博奕打ちが、それらの知

事の援護を受けることになる。

また愚庵は『次郎長物語　東海遊俠伝』を書いて、次郎長の虚名をますます高める。この次郎長がなぜ、山田長政の銅像を建立しようとしたのであろうか。山岡鉄舟はすでに亡く、次郎長この時七十三歳。鉄舟や県知事関口隆吉の援助により、清水波止場に汽船宿「末広」を、三代目女房のお蝶が経営し、自分は楽隠居の身であった。

次郎長は長政が学んだ今川家の臨済寺に、山門がなかったので、旦那衆に呼びかけて、寄付金をつのり、山門を建立したりしている。

明治も二十五年になっていた。長政の銅像を建立しようとしても、なかなか思うにまかせないということを、小耳にはさんだ次郎長は「シャムという国の王さんになった山田長政というご仁は、静岡の人だってぞ。なんとかおらっちの手で銅像を建てずよ」と、今では清水一家をたばねている当目の岩吉に清水弁で相談した。

大政亡きあとの次郎長の相談相手は、増川の仙右衛門だったが、仙右衛門はこの頃病気がちだったので、岩吉がもっぱら傍についていた。当目の岩吉は誠実で才ばしった男であった。

次郎長は早速、当目の岩吉を連れて上京した。もうその頃には東海道線も開通していて、その点は楽である。上京の目的は時の外務大臣榎本武揚に会って、山田長政の銅像建立の趣旨を説明してその援助をあおぐことにあった。

榎本とは咸臨丸が清水港で遭難以来、壮士墓や興津清見寺の咸臨丸戦死者記念碑などで、交遊こそないが、意志は通い合う仲である。それに鉄舟、関口亡きあとは、たよる顕官は榎本しかいない。榎本も明治二十年には子爵になっている。

交渉は主として当目の岩吉が当った。榎本は即座に了承して多数の扇に揮毫し、さらに金一封を寄贈した。ついで次郎長は東京相撲の高砂、雷の両取締と掛け合って、静岡の旧城内本丸跡地で「山田長政銅像建立義捐大相撲」の興行を行おうとした。交渉は成立して、七月二十五日に興行することになった。この興行収入を基金として、榎本の寄付金、扇の売上げ、一般からの寄付金などで、長政の銅像を建立しようというのである。

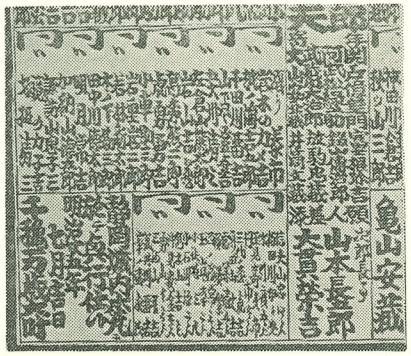
次郎長にとって、山田長政銅像建立の大相撲興行は晴れがましいことであった。

切符もたくさん売らなければならないので、遠近の親分衆にも協賛を頼んだ。親分衆もこれを応援して、一種の花興行のようになった。

当日の相撲の番付が現在も残っているが、番付のいちばん下の中央に、「願人　次郎長こと山本長五郎」と書かれている。

興行は上成績をあげたが、東京から大相撲の一行を呼んだので、その旅費、宿泊料などの経費がかさみ、この興行だけでは銅像を建てる資金には足りなかった。さらに方々から寄付金を集めようとしたが、翌年、次郎長が死んでしまったので、文字どおりあの世への草鞋銭となってしまい、銅像の建立は日の目を見なかった。

その後、大正十五年に地元の静岡新報社が企画したがこれも



長政銅像建立のために興行した際の相撲番付

実現しなかった。昭和七年春、静岡市の有志中沢糖村氏が発起人となり、「山田長政公頌讃会趣意書」を各方面に配布して、コンクリートの長政の建像を企図した。時あたかも満州事変が起きていたので、時期としてはまさしく時宜に適していたが、予定どおりには金が集まらず、それでもその記念コンクリート像を静岡市の大浜海岸の大浜公園前に建立した。

清水次郎長の銅像

甲冑姿の長政が巨象にまたがって、太平洋をきっと睨んでいる姿は、名物として人々に親しまれてきたが、今次の大戦で日本が敗れ、いよいよアメリカ軍が静岡市へも進駐して来るという前夜、何者かによってあとかたなく取り除かれてしまった。

聞くところによると、長政は侵略思想の持主で、シャムへ行って暴れ回った人物なので、進駐軍の意向をはばかってこわしてしまったのだという。

ちなみに、長政の銅像を建てようとして、ついに果たさなかった次郎長であったが、その次郎長の銅像が建立されたのである。清水市出身の代議士が各方面へ呼びかけ、次郎長とは少、中尉時代から縁のあった海軍中将小笠原長生子爵も賛成し、昭和三年七月二十二日に、清水市の次郎長の菩提寺の境内に、木綿の着物に素足でぞうりばきで、どっかと腰を下ろしている銅像が建立されたのである。やくざで銅像が建てられたのは、次郎長が初めてではなかろうか。山田長政よりやくざの次郎長の方が、先に銅像が建立されてしまったのである。

日本人町趾発掘

大正元年の十月、『日本近世史』の中の国史総論のなかに『邏羅日本交通史料』を書かれた内田銀蔵博士が、静岡市へ来訪され、県庁や市役所を訪問された。これはシャム政府の委嘱を受けて、山田長政に関する資料の調査に来られたのであった。

先にも述べたような事情で、シャム政府は自分の国の歴史を編さんするに当っても、日本やオランダ、イギリス、中国等にその資料を依頼するような状況であった。なお内田博士はその年の十二月に、京都帝大史学研究会で、「徳川時代ニ於ケル日本トシャムトノ関係ニツイテ」と題して講演をしておられる。

大正四年十一月には、大正天皇即位式の砌、長政に従四位を追贈された。

大正十年九月には、郷土史家後藤粛堂氏が、静岡市で「山田長政と其時代」と題して講演された。後藤氏は、倭寇研究では静岡県で第一人者として知られた人で、その倭寇研究のかたわら大正十年の秋、『静岡民友新聞』に「山田長政と其時代」を連載された。倭寇というのは、十三世紀から十六世紀にわたって、朝鮮、中国の沿岸を日本人が掠奪してまわった集団に対して、朝鮮、中国側が呼んだ呼称で、瀬戸内海や北九州の海賊が中心で、元来は私貿易が目的であった。これは豊臣秀吉の禁止で消滅した。

大正十二年の三月には、静岡市役所が、山田長政奉納戦艦図の標識を浅間神社境内に建てた。

日本で、とくに静岡で長政に関する顕彰運動が地味ながら続けられているうちに、バンコク在留の日本人の間では、三木栄氏を中心に日本人町趾の発掘と保存計画が練られていた。

三木氏は明治の末にシャムへ渡り、日本人町の趾はアユタヤのどの辺であろうかと、まず十七世紀のアユタヤの古地図を探し求めた。苦心の末、オランダのヘーグの文書館に残っている地図や、一六八五年（貞享二年、三代将軍家光の時代）にフランスの大使ショウモンが、ルイ十四世の使節としてシャムへ来た時の記録にある明細地図や、十七世紀の終りに日本へも来たオランダ人ケンペルの書に掲載されている地図等を入手し、それらの地図をたよりに寸暇を見つけては小船で探し回った。

「私はタイにいた何年間、日本人がバンコクを訪れると、必ずその人をアユタヤへ案内して、日本人町趾と推定される場所へ行って、発掘の必要性と、保存について力説した」

と、三木氏は生前、筆者に語られた。

三木氏は、長政の顕彰と日本人町趾史蹟保存の陳情書を、タイ政府に提出した。その頃は勿論のこと、日本人町趾と推定される土地はタイ人の所有であり、「日タイ協会」も設立されていなかった。タイ側からは、四つの諮問案が出された。

一、山田長政は記念すべき人物なりや、否や。

二、これを記念すれば、日タイ両国の親善を増進すべきや否や。

三、記念物を建設する場合、これを誰が監督するや。

四、建設するとすれば、いかなる方法にてなすや。

三木氏は早速、くわしく長政のことを説明し、さらに長政の略歴や、三木氏の著、英文翻訳の『長政伝』や、ハンフリートの『革命史話』等を英文とタイ国語にして提出した。

時は来た。発掘が行われる端緒を得た。

府立東京高校や拓殖大学で東洋史を担当しておられた東恩納寛惇教授が、文部省、南洋庁から派遣されて、東南アジア全域を視察し、昭和八年四月、タイへも立ち寄られた。

タイの文部大臣、矢田部公使、日本人会の協力を得て、三木栄氏と相談して発掘しようではないかということになった。

発掘は四月二十七日から開始された。

タイの農家で持っている土地の許可を得て、タイの労働者、日本人の三十歳以下の若者が、これに従事した。三木氏所有の地図によって推測される日本人町は、東西約二丁（二〇〇メートル）、南北約五丁（五〇〇メートル）、その面積は約三万坪もある。全面ほとんどジャングルで、鋭いトゲのある灌木が密生し、その灌木の枝には無数の赤蟻が巣をつくっている。藪の中のあちこちに三、四尺もある土盛りがあるので、これは何か由緒ありげだと思って掘ってみると、蟻の塔であった。

その当時、発掘に従事された日高洋行の日高秋雄氏は筆者に語った。

「それほど深く掘ったわけではないのですが、出てきたものはこわさないように注意されました。いちばん苦労したのは水でした。猛烈に暑いのですが川の水も水道の水ものめません」

タイでは良質の水がないので、飲料水には苦労する。日高氏はなおも続ける。

「バンコクから多量の飲料水を持って来るわけにもいかず、仕方なしに川の水を汲み上げて、明礬（みょうばん）を

入れると三時間ぐらいで澄みます。その上の方だけをすくってわかしてのみました」

最初の三日間はほとんどさぐりを入れる程度であった。四日目にようやく館趾の煉瓦の土台を発見して、折れた刀や具足の破片ともみられる金物を発見して一同勇みたった。さらにもう一日掘ることにした。その日に観音像やら、鉄の鎖、包丁、鍋、釜の破片、陶器の破片などが多数出土した。

一同を大いに喜ばせたのは、なんといっても観世音菩薩像の出土であった。これは薩摩焼で一・八インチの座像であったが、この観世音は御朱印船の護り神で、毎日船員の一人が香火や灯明をあげて、航海の無事と貿易の成功を祈願したものであった。

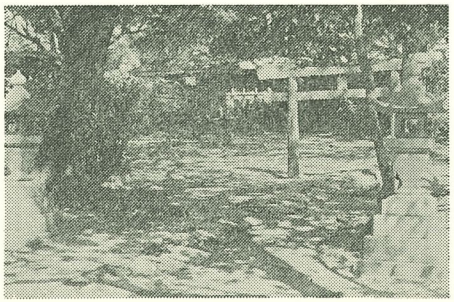
最初の試掘中、敷地の北側にある部分から、人間の頭ほどの石仏十二個、銅仏像の首三十二個、小仏像二十一個、骨壺、骨灰等を発見した。これは寺院の趾地であろう。

館をめぐる寺敷地、屋敷地等の区分から、日本人町の住宅地は約一万五千坪ばかりあったのではあるまいか、と推測される。したがって日本人町に居住していた人口は八千人ぐらいであろうと思われる。そのうち日本人は二、三千人で、他は現地人の従者や使用人でもあったであろう。その他、多摩川砂利に類するコブシ大の丸石が多数出たが、これはシャムから日本へ行く時、たくさんの積荷を持ってゆくが、帰りはそれほどの荷物がない場合、船脚を補うために、多数の丸石を買って俵につめて、船底へ入れて重しにしたのであろう。

シャムからの商品は鹿皮、鮫皮、火薬、蘇枋木等で、日本から持ち帰るのは、金、銀、銅等の加工品であった。それがため、正徳年間（一七一一～一七一五）、新井石白が幕府に登用されて「正徳の新令」を出して、金銀が海外へ流出するのを防止した。徳川吉宗が八代将軍になる前年のことである。

その他の出土品としては、ルツボの底から金具の破片も出てきた。これは金銀の吹きわけなどに使用されたものらしく、船具の修繕などもしたことがわかる。鉄鍋の破片などはその縁（ふち）の大きさや曲がり具合からみて、よほどの大鍋であったであろうし、強者（つわもの）どもが、はるかに故国を偲び鍋を囲んだであろうさまもうかがえる。

昭和十一年二月、安川雄之助氏を団長とする経済使節団が訪タイし、一万三千円を日本公使館に寄贈して帰国した。この金は日本人会で保管していたが、昭和十二年に日タイ協会が創立されたので、日タイ協会の保管金となり、日タイ協会ではこの日本人町趾一万二千平方メートルを買い、同協会の所有地として、遺趾として保存することになった。趾地にはまず日本の鳥居を建てることにした。その後、神戸の日タイ貿易協会から石灯籠が寄付された。昭和十三年五月、日本海軍の浅間、磐城の練習艦隊がバンコクへ来て、市中を軍楽隊の演奏を先頭に行進し、つづいて両艦の将兵は、阿里山の檜材を積んできたのを現地まで運び、たちまち「長政神社」を建立した。屋根は銅瓦であった。

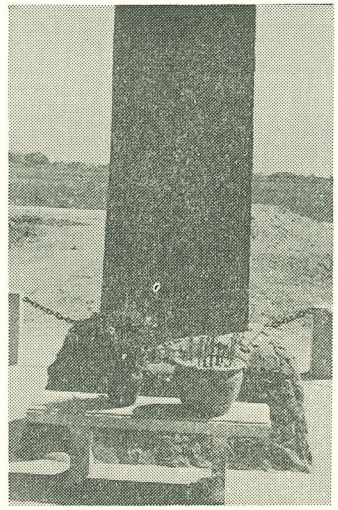


跡地に寄贈された石灯籠と鳥居

顕彰記念碑建立

その後、静岡市においても昭和十二年五月、静岡田中屋百貨店（現伊勢丹）で、静岡文化協会主催「山田長政顕彰展覧会」を開催し

た。同年九月には、たまたま帰国した三木栄氏が、葵文庫（現県立図書館）で「山田長政とタイ国」と題して講演された。また翌年には、静岡市が、静岡市馬場町の山田九平次宅趾に「山田長政旧宅趾」の標札を建てた。昭和十六年の秋、「山田長政の唄」がテイチク・レコードで、東海林太郎によって吹きこまれた。



旧日本人町跡の記念碑

昭和三十四年九月、静岡市本通六丁目西敬寺（長政生家の菩提寺）で、静岡史談会の主催で、「山田長政講演会」が開催され、郷土史家の村本山雨楼、法月吐志楼、飯塚伝太郎の三氏がそれぞれ講演を行った。西敬寺は現在は、静岡市大谷、静岡大学の隣接地へ移転している。

翌年の四月には、日タイ合作映画と銘打って、「山田長政　王者の剣」十四巻が大映から製作上映された。長谷川一夫、市川雷蔵、中田康子等の俳優が出演した。原作は村松梢風、監督は加戸敏であった。

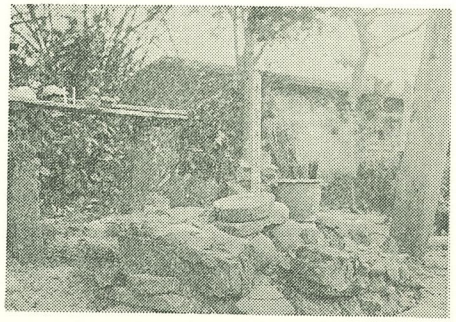
昭和三十六年の十二月には、静岡浅間神社で三木栄氏、村本山雨楼氏、武島正春氏の「山田長政講演会」を開催し、同時に「山田長政顕彰会」が結成された。

一方、タイ国でも昭和三十八年二月十日、日本人会創立満五十周年を記念して、アユタヤの日本人町趾に記念碑を建立した。「アユタヤ日本人町の跡」の文字は高野山の堀田大僧正、碑の裏には三木

栄氏の選文が刻まれた。

その頃から日本人の海外旅行熱が大いに盛んとなり、タイ国へも多数の日本人が訪れるようになった。バンコクへ着いて各寺院等の観光をすませれば、その次は必ずアユタヤを訪ねる。ところが、せっかく海軍の将兵が昭和十三年に阿里山の檜材をアユタヤまで運び、長政神社を建立したが、神社は檜材のため、白蟻に食い荒されて、跡には石ころだけが積まれているという無残な姿になり果てた。

鳥居だけは現地産のチーク材を使用したのでわずかに残っている。その荒廃ぶりを、アユタヤから帰り静岡市民に訴えたのが静岡の若手財界人であった。そのことを伝え聞いたのが、毎日新聞の柴田喜久雄記者であった。

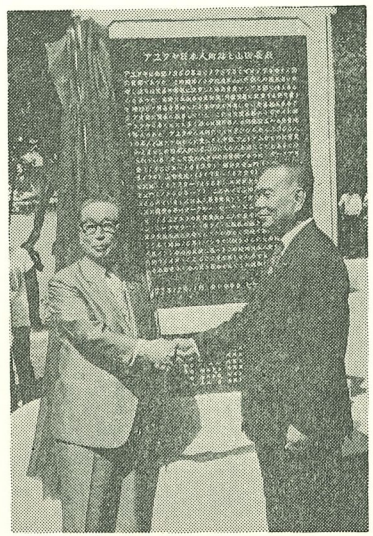


荒れ果てた神社跡

「山田長政が泣いています」

と、連日、毎日新聞紙上でキャンペーンをはった。郷土の歴史に深い理解を示す当時の静岡市長荻野準平氏は、「戦前は図南の英雄として、教科書にまで載り、戦後は侵略者として葬られた。今こそ郷土の英雄、山田長政を見直そう」と、市民に呼びかけた。

その結果、改めて昭和四十七年十月六日、浅間神社で「山田長政顕彰会設立総会」が開催され、今後の方針が協議され、アユタヤの旧日本人町跡に顕彰碑を建立することになった。そのことは、総会前から協議されていて、バンコクの「日タイ協会」とも



荻野市長とタイ日協会理事長プラシット氏

連絡がとられ、その基金もすでに集められ、記念の建設いっさいはタイの日本人会が受けもつことになっていた。

アユタヤにおける顕彰碑の工事は進み、十二月十一日に、アユタヤでその除幕式が挙行されることが決定した。市民から除幕式に参列のための訪問団が募集され、これに二十人ほどが応募して、十二月一日、その結団式を浅間神社前で行った。荻野市長、石川市議会議長、柴田記者、上野浅間神社宮司、山田家十六代目当主山田氏、松井氏（若手財界代表）、それに筆者などであった。

バンコクに到着した一行は、十二月十一日、バスと船でアユタヤに着いた。バンコクで協力した日本人会会長、西野順治郎氏、その他日本人会の方々、日本大使館からは栗田公使、浜田、吉川、草場、野瀬、和田書記官、タイ側からタイ日協会理事長、プラシット・ルリターノン氏や協会の幹部、サダブ・マーサリン、アユタヤ州総務部長等が参加した。

そのなかに約四十人ばかりのタイ人の青年男女がいるので、聞いてみると、タマサート大学法学部、シルバーコーン芸術大学の学生で、いずれも青年ロータリークラブ員であった。

式は、日本人会の手で建てられたお堂で、黄色い僧衣をまとった七人のタイの僧侶の読経ではじま

った。つづいて顕彰碑の除幕式。荻野氏とプラシット氏の手で幕が引かれた。高さ三メートルのタイ大理石で造られ、三面になっていて、日本語、タイ語、英語が一面ずつに刻まれている。日本語でその経緯が書かれた下には、この碑を造るまでに努力した静岡市の人々の名も刻まれていた。

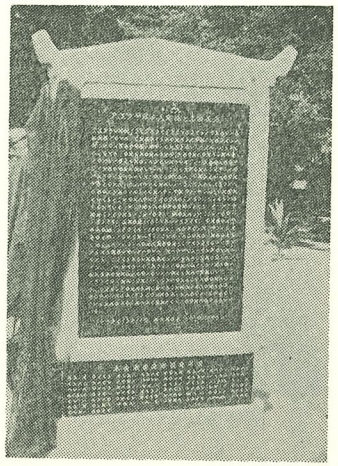
碑文には次のように書かれている。

「〝アユタヤ日本人町跡と山田長政〟

アユタヤは、西紀一三五〇年より一七六七年まで四一七年間タイ国の首都であった。この間、第十六世紀後半より外国人の渡来者は漸増し、彼等は貿易や布教に従事した他、義勇兵として王朝に仕えるものもあった。その頃日本は戦国時代から織田、豊臣の代を経て徳川幕府の時代に移行していた。当時日本は朱印状（外国貿易に従来する許可証）を発行して貿易を奨励したが、朱印状を所有しない交易船も東方アジア方面の貿易に従事していた。これらの貿易船のうち、タイの都アユタヤへ来たものも多く彼等は諸外国人と同様、国王から居留地を与えられた。アユタヤには、時代により八百人から三千人の日本人がいたと伝えられ、更にタイ、中国、ヴェトナムなどの従業員を加えると、この日本人町に八千人の人がいたこともあると伝えられている。そして次の人々がその首領であった。

一六〇〇年　オークプラ・純広

一六〇一年　城井久右衛門



山田長政顕彰碑

一六一七年　山田長政
一六三三年　糸屋多右衛門
　　平松国助
一六四〇年　木村半左衛門
　　アントニー・善右衛門

このなかでも山田長政（静岡市出身と伝えられている）は六百人の日本人義勇兵隊長として実力者となり、ソングタム王の寵愛を受け、オークヤー・セーナーピムツクの爵位を授けられた。

墓守をしてくれる老婆

一六二八年王の死後、長政は二人の王子に忠義を尽したが、ナコン・シー・タマラート（南タイ）に反乱が起きたので都を離れ反乱軍平定後、同地の大守となったが程なく同地で客死した。

一九三五年（昭和十年）、バンコクに設立せられた泰日協会は、オランダ東印度会社の文献に基きこの地旧日本人町跡を発見し、その内約七ライ半（一二、八〇〇平方米）を入手することが出来た。それ以来、泰国日本人会の協力援助をえてこの遺跡の保存に当っている。

一九七二年十二月

泰日協会長　ピヤ・マハイサワン」

日本人の中にまじって、式の最中から両手を合わせ、涙を流しているタイの老婆がひとり、とりわけ人目をひいた。チユ・ヌーイ・パソ・モさん（七十八歳）がその人である。

長政の墓のすぐそばに粗末な家があるが、四十年あまり荒れ果てた長政の墓守りをして、ここを訪れる人々とともに必ず線香を手向け、おまいりしていた。きっと、この老婆には、長政という人物のことはわかってはいないであろうが、偉い人にちがいないと思って、仏教徒の一人として長政の菩提に奉仕しつづけてくれたのであろう。

一行二十人は一〇ドルずつ出し合って老婆に献じた。

アメリカ合歓（ねむ）の大木が繁り、睡蓮（すいれん）、はす、ブーゲンビリアの赤い花咲くアユタヤの日本人町趾の除幕式はかくして終ったのである。

除幕式の後、筆者は一行と別れて、単独の行動をとった。まず、長政が毒殺――碑にあるように、タイ側では決して毒殺の文字は使わない――された六昆（現、ナコン・シー・タマラート）へ行かなければならない。なにしろ、バンコクからシンガポール行の急行列車で、一昼夜半もかかる。治安は決して良好とは言えない。ナコンから帰れば、戦乱の渦巻くカンボジアへ行かなければならない。長政の養子、オクンがカンボジアで戦死しているからである。ここで耳よりの話を聞いた。

前にも述べたが、先年六昆へ調査に行って来られた岩城雄次郎氏が、バンコクにおられるというのである。岩城氏は東京外語大学の出身で、コロンボ計画の海外技術協力団の一員としてバンコクへ来られ、タイの大学で日本語を教えておられるという。二度ほど連絡の後、お目にかかれた。

岩城氏は昨年の四月十六日、タイの有力新聞記者で、ナコン市出身のピンョー氏と六昆へ調査に行って来られたという。いろいろご教示をいただいて、タイ語と日本語の地図や日用語を書いていただき、一人でナコン行きを決行した。心細い限りであったが、それなりの成果を得たことは前述したと

おりである。カンボジアにも行った。ちなみに、岩城氏は現在、産業能率短期大学の教授をしておられる。

長政再評価とタイ政府の要請

昭和五十八年十月初旬の『静岡新聞』紙上に左の記事が載り、関係者の注目を浴びた。

〔バンコク四日時事〕発として、

「徳川時代初期の十七世紀初め、タイに渡り、アユタヤ王朝の親衛隊長を務めた山田長政を再評価する動きがタイで盛り上がっている。

プミポン同国国王の母堂が主宰する慈善団体が毎年行う恒例のチャリティー・テレビドラマに、今年は山田長政を主役にした歴史ドラマ〝ヤマダ〟の制作が決定し、在タイ日本人や日本人商工会議所などの援助を受けて今月二十日の放映に向け撮影が進められている。

ロケ風景を伝えたタイ字誌『ネオナ』は、長政像を〝優れた能力を持ち、国王を助けた実力者。日本人町の指導者として貿易や日・タイ親善に尽くした〟と褒めちぎった。

また、次期首相とささやかれるアチット国軍最高司令官は最近、バンコク北方七十キロのアユタヤにある旧日本人町に山田長政の銅像を建てたらどうかと関係者に持ちかけている。〝長政は勇敢で機転の利いたタイ最初の陸軍司令官〟という持ち上げぶりだという。さらに慶応大学出身の親日閣僚ソンマイ蔵相（タイ日協会会長）はこのところ、講演などで盛んに長政をたたえ、旧日本人町復

元構想を打ち出した。

長政は生前、王位継承問題に関与したり、また第二次大戦中には旧日本軍が長政をタイ進出の口実に利用したりして、その評価は必ずしも高いとはいえなかった。この突然の名誉回復の動きに、日本大使館筋は〝戦後最良の日、日・タイ関係を象徴するもの〟と胸を張っている」

この報道はタイ国内の事情を知る人々や、日本の関係者にとっては、まさに愕きであった。タイの国民は、山田長政の名前さえも、ごく一部の限られた人々以外は、知らないというのが実情であった。

昭和四十七年十二月、静岡市から「長政顕彰記念碑」の除幕式に列席するということにたいして、バンコクの日本の有力新聞の特派員は、次のような通信を本社へ送ってきた。

「タイ国民は山田長政に関しては、殆どの人が知っていない。今次の大戦で日本軍が不法にもタイ国へ侵入するに際し、我々は山田長政の再来である、と称したので、むしろ長政に対しては、侵略軍の隊長ぐらいのイメージしかないのが実状である」

一般の人々が〝山田長政〟の名を知らないというのは、たびたび述べているように、あらゆる面でタイでは実名を使わず、たとえば長政の官名、「オーヤ・セーナ・ピムック」を使用していることと、毒殺されたということを、かくそうとする配慮も若干は加味されていることもあろう。

そういうことをすべてはねのけたような、今回の報道である。タイ側からきわめて友好的な報道がなされて、その後の日本側の動きはどうであったであろうか。昭和五十九年二月十一日の『静岡新聞』の記事を抜粋してみよう。

〝タイの山田長政像　建立計画〟
〝静岡市も協力の構え〟
〝友好の懸け橋にと　高まる旧日本人町復興〟
とあり、つづいて本文は、
「静岡市が生んだ風雲児として知られ、タイの歴史上、最も有名な日本人である山田長政を再評価する動きがタイで高まり、日本人町のあったアユタヤに長政像の建立計画が進められているため、静岡市では、外務省から具体的な協力要請があり次第、市民の参加を得ながら、像建立に積極的に協力する方針でいる。
同市では四十七年、若手経済人が中心となってアユタヤに山田長政顕彰碑を建立している。タイでは、国王母堂が昨年、主宰している慈善団体が毎年行う恒例のチャリティー・テレビドラマの主役として、長政が登場して以来、再評価の動きが高まった。同時に、慶応大学出身の親日派閣僚ソンマイ蔵相が会長を務める日タイ友好団体〝タイ日協会〟がアユタヤに旧日本人町復興計画を打ち出し、協会内に設けられた小委員会の席上で、次期首相説もささやかれるアチット軍最高司令官が日本人町復興計画に合わせて、山田長政像の建立を提案、にわかに具体化した。
タイの日本大使館を通じ、像建立の協力要請を受けた外務省では、日タイ友好促進のため、ぜひとも計画を実現させたいとして、昨年暮れ、市岡克博外務審議官が長政の出身地であり、顕彰碑を建立した実績もある静岡市を訪れ、河合市長に協力を打診、河合市長も具体的な要請を待って協力の方針を伝えていた。

外務省では現在、放映されたチャリティー・テレビドラマのビデオなどの資料を準備中で、近く静岡市に正式な協力要請を行う予定。担当の同省文化二課では、タイ側でも長政像を設置する台座や周囲の庭園などを準備することになっているため、〝静岡市の肝いりで像を作製、寄贈してもらえれば〟と話している。費用は千万～千五百万円を考えているという。
それに対し、河合市長は〝日タイ友好のためにも協力したい。市の予算で（費用）を出せないわけではないが、性格上、市民一般から浄財を募って、それに市が協力する方法が好ましいと思う。顕彰碑設置当時の山田長政顕彰会は休眠状態だが、再構築も考えたい〟と乗り気。市長の要請を受けて、既に静岡商工会議所も協力の方針を決めるなど前向きの構えでいる」
というのであった。
昭和四十七年の顕彰会は、その後、会員中の郷土史家諸氏が死亡したりして、冬眠中であった。外務省から市岡審議官が来静して、河合市長と膝を交えて具体的な話し合いをしたことは、さらにこの計画が一歩も十歩も前進したことを示すものであった。
昭和五十九年三月十四日の『毎日新聞』夕刊には、バンコク発として次の記事が掲載された。
「バンコク北方約七十キロのアユタヤ日本人町復元構想がこのほど、日タイ両国関係者の間で本決りとなり、マスタープラン作りが進んでいる。
アユタヤ日本人町は、十五世紀末から十七世紀半ばにかけてタイに渡航した日本人の居留地。メナム河沿いの一万二千平方メートルの敷地に八百～三千人が常時住んでいた。現在は長政神社があるだけの荒れ地だが、土地を買い取ったタイ日協会（会長＝ソンマイ蔵相）とバンコク日本商工会議

所は、日タイ親善促進のため、日本人町跡を整備して観光開発することを決めた。これまでに、人形や模型によるアユタヤ王朝時代の再現、当時の生活振り、出土品を展示した資料館、山田長政銅像、日本交易船（実物大）、日本庭園などのプランがあがっている。

総経費は二～三億円。大部分は民間の寄付で賄われるもようだが、長政の銅像建立は出身地静岡市が負担する。関係者は年内にマスタープランを作成、一九八六年ごろの完成を希望している」

このマスタープランは実に結構なものであり、壮大である。交易船というのは御朱印船のことである。

さらに四月二十八日付の『静岡新聞』には、次の記事が掲載された。

〝山田長政像建立へ積極姿勢〟

〝自民市議四人、私費でタイ訪問へ〟

〝正式な協力要請に備え具体的計画を調査〟

「静岡市では四十七年、若手経済人がアユタヤに山田長政顕彰碑を建立した経緯もあり、昨年暮れ河合市長が外務省の依頼に協力を約束、経済会にも働きかけている。

こうしたなかで若手自民市議が日タイ友好と日本人町復元と山田長政像建立計画の調査を兼ね、来月（五月）二十二日から二十五日まで、私費でタイを訪問することになった。

訪タイするのは天野一、鈴木和彦、久保田新平、海野徹の四氏で、議員の一人は、〝市長の要請もあり、タイで進められている計画がどんなものなのか、静岡市が協力するとなれば、どういう協力が出来るのか、などについて、タイ日本大使館や日本人商工会議所などで詳しく聞いてきたい〟と話しており、タイ側からの具体的な正式協力要請に備えたい意向だ。

外務省文化二課によると、タイ側で考えている長政像は等身大の銅像ということで、費用は一千万～一千五百万円程度という。

これに対して河合市長は〝長政像の制作と日本から搬出するところまでは面倒をみる考えだが、とにかく、正式な要請がないことには、議員の帰国を待って、具体的な対応の準備も考えたい〟と話している」

市議会でも関心を持って各議員が訪タイして、アユタヤの日本人町をつぶさに見て、遠く長政時代の日本の歴史、国際情勢などに思いを馳せていただくことはきわめて当を得たことと思う。

新聞にたびたび報道されるので、一般の方々もバンコクやユタヤへ旅行される方が多くなった。長政にゆかりの深い静岡浅間神社の小野迪夫宮司も、五十九年の二月訪タイされ、アユタヤへ行かれた。帰国されて「私の旅」と題して『静岡新聞』に寄稿されたが、その一文の中で、長政神社あとの残骸が積まれたなかで、新しい木の鳥居に注目されたとのことであった。

その鳥居は島根県松江市の松南学園松江日大高校の奉納による、と書かれてあったことが筆者の胸を打った。

また、静岡県の蒲原町にお住いの実業家、山本幾太郎氏も五十九年の十一月にタイツアーに行かれアユタヤを訪ねられた。その時のことを、『静岡新聞』が県下の特定の方に随筆を依頼して掲載している「窓辺」欄に書かれた。

一般の方々のサイドが、長政をどう受けとめられるか、アユタヤの日本人町復興について、どう考

えておられるか等を推測するのに、好個の一文と信じるので、ここに引用させていただく。

「この十一月六日、タイの古都アユタヤを訪ねました。アユタヤ王朝の王宮跡は、やや観光化のきらいはありますが、大規模に整備されていて立派なものでした。しかし、少し離れた日本人町跡には、入り口に石碑と鳥居、線香の絶えない簡単な墓石、小さな売店に長政の肖像画が掲げられている程度で、十三年ほど前に参りましたときとあまり変わらないうら寂しい観光名所でがっかりしました。（中略）

長政についてはタイでも、一部の人のなかには逆臣との汚名があったようでしたが、現在タイ国最大の実力者アチット軍最高司令官と、政界の親日家ソンマイ蔵相等の長政復興の提唱で、タイ日協会、日本人商工会議所、日本大使館等が協力して大規模な復興計画が進められていると聞きました。

今回、橘大使とお会いしました時も、私が静岡県人だということで大変ご熱心にその推進をお話しくださいました。本年七月、この件を中心となって実際に企画されておられたK氏が来静の折、私がご案内し長政ゆかりの静岡浅間神社、小野宮司や河合静岡市長らとお会いし宝物館を拝観のあと、いろいろとご懇談いただきましたが、静岡市側も大変熱心に対応されているとの趣、拝承いたしました。

お聞きするに、復興計画は現地に資料館、日本庭園、当時の御朱印船の模型、長政の銅像建立等の素晴らしい計画とのこと、一日も早く完成することを願ってやみません」（後略）

民間の方も大きな理解をお持ちいただいていることがこれでもよくわかる。

静岡市の対応

静岡市においても長政の後援団体を設立しようとする機運が、一日一日と高まってきた。主として静岡市議団を中心にして、いままでかすかに存在していた「山田長政顕彰会」を発展的に解消し、新しく市内のロータリークラブやライオンズクラブ、青年会議所などに呼びかけることにした。議案はすらすらとまとまって、「静岡日タイ協会」を設立することになった。

昭和六十年二月二十五日に、静岡浅間神社でその設立総会が開かれることになった。市議を中心に前記の所属団体の方々が約八十人ばかり参集して、会長に前市長の荻野準平氏、事務局長に天野一市議が選任された。

設立の骨子として、

一、アユタヤ市との交流を民間レベルで進める。

一、アユタヤ日本人町再建計画を推進し、九月から募金活動を進める。

一、将来は留学生等も受け入れて、市民交流の促進に取り組む。

等のことを取り決めた。

つづいて同協会は七月に第一回のタイ国訪問団を派遣することになり、団員を募集した。団員には十二名が応募し、七月十九日に出発することになった。訪問の経過は、六十年七月二十五日の『静岡新聞』に掲載されたのでそれを転載しよう。

「静岡日タイ協会（荻野準平会長）の第一回タイ国訪問団が十九日から五日間、首都バンコクや山田長政ゆかりの地アユタヤ市などを訪れ、地元のタイ日協会（会長、ソンマイ・タイ蔵相）が進めているアユタヤ日本人町復元計画について詳しく説明を聴くとともに、今後の日タイ交流の進め方などについて意見を交換した。タイ日協会側からは〝日本人町復元計画推進のため、ぜひ資金援助を〟との要請があり、同訪問団も協力を約束した。静岡タイ日協会は九月ごろまでに総会を開き、募金運動をスタートさせる計画だ。

同訪問団が確認したところによると、日本人町復元計画は総面積約一万二千平方メートルの日本人町跡地内にアユタヤ王朝の歴史や日本人町の変遷を紹介する歴史学習資料館を建設するほか、約三千平方メートルの池を造成し、当時の御朱印船を浮かべたり、日本庭園を整備したりするという構想。日タイ修好百年とプミポン現国王が還暦を迎える一九八七年秋までに完成させる予定だという。

タイ日協会は現在、この計画推進のための中央委員会を設立し、その中に資料、募金小委員会を設けて活動を展開中、総事業費は約五億円が見込まれ、同協会日本国政府や全国レベルの日タイ協会、日本船舶振興会などに資金援助を求めている。静岡日タイ支援要請もこの一環で、近く正式な要請書を送りたいとしており同訪問団は〝五千万円ぐらいを予定しているのでは〟とみている。

同訪問団は久保田新平・静岡市議を団長とする十二人。タイ国滞在中、アユタヤ日本人町跡を視察したほか、タイ日協会の西野順治郎副会長や在タイ日本大使館浦部和好参事官等と意見を交換した。

〝現地での山田長政に対する評価は予想以上に高く、アユタヤ王朝時代を日タイ友好の最盛期ととらえる人が多いのを改めて感じた〟と、同訪問団久保田団長は、〝経済摩擦が問題になっている今、こうした文化交流を推進することは大切。構想実現のため、積極的に協力したい〟と話している」お膳立はととのった。河合市長が提唱しているように、民間レベルが日一日と積極的になってゆくことは、なんとしても喜ばしいことである。

おわりに

長政の銅像建立は、長政に関心を持つ人々の悲願ともいえるものであった。しかしいままで述べてきたような経緯で、今日までついに実現されなかった。それが思いもかけない今回の朗報である。まさに千載一遇の好機といえよう。だが、いくつかのむずかしい点が存在する。

タイ側の希望としては、仄聞するに、静岡市側で長政の銅像を鋳造してタイ側に送り出すことであるという。金さえ調達できれば、さして難事とは思えないようにみえる。ここで思い出していただきたいことがある。それは長政の肖像に関することである。それについても筆者は、きわめて好意的な見解をとってきたつもりである。だが今度の銅像は不評であってもおそらくは、再製ということは不可能であろう。慎重の上にも慎重を期さねばなるまい。まず長政の風貌、容貌を何を準拠として描くか……。

いずれ制作者が決定するであろうが、制作者の芸術眼に映ったイメージは尊重しなければならない

ことは論を俟たないが、このことが根本をなすことなので熟慮しなければなるまい。

次にその着衣である。どんな服装の長政にさせるか。日本の鎧、兜を着用させることなどは、論外であろう。現に、静岡市の駿府公園（駿府城趾）に徳川家康の鷹狩り姿の銅像が建立されているが、その着衣についても文句がつけられた。それは陣羽織の下に胴丸を着用していることだ。鷹狩りは一種のスポーツであり娯楽である。それなのに鎧の一種である胴丸を着用させるとは、なにごとであるか、という文句である。

駿府公園の家康銅像

筆者はそれについては、次のように申し上げた。

「あれはあれで正しい。家康にとって鷹狩りは、野戦の大家であった彼にとって、野戦の軍事演習である。家康は趣味と実益を兼ねて兵の訓練を行ったのであるから、軽装の鎧である胴丸を着用したのは、当然である」

と。ことほど左様に、着衣については留意しなければなるまい。三木栄氏がご存命であれば、そのご意見を伺うのが最良であると思われるのであるが。

ソンタム王の親任を受けて、オーヤ・セーナ・ピムツク（前衛軍司令官）に任命されたのであるから、シャム軍のその制服がいちばんよいのではあるまいか、と思考するのであるが。

次に「歴史学習資料館」を建設するというが、ここで一つ提案したいことがある。というのは、現在静岡浅間神社には、長政がシャムから奉納した「戦艦図」の模写が二幅ある。実物は前述したとおり、天明八年（一七八八）の大火で焼失したが、江戸の旗本榊原長俊が駿府在任中に模写しておいたのを、天明九年に浅間神社宮司新宮が、江戸へ行ってさらに模写してきたのが一幅。

榊原長俊が模写した「戦艦図」は嘉永五年（一八五二）に中津藩の軍学の師、島津定恒に伝わったが、この年、さらに旧佐倉藩の軍学家中沢親定に伝えられた。中沢家の子孫、中沢親之氏は医師として遠州森町に居住されたが、先祖から伝えられた「戦艦図」を大正十二年十二月、浅間神社に寄贈された。それで合計二幅あるが、いずれも社宝として珍重されている。

そのなかの一幅を日タイ友好のかけ橋として、大英断をもってアユタヤの資料館に寄贈されたらいかがであろうか。

その他、三千平方メートルの池を造成して、実物大の御朱印船を建造して浮かべるというが、これも歴史の現物史料として大いに価値があるものと思われる。

またタイからの留学生の受け入れも検討されるというが、静岡には静岡大学があり、常葉（ときわ）大学や東海大学等もある。

高等学校も量・質ともに整っているし、一般の家庭でもタイ留学生の受け入れには熱意を示される方々も多いと思う。

矢はすでに弦を放れた。

静岡はすでにルビコンを渡った。

これは単に静岡県人だけの問題ではない。今こそ改めて図南の英雄山田長政を偲び、日本人の矜持を広く示す時がきたのである。

山田長政関係年表

西暦	年号	紀要
一五九〇	天正一八 庚寅	山田長政、出生。
	文禄	この頃より暹羅国へ渡海の事始まる。
一六〇四	慶長 九 甲辰	八月、しやむろ（タイ国）居住の与右衛門に暹羅渡海の朱印を下す。
		これより以後元和四年までに三十四艘に朱印状を授く。
一六〇六	一一 丙午	九月、徳川家康暹羅国に書面並びに鎧太刀を贈りて奇南香と鉄砲とを求む。
一六〇七	一二 丁未	六月、駿府において大賀九郎左衛門に暹羅国渡海の朱印を下す。
一六〇八	慶長一三 戊申	十月、家康、本多正純に命じ鉄砲と焔硝とを促さしむ。
一六〇九	一四 己酉	八月、駿府において亀井武蔵守に暹羅国渡海朱印を下す。
一六七〇	一五 庚戌	この頃、山田長政暹羅国に渡る。
		七月、暹羅国王より、来歳の便船にて献品すべき旨の復書あり。家康両国間に厚盟を修すべき旨の書を贈る。
一六一一	一六 辛亥	八月、細川越中守忠興暹羅国よりの象牙、白絹、孔雀、豹等を家康に献ず（駿河記）。
一六一二	一七	七月、暹羅国船長崎に着

	壬子	す。錦襴、猩々緋、鮫皮等を献ず。家康船主を駿府城に召し南蛮諸国の事情を訊く。
一六一三	一八 癸丑	八月、木屋孫三右衛門に、九月、ヤヨウスに暹羅国渡海の朱印を下す。
		正月、長谷川忠兵衛に渡海の朱印を下す。
一六一一	元和 七 辛酉	六月、木屋孫三右衛門、暹羅国より帰朝駿府において家康に謁す。
		八月、暹羅の使節来朝、九月江戸城にて将軍秀忠に謁し、国書並びに方物を奉呈す。山田長政よりも本多正純、土井利勝に書翰を贈り、鮫皮、焰硝等を献ず。
一六二三	九 癸亥	七月、暹羅の使節来聘、国書を齎し、京都二条城、伏見城にて、秀忠家光に謁す。
一六二四	寛永 元	山田長政の貿易船、長崎に入津す。
一六二六	三 丙寅	暹羅王、使臣を遣わし、書を酒井忠世、土井利勝に贈る。
		山田長政、駿府浅間神社に奉納の戦艦図絵馬に「寛永三丙寅歳二月吉日」とあり。
一六二七	四 丁卯	山田長政の貿易船、長崎に入津す。
一六二八	五 戊辰	八月、天竺徳兵衛帰朝す。
		十二月十二日、暹羅国ソンタム王薨ず。
一六二九	寛永 六 己巳	九月、暹羅使節、江戸城において将軍家光に国書並びに進物を呈し、新王の即位を告ぐ。山田長政、老中酒井忠世に書簡を贈る。
		新王カラホム、王位に即く。山田長政、六昆国王に封ぜられしが、奸臣のため雄志空しく逝く。長政の子オクン王位に即きしが、国民の
一六三〇	七 庚午	

一六三三	一〇 癸酉	離反をうけ六昆を去り、カンボジアにおいて陣没す。
		九月、アユタヤの日本町焼き払わる。日本人カンボジアに逃る。
		天竺徳兵衛、再び暹羅に渡る。
		御朱印船以外の外国渡船を禁ず。山田長政の没年をこの年とする説もある。
一六三六	一三 丙申	五月、鎖国令布かる。
一六五六	明暦 二	五月、暹羅国の使船長崎に来るも通交を許可されず。後に至って許さる。
一七〇七	宝永 四 丁亥	天竺徳兵衛（後宗心）、「天竺徳兵衛物語」を著す。
一七一六—三五	享保年中	徳川八代将軍吉宗、浅間神社蔵長政戦艦図を江戸に召して台覧す。
一七三五	享保二〇 乙卯	松井経長、戦艦図を模写す。
一七五四	宝暦 四 甲戌	榊原長俊、駿府において戦艦図を模写す。
一七五八	八 戊寅	井宮町浄功院薬師縁起にこの仏像は馬場町山田仁左衛門暹羅より奉納とある。
一七八八	八 戊申	十一月、浅間神社類焼、戦艦図焼失す。
一七八九	九 （寛政元） 己酉	浅間神社の社司、榊原長俊に乞うて戦艦図を謄写して社宝とす。
一七九四	寛政 六 甲寅	五月、近藤守重、浅間絵馬の記の跋を認む。
一八〇八	五 戊辰	守重、かつて浅間絵馬戦艦図を伝写せり。
一八一二	九 壬申	山梨玄度、山田長政記を作る。
一八二三	六 癸未	高木伊勢守、駿府城代勤役中に戦艦図を写す。
一八二五	文政 八 乙酉	七月、耽奇会に榊原長俊模写の戦艦図を出品する。榊原翠雲の記を添う。
一八五二	五 壬子	榊原長俊模写の戦艦図は、中津藩の軍学の師、島津定恒に伝わりしが、この年旧佐倉藩の軍学家中沢親定に

一八七五	明治 八	伝わる。
	乙亥	大鳥圭介等、官命を奉じて
一八七八	明治一一	遣羅に赴く。
	戊寅	八月、静岡太田与兵衛、山
		田長政肖像を浅間神社に奉
		納す。
		十一月、明治天皇静岡御巡
		幸の砌、静岡県上奏書中
		に、浅間神社蔵本、山田長
		政記あり。
一八八四	一七	四月、修史局、興亡記を謄
	甲申	写す。「第十七世紀に於け
		る日タイ両国の交渉に付い
		て」
一八八八	二一	一月、タイ国と国交を締
	戊子	す。
		八月、村田丹陵、浅間神社
		所蔵の戦艦図を模写す。
		十一月、天野鎌太郎、長政
		肖像を揮毫浅間神社に奉納
		す。静岡馬場町僑居におい
		て謹写す。
一八九二	二五	清水次郎長、山田長政の建

	壬辰	碑のため静岡城内に大相撲
		を興行す。
一八九九	三二	竹柴其水作、山田長政誉軍
	己亥	配、東京明治座上演。
一九〇六	三九	三上参次博士、静岡市教育
	丙子	会において山田長政につい
		て講演す。
一九一二	大正 元	五月、高安月郊作長政史劇
	壬子	「自由王」大坂中座に上演
		さる。
一九一三	二	十月、内田銀蔵博士遣羅国
	癸丑	の嘱託にて長政史料取調べ
		のため来静す。
		十二月、内田銀蔵博士、京
		都帝大史学研究会にて「徳
		川時代に於ける日本と遣羅
		との関係に就て」と題して
		講演す。
一九一四	三	政尾博士、日本交通史料を
	甲寅	遣羅国皇帝陛下に献上す。
		十一月、大正天皇即位式の
		砌、山田長政に従四位を追
		贈さる。

一九一六	五	六月、史談会にて山田長政
	丙辰	の事蹟を講演す。
一九一七	六	春、海軍博覧会に桃木氏所
	丁巳	蔵の戦艦図出陳さる。
一九二一	大正一〇	九月、郷土史家後藤粛堂、
	辛酉	静岡市において「山田長政
		と其時代」を講演す。
一九二三	一二	三月、静岡市役所、山田長
	癸亥	政奉納戦艦図の標札を浅間
		神社境内に建つ。
		十二月、遠州中沢親之、榊
		原長俊の模写にかかる戦艦
		図を浅間神社に奉納す。
一九二六	一五	静岡新報主催の夏期講演
	昭和 元	に、今村静高教授、山田長
	丙寅	政について講演す。
		静岡新報社、山田長政の銅
		像建設を企図せしがついに
		成らず。
一九三〇	五	四月、法月俊郎「浅間神社
	庚午	絵馬物語」をPKより放送
		す。
一九三二	昭和 七	二月、中沢糖村、静岡にお

	壬申	いて、象に跨る長政のコン
		クリート像を製作す（現在
		はない）。なお静岡新報社
		のために立像を造り狐ヶ崎
		に建つ（現存せず）。
一九三五	一〇	山田長政公頌讃会発起さ
	乙亥	る。
		三月二十五日、アユタヤ日
		本人町趾に長政神社建立、
		伏見宮博英王殿下台臨遊ば
		さる。
一九三七	一二	五月、静岡文化協会主催
	丁丑	にて、山田長政顕彰展覧会を
		静岡市田中屋百貨店におい
		て開催、なお「山田長政と
		遣羅国」と題する守屋精爾
		の講演あり。また「山田長
		政を偲びて」加藤忠雄、P
		Kより放送す。
一九三八	一三	九月、三木栄、静岡葵文庫
	戊寅	において「山田長政と泰国」
		の講演をなす。
一九三九	一四	山田長政旧宅趾の標札を静

己卯　岡市馬場町に建つ（静岡市役所）。

一九四〇　昭和一五　庚辰　八月、篤田健二「南進の先覚者山田長政の話」を新愛知新聞に連載す。

十月、紀元二六〇〇年奉祝記念美術展覧会に小倉右一郎の山田長政像出陳さる。（静岡市追手町静岡県貿易館に置く。）（現存せず）

一九四一　一六　辛巳　山田長政の唄、テイチク・レコード、東海林太郎により吹込まる。

一九五九　三四　己亥　九月、静岡市本通六丁目西敬寺（長政生家の菩提寺）で静岡史談会の山田長政講演会開催、村本山雨楼、法月吐志楼、飯塚伝太郎等講演す。

一九六〇　三五　庚子　四月、日タイ合作映画、山田長政「王者の剣」十四巻、製作上映さる。俳優　長谷川一夫、市川雷蔵、中田康子等、原作　村松梢風、脚本　山田芳雄、監督　加戸敏。

一九六一　三六　辛丑　十二月、浅間神社において三木栄、村本山雨楼、武島正春その他の山田長政講演会開催。山田長政顕彰会発起さる。

一九六三　昭和三八　癸卯　二月十日、タイ国古都アユタヤのチャオプラヤ川岸に「アユタヤ日本人町の趾」記念碑建設、除幕さる。文字は高野山堀田大僧正。碑裏に三木栄撰文刻まれる。

一九七二　四七　壬子　十月六日、山田長政顕彰会設立総会、浅間神社にて開催。記念講演会、講師　村本山雨楼。

十一月三十日、同会第一回委員会、タイ国アユタヤの日本町趾に建設の顕彰碑除幕式等について協議。

十二月一日、顕彰碑除幕式

一九七三　四八　癸丑　参列のためタイ国訪問団の結団式を浅間神社で挙行。

十二月十一日、タイ国アユタヤにおいて本会の訪問団参列して日本人町顕彰碑の除幕式挙行される（訪問団二〇名は同月十日から十二月十七日まで、バンコク、シンガポールなど歴訪、史跡見学を行った）。

一月三十日、顕彰碑除幕式参列タイ国訪問団解団式を静岡クーポールで行う。

三月二十四日、山田長政顕彰会第二回委員会記念出版（仮題　山田長政伝記資料）の市補助金　三〇万円

三月二十七日、中央公民館にて「映画と講演のつどい」開催。

1　NHK制作　日本史探訪海外編　山田長政　2・3　アユタヤへの道・アユタヤの史跡を尋ねて　第一次訪問団制作。講演　長政ゆかりの地アユタヤを訪ねて　江崎惇。顕彰会会員印刷名簿できる。二〇三名

一九八三　昭和五八　同日　山田長政肖像画　油絵額縁とも滝静雄氏より顕彰会に寄贈される。

七月十九日、山田長政顕彰会、昭和四十八年度第一回委員会開催。四十七年度事業報告および四十七年度決算報告と四十八年度予算書承認。

九月、メナン河の日本人芥川比呂志演出、劇団「雲」が各地で上演。

十一月、タイ国国王母堂、チャリティ・テレビドラマで「山田長政」上映。多大の感銘を受け、アチット国軍最高司令官、ソンマイ蔵相等が、アユタヤの日本人

一九八四	五九	町復元を提唱、日本外務省に協力を要請。 十二月、外務省、市岡克審議官、河合静岡市長を訪問、協力を依頼する。 五月、静岡市自民党市議四名、訪タイ。タイ日本大使館、日本人商工会議所を訪問。山田長政銅像鋳造につき協議。
一九八五	六〇	二月二十五日、浅間神社において、在来の「山田長政顕彰会」を発展的解散。改めて「静岡日タイ協会」を設立。会長に前市長荻野準平氏、事務局長に天野一市議就任。 七月、「日タイ協会」第一回タイ国訪問団は久保田新平静岡市議を団長として訪タイ。バンコク日タイ協会、日本大使館等を訪問。具体的問題を協議。

〔著者略歴〕

江崎惇（えざき・あつし）

1915年，静岡県生れ。沼津中学(現沼津東高)を経て慶大に学ぶ。放送局勤務の後，文筆業に入る。歴史小説を多数発表。1978年，「蛇捕り字一譚」（新人物往来社）で第5回日本作家クラブ賞受賞。他に「徳川家康と女人たち」「実録川上貞奴」（いずれも新人物往来社）など多数。

現住所　静岡市大谷5660

史実 山田長政

昭和61年1月1日　初版発行

著者　江崎　惇　©1986
発行者　菅　英志
発行所　株式会社 新人物往来社
東京都千代田区丸の内3—3—1　新東京ビル
電話 代表(212) 3931 振替東京6-151643

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。　明邦印刷
（定価はカバー・帯に表示してあります）
Printed in Japan
ISBN 4-404-01322-1 C0093

新人物往来社［創立30周年 歴史読本創刊400号］記念出版

日本史を読解する文献・史料の総合事典。

日本史総覧 全5巻・補巻1

＊監修
児玉幸多 学習院大学名誉教授
小西四郎 元東京大学教授
竹内理三 元早稲田大学教授

＊編集委員
今井 堯 文化財保存全国協議会常任委員
大石慎三郎 学習院大学教授
大塚初重 明治大学教授
安岡昭男 法政大学教授

＊本書の特色
1『読史備要』『読史總覧』を凌ぐ豊富な内容と構成！
2最新の歴史研究の成果を網羅した利用度の高い備要！
3日本史研究者の総力をあげての執筆！
4八年の歳月をかけ、厳密な校訂・校閲を経て完成！
5幅広い読者を対象とした豊富な内容！
6歴史研究家に必備の書！

＊推薦者
池田弥三郎
井上光貞
大久保利謙
永原慶二
松本清張

体裁B5判豪華継表紙貼函入／定価各巻9800円＊内容見本呈

第Ⅰ巻■考古・古代（58年10月刊）
●各種遺跡一覧 ●各種古墳一覧 ●国指定史跡一覧 ●天皇一覧 ●歴代主要日記一覧 ●史籍年表／ほか

第Ⅱ巻■古代二・中世一（58年12月刊）
●国司一覧 ●荘園一覧 ●鎌倉幕府諸職表 ●室町幕府諸職表 ●守護一覧／ほか

第Ⅲ巻■中世二（59年2月刊）
●武家系図 ●戦国大名表 ●中世農民一揆年表 ●中世市・座一覧 ●花押・印章・蔵書印一覧 ●祭主一覧 ●仏教宗派表 ●主要神社一覧／ほか

第Ⅳ巻■近世一（59年4月刊）
●江戸幕府諸職表 ●オランダ商館長一覧 ●改易大名表 ●城下町一覧 ●藩校一覧 ●江戸幕府御用達町人一覧 ●国別地誌目録 ●琉球国職制図／ほか

第Ⅴ巻■近世二（59年6月刊）
●徳川将軍系図 ●藩主系図 ●能学・狂言・歌舞伎俳優系図 ●豪商系図 ●囲碁・将棋系図 ●国学・洋学系図／ほか

第Ⅵ巻■近代・現代（59年8月刊）
●明治初期太政官制一覧 ●閣閥一覧 ●府県知事一覧 ●条約年表 ●婦人団体一覧 ●宗教教派一覧／ほか

補巻■中世三・近世三（59年10月刊）
●諸寺長官等一覧 ●親王系図 ●公家系図 ●儒学系図 ●武術系図 ●郡司一覧／ほか